
からんちゅ♪魔術師の鐘 序章 ～ グランソルシエールの禁術書 ～

雛仲 まひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からんちゅ 魔術師の鐘 序章 ー グランソルシエールの禁術書 ー

【Nコード】

N6099F

【作者名】

雛仲 まひる

【あらすじ】

放牧に出掛けた先で沐浴中、羊飼いの少女と山羊飼いの少年は数奇な出逢いをする。幼い頃、故郷をドラゴンに焼かれ全てを失った羊飼いの少女。少年もまた、過酷な旅の末、定住始めた街を奇怪な魔物に焼かれ母を失ったと話す。同じ痛みを共有する少女と少年。少女さえ自覚しない程の淡い恋心が生まれた時、少年は体内にドラゴンの力を宿しドラゴンが少年の育ての母だと知り少女は恋と憎しの狭間で揺れる。二人は、誰にも築けない絆で結ばれている。それ

は……。悲しい約束。「俺はお前以外の奴に討たれてやるつもりはない。だから、お前が俺以外の誰かに討たれる事は許さない」

く グランソルシエールの禁術書 く 第零話（前書き）

こんにちは 雛仲 まひるです。

ゴーレム共々からんちゅ♪を楽しんで頂けたら幸いに思います。

では

からんちゅ♪始まるよ。

く グランソルシエールの禁術書 く 第零話

序章

鉄の鳥籠

遠い過去、羊飼いは夕陽を見て天候を知り風と共に放牧の旅を続けていた。

山羊飼いは空を見て天候を知り風を読み放牧の旅を続ける。

——今も尚。

五百年程前、両者が辿る道は大きく分かれた。

“神”

唯一無二の存在にして全ての創造主と、その使者たちの信仰。

「私は善き羊飼いであり、また世の罪を切り取り除く神の子羊である」

曰く、羊は羊飼いに導かれ広野を歩き、羊飼いは人を導き、神に導かれ楽園に誘われるのだ、と。

「彼ら山羊飼いは邪神たちが使わした魔物使いであり、山羊は豊穡を喰らう魔物である」

曰く、山羊は山羊飼いに導かれ荒野を歩き、山羊飼いは魔物を操り楽園を枯れさせるのだ、と。

——とある場所。

「覗き魔さん！ 良かった生きていてくれた」

アウラの潤んだ瞳が、白銀にブルーマールが映える髪の少年を映し出した。

「どうやって……ここに？」

「ひっそり、こっそり潜り込んだ。俺はどんな場所でも一人なら何とか行ける」

「どうして……、あの時、私は覗き魔さんを——」

「待たせたなあ？ アウラ。助けに来た」

アウラの言葉を遮り、少年が屈託のない微笑みを向けている。

「何故？ ……危険を冒してまで、私なんかを……ばかあ！」

アウラは瞳を潤ませ、やわらかく微笑む少年を見詰めた。

「そんな顔をするかなあ。約束したからアウラに何かあったら力を貸すって言っただろ？ さあ……封印を」

「封印を解いたら覗き魔さんの身体が……」

「心配する事はない」

「でも、一度封印を解いた時から覗き魔さんの右眼は、もう——」

「循環じゅんりんの力を使わずアウラを連れてここを出るのは、ちょっと骨が折れる。アウラに傷を負わせず、ここから逃げ出す自信はない」

「でも……」

「大丈夫、前より循環かあさんの力は馴染んでる。だから早く封印を」

「……は、はい」

アウラは、小さく頷いて震える腕を少年の背中に回した。

小さな手に持っている節くれた杖に括られた鐘が、からんゝと小気味良く音を奏でる。

アウラは、少年の左首筋に浮かび上がった六芒星の中に描かれた

紋章に口付けを与えた。

封印は眩い七色の光を放ち解き放たれ始める。

少年の姿は以前と違い、見た目に大きな変化は見られない。
すでに変ってしまっている真紅の右眼がいつそう眼光炯炯がんこうけいけいとして
いる。

左眼はやさしい少年の碧眼のまま、やわらかい輝きを放っている
ままだ。

「さあ帰ろうか」

少年がやわらかく微笑んだ。

少年の言葉と笑みが不安に満ちた胸を柔わらげ、溶かして往って
くれる様にアウラは感じた。

——帰れるんだ。

悲しい時の涙でも寂しい時の涙でもない。

嬉しい時に流す涙とも違った、涙が溢れ出し紫水晶の瞳から頬を
伝って流れ出す。

——安堵の涙。

アウラは頬を赤らめ俯いた。

「さあ、行こうか。アウラ」

でも、ちよっぴり嬉しい。

「うん」

アウラは小さく頷いた。

「……何か、下の方が騒がしいですね」

「ああ、始まったみたいだ」

少年は、そう言い残し七色に輝く紋章の光に包まれた。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

く グランソルシエールの禁術書 く 第零話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 く
ー）く

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第一話

羊飼いの少女と山羊飼いの少年

雲高く抜けるような青い空が遥か彼方まで広がっている。

街中をころころ小気味の良い軽い乾いた音色を響かせながら、郊外に敷かれた街道に向い主に誘導された白い群れがのんびり移動している。

街を囲む石積み of 分厚い外壁に削り出し形を整えた石をせり上げて造られた丸天井のアーチが口を開けていた。

白い群れが大きめのアーチを潜り、遠くに見える山々の方角に延びる街道に出た。

「その旦那」

白い群れの主は一瞬、立ち止まり肩をぴくりと上下に揺らした。

「羊飼いの旦那」

再び旅商人に声を掛けられ主が、ようやく自分が呼ばれている事に気付き、右手に持っている自分の背丈より頭一つ分程長い節くれた杖を左右に振ると括り付けられた魔除けと獣除けの鐘が軽い間の長い音色を響かせ奏でた。

旅商人に近付く羊飼いは随分小柄だ。

「プラム」

主は深く被ったフードの中から、やわらかい鈴の音のような声で従えている白と黒の牧羊犬の名を呼ぶ。

主人の指示を受け取った牧羊が羊の群れの前に出ると吠えたて群れを停止させた。

「何か御用ですか？」

旅商人が小柄な羊飼いの声に目を丸くしている。

声変わりを控えた少年よりもやわらかく、透き通る鈴の音色のよ
うな声と身に纏っているフード付きの茶色いローブの外からでも分
かる程、華奢で随分小柄な羊飼いだ。

小柄な羊飼いは、フードを深く被り俯いたまま肩を小刻みに揺ら
した。

肩の揺れは握っている節くれた杖に伝わり鐘を揺らしころころ音
色を立てる。

「羊飼いの旦那……、少年。旅の無事を導いて頂きたい」

小柄な羊飼いは更に肩を震わせていたが、小さく息を吸い込み「
はあ」と小さな溜息を吐く。

「ええ、よろこんで」

やわらかい透き通るような鈴の音色のような声で答え、古の放牧
者たちから今日まで放牧を営んでいる者たちの間に、長きに渡って
伝わり続けている儀式の準備を始めた。

羊飼いは準備を整えると伝統的な言葉を述べながら、軽い乾いた
鐘の音色を鳴らしながら、杖を見えない魔物でも被つかのように儀
式が始める。

旅の章より、守護と導きの祈り。

「カノ k a n o ・ オウ o f ・ ライソ r a i d o . エイワズ e i h w a z ・ アン a n d ・ アルジ a l g i
ズ z ・ トウ t o ・ ライソ r a i d o ・ ティワズ t e i w a z . ライソ r a i d o ・ オウ o f ・ ウンジ w u n
ヨイ j o ・ ゲーボ g e b o 」

（旅の始めに守護と星の導きを。旅人に喜び満ちる旅の贈り物を）

羊飼いが間の長い音色を奏でながら、その音に乗せるかのように
古語の交じった口上を述べ、腰に下げていた角笛の野太い音を響か
せ儀式を終えた。

「旅の導きに感謝します。あなたに神の御加護があらんことを」

旅商人が自分より、ずいぶん幼く見える羊飼いに向かい丁寧に感
謝の言葉を述べ、黒く汚れた銅貨を数枚手渡した。

銅貨を小さな手で受け取った羊飼いは、深く被っていたフードを
首の後ろに払い頭を深く下げた。

ロープの中に隠れていた桃色の長い髪が、牧草を撫でる風に持ち上げられ宙を泳ぐ。

触れるだけで切れそうな程細く、撫でれば溶けてしまいそうな程やわらかそうな髪がロープの外で、サラサラ流れ出し風の中を遊ぶ陽の光の下で仕事をする羊飼いは思えない程透き通るような白い頬が、ほんのり上気し赤みを帯び桜色に染めている。

はちめんれいろう
八面玲瓏な顔立ちに大きな紫水晶を思わせる瞳が瑞々しく輝き、
ころころ良く動く。

整った細い眉の間から瞳を抜け通った鼻筋から形の良い鼻へ伸び、その下にある薄桃色の小さな唇が形を変えた。

「ありがとうございます」

旅商人に礼の言葉を述べ言葉を続けた。

「神の御加護と旅に幸運のお導きがありますように」

羊飼いは小柄な身体を折り常套句を述べた。

その様子を見た、街道を とうほんせいそう 東奔西走行き交う他の旅商人たちが次々と手綱を引き荷馬を街道脇に寄せ、小さな羊飼いに声を掛け出した。

長蛇の列も一息ついた頃、少女の脇を通り掛った旅人が羊飼いに声を掛けた。

「かわいい羊飼いのお嬢さん。私にも旅の安全を導いて貰えないだろうか」

「はい！ よろこんで」

小柄な羊飼いは、やわらかく微笑んだ。

桃源郷が広がっていた。

豊かに膨れ上がる山々とその間に出来た深い渓谷。

視界に広がる山々とその深き男たちの冒険の谷間に――。

「お、溺れるっ……。あれ？」

白銀にブルーマールが美しく映える髪 of 少年が跳ね上がるように草の茂みの中で目を覚まし声を上げた。

「だれ！」

やわらかい鈴の音色のような声が聞こえる。

少年が声のする方向に視線を向けた。

「……桃、二つ？」

低い滝の下に広がる水面に桃色の物体が見える。

桃色の周りをやわらかい日差しが水面に乱反射し白金の光を生み出していた。

――その中に少年は本物の桃源郷を見たような……気がした。

背中の腰程まで伸びた桃色の髪が水に濡れ、しっとりとした艶を出し髪から零れ落ちる水滴は朝露を浴びた草木のように陽の光を乱反射し輝いている。

白金に光る水面から、整った顔と細い首から小さな肩と綺麗な線を描く鎖骨、控え目に膨らんだ胸元から曲線を描いた引き締まった腰、すらりと白く細い足が伸びていた。

透けるように白く見える肌が体内を巡る液体を透かし赤みを差して桜色に染まっている。

少年の瞳は白金に輝く水面で沐浴を楽しむ女神を映し出した。

少女は、愛くるしい大きな紫水晶の瞳を潤ませ固まっている。

――無論、生まれたままの姿で。

瞬きを数十回程繰り返す間、たつぷり少女は固まっていた。
止まっていた少女の時間が動き出し薄めの形の良い桃色の唇が、

へにやりとへの字に形を変え細めの眉の先は下がり、瞼の奥にあしらわれた紫水晶を思わせる瞳の^{まなじり}からは薄っすら湧き上がる液体で湿り潤ませている。

「……きゃあ——！ プ、プラムううう——」

桃色の少女が叫び声を上げた。

「何て言うか……、ごめん。うむっ？」

森の中から茂みを揺らす音と獣の荒い息使いが背後に近付いて来ている。

少年が振り返った瞬間、茂みを割って白と黒の獣が少年目掛け飛び出した。

「ウォーン！」

その数瞬後、尻に鋭い痛みが走り悲鳴を上げる。

「痛てえ——」

少年の尻に長い毛並みの見事な尻尾が生えた。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第二話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 >（
ー）<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第二話

山羊飼いの罌。

少年は河原に突っ伏していた。

白と黒の立派な毛並みの尻尾を付けて――。

「あれは不幸な事故だ。こいつを放してくれないかなあ？ 痛でえでえ」

「嫌です」

少女は水中から膨らませた頬を 一瞬出すと短い言葉を残し再び、眼元まで顔を沈めた。

「何て言うか、早く水から上がった方がいい。身体を冷やすから」

少年の微笑みが少女を見て目を反らせている。

不思議と、その笑みに悪意を感じない。

「の、覗き魔さんがいるから出れないんです！ ……せ、せめて背を向けてください」

「気にして貰わなくていいんだけど……俺は」

「プラム！」

少女は、相棒で友とも言える牧羊犬 の名を口にした。

時に、頼りになる少女のナイトでもある プラムが、ぎりぎりと鋭い犬歯を剥き出して顎に力を加えた。

「痛っ！ 消えるから緩めて下さい」

少年は尻に生えている尻尾を恨めしげに見つめて言った。

「俺の尻は、そんなに美味しいのかなあ？ 痛てえてえ」

「あの――、早く何処かに消えてくれませんか？」

少女は、控えめな胸の膨らみを両手でしっかり隠し、水中に身体を沈めたまま少年を睨んだ。

「早くこいつを放してくれませんか？」

「私の視界から消えてくれたら考えます」

「う——ん、消える事は難しい。俺が魔術でも使えれば別だけどなあ。残念な事に俺は魔術師じゃない。まあ、魔術師が存在したのは遠い昔の事、今は魔術師なんて存在も闇の中だけど」

暫しの間、少年の微笑みは消え去り、難しい顔をしていたが思い直したかの様に微笑みを戻し言葉を続ける。

「……分かった。茂みの向こう側に行くから」

少女は、少年の言葉にぴくりと小さく反応し身体を震わせた。

「ま、魔術……です、か……」

「そう、魔術」

「……そんな事より、早く向こうに行って下さい！ 覗いちや駄目ですよ」

「しない……と思うぞ。そんな事したら尻がもげそうだ」

「覗いたらお尻じゃなく、今度は喉笛いきます」

「喉笛は勘弁！ 死んでしまう」

「……」

少女は無言のまま、矢を射るような眼で微笑んだまま話す少年を睨んだ。

「分かった。茂みの中に行くから」

少年は尻の痛みに堪え、這ように森の茂みに入ってしまった。

暫く間を置いて少女が水面から出ようとした時、間の抜けた声で少年は茂みの中から声を掛けた。

「なあ——。こいつ牧羊犬だろ？ きみは羊飼いなのかあ？」

茂みに入った少年は尋ねたが返事はない。

「なあってばあ——」

返事は返ってこない。

水が流れる音と僅かに衣擦れの音が聞こえて来るだけだった。

「お前、牧羊犬だよな？」

帰ってこない少女の答えに切なくなつて尻に生えている尻尾に話

し掛けた。

プラムが「ガルウウ」と低い唸り声を上げている。

「痛っ、なんつたけ？ そうそう、プラム放しなさい。痛いから……、あ、あのプラムさん？ ものすごく痛いんですけどおおお——。そうだ！ 餌やるから離れなさい」

少年は肩に掛けた鞆から黒いパンを取り出しプラムの眼の前に差し出した。

「このパンは、俺の全食糧だ。良い子だから放しなさい。プラム」
プラムは依然として犬歯を剥き出し唸り声を上げている。

（誰が見知らぬ人間に、ましてや主人の沐浴を覗いた覗き魔なんぞに苦いライ麦パン如きで懐柔されるものか！ 麗しい御主人様の身を守る事が、今の自分の役目）

と言わんばかりに牙を喰い込ませてくる。

「おまつ……、い、痛つてえて、パンやるって言つてただろうがあ！ 俺の全食糧を！ すなわち俺の明日を——」

少年の言い方が気に入らなかったのかプラムが更に顎に力を加え締めつけた。

「ぎゃああ——」

少年は断末魔を上げながら、もんどり打って地面を転げる。
激しく転がりまくった結果、ついに茂みを突き破り河原の方に転がり出した。

そのおかげかどうか解らないが尻尾は離れてくれたようだ。

ほっ、としたのも束の間。

手に持っていたはずの黒いライ麦パンが川の方に勢い良く転がり視界から遠ざかって行く様子が見える。

「待てえお願いっ、待って、俺の明日——！」

少年は尻に残る痛みも忘れ立ち上がり追い掛けた。

少年はようやく追い付いたライ麦パンに手を伸ばしたが、願いも空しく川の流れに飲み込まれていった。

「ああああ、待って……て、言ったのに——」

少年は「はあ」と溜息を吐き地面にへたり込んだ。
暫くうな垂れていた少年の顔が跳ね上がる。

「まだ、あれがある」

ライ麦パンの悲劇に暫し茫然となったが、気を取り直す。

平静を取り戻した少年の耳に大きな石の陰から衣擦れの音が聞こえる。

身体に着いた水気を綺麗に拭き取って衣服に手を伸ばそうとしていた少女が少年に気付いて、ぽかんとした顔で見ていた。

「どうも……」

「ええ！？」

少女が、慌てた様子で身体を拭いていた布で身体を隠し石に立て掛けられていた節くれた杖を取り小気味良い音色を響かせ振り回し始めた。

からん ♪ からん ♪ と小刻みな鐘の音が森の中を響き木霊する。

「プラムううう。殺^やれ」

紫水晶の瞳を潤ませ、あの名前を呼んだ。

「これも事故だ！ 見てない見てない、決して覗いてた訳じゃ……」
少年は首をぶんぶん首を振って悪気のなかった事を主張するが……

…。

その先は声にならなかった。

先程離れたばかりの尻尾が、また少年の尻に生えた。

「うおおあああ！ 痛っ、見るつもりはなかったんだ。ほんと、ごめん」

「見るつもりはなかった？ じゃあ、見たんですね、私の裸……、二度も覗いていたのですね！」

「覗いてたんじゃないって、見えたんだ」

「見たんだ……、私の裸」

「ちよっと」

少女の微妙な誘導に少年はすっかり「ちょっと」と答えてしまった。

「ちょっと？ うそ、ちょっとじゃないです」

「ちょっと……、まるつきり見えました！ 控え目な桃二つ」

少年は開き直った。

少女の水晶石の様な瞳から滴が零れ落ちる。

「もう、お嫁にいけない……ばかあ——、覗き魔——！」

少女が涙混じりの声でそう叫びながら節くれた杖をぶんぶん振り回した後、真っ直ぐ力いっぱい突き出した。

杖に括られた鐘が、小刻みに からん ♪ からん ♪ と音を響かせながら少年の股間に命中した。

股間に命中した杖の先で『もぎゅ』と不可解で哀れな音を立て少年は気を失い地面に倒れた。

河原に少年が転がされている。

少年が目覚ますし上体を起こそうとして身体が自由にならない事に気が付く。

自分が持っていたと思われる毛布でぐるぐる巻きにされ縛られているではないか。

少女が身形をすっきり整えて少年の前に仁王立ちしている。

「俺は、こんな趣味は持ってないんだけど……、どちらか言つと——」

少女の怒声が少年の掻き消した。

「五月蠅い！ 覗き魔、変態！」

少女が、からん ♪ と鐘の音を響かせる杖で頬を突きながら言つた。

覗いた訳じゃない、見えてしまったんだから仕方がない。

とんだ誤解だまったく酷い言われようだと少年は思う、と同時に開き直ってとんでもない事を言ってしまったような気がし己の愚かさを呪った。

「ここで魔物か獣の餌にでもなってください」

少女は言い終わると木々が広がる方向へ歩き出した。

「ちょ、ちょ、ちよつと待った!」

「何ですか? 私、忙しいのですが」

両手を腰にあてがうと、少女が足を止め振り返った。

口を尖らせ、頬にいつぱいの空気を孕み、膨らませ睨みつけている。

「忙しい人が沐浴してたのか?」

「こ、これから忙しくなるんですう! プラムも呼んじやったし、長い時間あの子たちを放りばなしで心配です。それに野宿の準備もありますから」

「やつぱり、羊飼いだっただ。俺は山羊飼い。名前は——」

「覗き魔さんの名前なんか知りたくもないです。それに私は羊飼い、魔物を扱う山羊飼いなんかと一緒にしないでえ」

少女が声を荒げて言うのと再び歩き出した。

「これ解いてえ、それにそっちには——」

「知らない!」

少女は獣道に足を踏み込み、茂みを払いながら森の中へ消えていった。

「きやあ——、助けてえ——」

森の中から少女の悲鳴が聞こえた。

「だから、言おうとしたのに」

少年は、尺取り虫のように地面を這って少女の下に向かった。

To Be Continued

く グランソルシエールの禁術書 く 第二話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 >（
ー）<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第三話

あなたは魔術を信じますか？

森の中、少年の目の上に大きな枝に二つ、小ぶりの桃が実っている。

「人の話を聞かないから」

少年は、縄に足元をすくわれ木に吊るされている少女に微笑み掛けた。

「こ、こう言う事は早く言ってください……」

「言おうとしたらきみが聞かずに入っちゃたから、はあはあはあ」

「ちよつと！ 笑い事じゃないですよ。な、何故こんな所に罫を仕掛けたんですか！」

「獣道だからに決まってる。きみも何故獣道なんかを通るかなあ？ あつちに細いけど人が通れる山道があるのに」

少年が顎をしゃくって方向を差した。

「そんな事……知ってます。ここを抜ける方が草原まで近いんです。まったく何を捕ろうとしてたんですか。野宿をするならそれなりの準備をして……」

少女は言い掛けると、はっとした顔をした。

「立ち寄った街で食糧を分けて貰う事ができなかった」

少年は、屈託のない微笑を浮かべたまま答えた。

「……」

——少年は山羊飼い。

『彼ら山羊飼いは邪神たちが使わした魔物使いであり、山羊は豊穣^{じょう}を喰らう魔物である』

唯一神の教えが広まった世の中、誰もが知っている記述だ。

「夕飯に兎でも捕ろうと思って、食糧が無くなりそうだったし夕べ仕掛けておいた。あつ！ ちょっと前に無くなっただけ、きみの犬にあげようとして川に落として魚の餌かな？ 今頃は」

——少女は羊飼ひ。

『羊は羊飼ひに導かれ広野を歩き、羊飼ひは人を導き、神に導かれ楽園に導かれる』

「先程は酷い事を言つてすいません…… よろしければ私の食糧をお分けます……」

少女が思い直したような控え目な声で謝った。

「それはうれしい」

少年は、微笑を絶やさずに言った。

「その前に助けてくれませんか？」

少女は、天地逆さまの状態で木にぶら下がっている。

「どうやって？」

少年は、毛布にぐるぐる巻きにされ縛られている。

少年が縄を緩めようと、もそもそ身体をくねらせ動き回る。

しかし、きつちり縛られた縄は緩まない。

地面に擦りつけ摩擦で切ろうとしても簡単に切れるものでもない。

「縄を切るから貸してほしいんだけど…… ナイフとか縄を切れる道具持つてるかなあ？」

少年は、畏の縄を切る為、また自分の身体を戒める縛られている縄を断ち切ろうと刃物を持っているか少女に尋ねた。

「持ってますが——」

「俺がきみの手が届く所まで何とか縄を近付けるから切ってくれ」

少女の言葉を遮って少年が言い立ち上がるうと身体を動かす。

なんとか立ち上がるうとして転ぶ。

簀巻きにされ両足は揃っていてバランスが、何とも取りづらい。

「なんだか、気持ち悪くなってきました。早く降ろしてください」
天地逆さまに吊るされたままの少女が身体の不調を訴えている。

それを聞いた少年は、少女の顔色を窺がって見た。

少女の顔色が幾分か青ざめ悪くなってきた事がある事がある。

長い時間、宙づり逆さまの状態にいるのだから当然の結果だ。

「頑張つて、なんとかするから」

少年が少女に声を掛けた。

すぐさま立ち上がろうと少年が身体を起しに掛かる。

しかし、簀巻きに縛られた身体は自由が利かず、思うように立ち上がる事が出来ない。

何度転んでも立ち上がろうとしても上手くいかない流石に疲れてきた。

身体を縛る戒めのせいで倒れても受け身が取れない状態で転び、したたかに頭を地面に打ち付ける。

少年の顔から滲み出した血と汗と土で汚れ赤剥けた擦り傷が、ヒリヒリと痛む。

息も大分荒くなってきた。

「絶対……、はあ、はあ、助ける……から」

少年は唇を噛みしめ、額で地面を支え身体をゆっくり引き寄せ、面積の狭い両足の裏でしっかりと地面を感じながら、首を揺する反動と背筋の力を一気に使い跳ねるように立ち上がった。

勢いを失った駒のように回りながら必死にバランスを取る。

ふらふら揺れていた身体が徐々に安定していく。

「だあっ——！ 成功」

少年は、時折止めながら慎重にしていた息を一気に吐き出した。
幸い少女の近くに立ち上がる事が出来た。

僅かに近寄るだけで手が届く距離。

少年は、再び倒れないよう細かく刷り足で少女に近寄った。

「さあ、切ってくれ」

血と汗と土で汚れた眉目秀麗な顔を満面の笑みに変えて言い放った。

「すいません……、ナイフ……草原に置いてきた鞆の中でした」

少女が申し訳なさそうに紫の瞳を閉じる。

「……」

「……」

両者の間に暫しの沈黙の時間が流れた。

沈黙を静かに破るように小さな声で少女が重い口を開いた。

「覗き魔さん？ あなたは魔術を信じますか？」

少女が荒唐無稽な事を言い出した。

「魔術ねえ……」

少年は暫く黙り込んだ。

「他の羊飼いたちは、そんなの『まじない』だって言いますが、覗き魔さんも山羊飼いなら遠い昔から伝わる術式を何か知っているはずなんじゃあ……」

少女が不安そうに見ている。

「魔術が存在していた事は知っている。母さんに聞いた事があるし実際、一度だけ使われた事もある」

「使えないんですか？ なんかこう——、バアンと」

少女が大きく両手を広げた。

「俺は魔術の存在を知っているだけで使える訳じゃない、きみは使えないのか？」

「私は……」

少女が何かを言い掛けて唇を結んだ。

「私ができるのは魔除けの術式だけですから、何かを造り出したり破壊したり変化させたりはできません。魔除けのまじない程度の火くらいしか出したりできません」

「火？　それで十分だ」

「でも、私知っている魔術？　かも知れない魔除けのおまじないの火でどうやって？」

「火が出せればそれでいい、魔術は応用だと母さんは言っていた。使えるんだろ？　魔術」

「今まで誰にも……ある人にしか見せた事はないです……、怖くて「教会？」

少女は小さく頷いた。

「もし、魔術が使える事を知られれば……、考えるだけでどんな仕打ちを受けるかと思うと……」

「分かった。大丈夫、誰にも言わない。もし何かあれば俺も力を貸すから」

「……ちから？　を」

「封印されていてほとんど使えないけど、力の封印を解けるのは魔術師だけだ」

「もしかして魔——」

少年は少女が言い掛けた言葉に声を重ねる。

「内緒だ」

少年は微笑みで、そう少女に答えた。

少女は、逆さまになっても手放さなかった節くれた杖で、今にも途切れそうになる朦朧もうろうとする意識と戦いながら、地面に小さな五芒陣を描き始める。

「逆さまだと難しいですね」

少女はそう言いながらも陣を描き終えた。

「kano・uruzカノウルズ」

（火よ。力を）

少女が古語を口にし鐘の音に乗せるように杖を揺らした。

静かな森の中に、からん、からん——♪　と鐘の音が響く。

描かれた五芒陣の中に火が熾り初め、小さな焚き火程の火が揺れ

ている。

少年はバランスを崩さないように、ゆっくりしゃがみ少しづつ慎重に身体を火に近付けていく。

幸い毛布は動物の皮を剥いだもので火が直ぐに燃え移りそうになり。

湧いたダニや蚤のみの駆除に湯で煮詰め、天日に干しを繰り返しているうちに毛もほとんど抜け落ち、最早毛布と呼んでいいのかわからない程だった。火にあぶられ麻縄がじりじりと音を立て始め、次第に身体戒めを緩め始める。

戒めが緩んだ事を感じ取った少年は、渾身の力を込めて腕を開いた。

やがて麻縄は、パチンと弾け少年の戒めを解いた。

少年は自由の戻った身体で少女の身体を背中側から自分の体で支えながら抱え、腰に帯びていた山鉈で罾の縄を叩き切った。

少女の足は糸を切った操り人形のように地面に落ちる。

「大丈夫か？」

少年が尋ねると少女は下を向いたまま震えている。

「どこか痛むのか？」

少年の言葉に少女が強く節くれた杖を強く握り締めわなわな震えながら言った。

「手」

「手がどうした？ 腕のどこか痛むのか？」

少女は節くれた杖を徐々に持ち上げている。

「手……、どこを掴んでるんですか？」

少年が手の平を握った。

手の平の中に、ちょうど納まる程の弾力に富む、やわらかい感触が広がっている。

「ピーチパイ？」

少女は、ふらつきながらも節くれた杖を高く振り上げ、天を指した杖を振り下ろす。

森の中に、からん♪ と小気味良い鐘の音色が響き渡った。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

く グランソルシエールの禁術書 く 第三話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 く
ー）く

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第四話

ドラゴンの循環鱗 じゅんりん

蒼い月夜の中、荒野の一面に焚火が揺れている。

「当分の間天気、良さそうですね」

少女が蒼い夜空に輝く星空を見上げて言った。

「近いうちに雨が降る、それも風を伴って」

少年は山から吹く風を見て、少女に微笑み掛けた。

陽が西の地平線に沈む前に森を出る事が出来た。
主の口笛を聞き取って集まった山羊たちも、今は羊の群れに溶け込んでいる。

白と黒が基調の牧羊犬は主の膝に顎を置き咽喉元を撫でられ気持ち良さげに眼を細め、自慢の尻尾で地面を掃いている。

「そんなはず不是吗。夕陽は綺麗なオレンジ色をしていましたし、夜空もこんなに蒼く星たちも綺麗です。覗き魔さんも放牧者なら天候くらい読めそうですけど」

少女は、不思議そうに少年の顔を見詰める。

「読めるさ、少なくとも柵の中で羊を追うようになった今の羊飼いはより正確に読める自信があるけどなあ」

少年が瞼を弓のように反り返した微笑みを少女に向けた。

「あつ！ その笑顔で何気に馬鹿にしていますね！ 覗き魔さんは何を根拠に言ってるんですか？」

少女は頬に空気を孕ませ口を尖らせた。

「天候を確実に当てる事なんて誰にも出来ない、ただ、空気が重くなつて来ている事が分かるだけかなあ」

「空気？ ですか？」

少女が不思議そうな顔をして尋ねた。

「ああ、空気が重くなると空を飛んでいる有翼獣は低く飛ぶ。気圧が変わったから。昨日、鳥たちが低い空を飛んでいた。今日は更に低い所を飛んだ。空気が重くなれば風が出る」

「羊飼いだって風と共に旅をしていたんですよ？ 風が変わった事くらい気付いてます」

「変わった事くらい誰にでも分かる」

「覗き魔さんは、なぜ空気の重さが分るのです？ その前に空気に重さなんてあるんですか？」

少女は、興味津々の眼を少年に向け尋ねた。

「それは空気に重さがあるらしい……からなんだけど、羽根を持ち空を飛ぶものたちは空気の重さが変わった事を感じて低いところを飛んでる」

「空気に重さ？ 風の方が変わった事は私にも分ります」

「水が高いところから低い方に流れるように、空気も圧力の高い方から低い方へ流れる、それが風。今、どっちから吹いてる？」

「山の方から……、です」

「山の方から吹き下ろしている風が徐々に強くなって来ている。圧力の高い方から低い方に流れる空気の流れつまり、風が近付いて来てる事だ」

「ううう……」

少女は額に指を当て唸った。

少年が言葉を続ける。

「山肌にぶつかり、天に向かって昇る、風は昇ってる間に陽に温められながら細かい水の粒を吸って大きくなり空に雲を作るんだ。元あった空気の場合に周囲の空気が流れ込んで天にまた昇る、繰り返し返されて急速に雲は大きく重なり合って、重さに耐えかねた空気が溢れ出すと雨になって地上に落ちて来るんだ」

少年が話す雲を掴むような会話に、少女はつい聞き入ってしまった。

「空気が雨に？ それ本当ですか？ 何故、覗き魔さんはそんな事を知ってるのですか？」

「内緒。それより何処の街から来ているのか知らないけど、激しい雨が続けて降るかも知れない。街に水路があるなら水門を閉めるように言ってやった方がいい」

少年は笑みを消し真剣な眼を少女に向けた。

「それ、本当に、本当に本当ですか？」

少女は、何度も聞き直し真剣な顔で少年の話に夢中で聞き入っていた。

「さあ、本当は俺にもよく分からないなあ」

「はあ？」

少女は捨てられた猫のように、きょとんとした顔をして息を吐いた。

「でも、このあたりに雨は降る、それは本当だ同じように街の方も降るかは分からないけど、水は川を流れるから」

少年が頬笑みを消し少女に言った。

「そこまで言うなら……、分かりました。予定を切り上げ明日の朝、街に戻ります。食糧も後僅かになっちゃいましたし……、まさか三日分も一人で食べちゃうなんて思いませんでした。」

「在る物が無くなるのは自然の摂理だから仕方がない」

少年は屈託のない笑顔を向けている。

「まあ——、知らないうちに消えたみたいに言わないでください」
少年の一顰一笑に少女は半ば厭きた微笑を浮かべて言った。

「じゃあ、こんな顔をすればいいのか？」

そう言い、顔を顰めてから少年は笑った。

静かに夜が更けていく。

蒼い月夜の下、二人の笑い声は焚き木を揺らすかのように、夜の静寂の中に木霊した。

星が瞬く星空の下に時折、笑い声と軽い乾いた音色が交る。

ひと塊りになった羊とそれに交じる山羊の群れが冷える空気の中、身を寄せ合っている。

焚火の薪が弾け火の粉を天に捲き、消えていった。

「この現象と同じような事が起こっているだけだ。大きな規模で」
天に昇る火の粉を指差し少年が呟く。

「風と雲のお話ですか？ 覗き魔さんは誰も考えない面白い事や誰もを感じない感覚を沢山知っているんですね」

少女は好奇の視線を向ける。

「……母さんが残してくれた力の恩恵だ」

「ちからの恩恵？」

「じゅんりん循環の力さ」

少年が満面の笑みで答えた。

「じゅんりん？ いったいどのような力だと言うのですか？」

少女は聞きなれない少年の言葉を反芻し、尋ねた。

「ああ。ドラゴンの力を持つ鱗の核かなあ」

「どらこん……の循環？」

「そうだ。体内に封印されていて殆ど使えないけど」

「覗き魔さんのお母様はドラゴンスレイヤーだったのですね！ 凄い！ 女性の身で凶悪な魔獣ドラゴンを退治しておられたのですね？ 魔術が何かを用いて……きつとそうですよね？ だから魔術の事に詳しいかったですね」

少女は自分に言い聞かせるように言葉を継ぐんだ。

ドラゴンの存在など、文献と口伝でしか知らない。

「そうじゃない。ドラゴンが育ての親なんだ、循環を与えてくれたのも魔術を使って封印したのは母さんと魔術師だそうだ」

「うそ……、ドラゴンがお母様だなんて……」

少女の顔からまるで汐が引くみたいに血色が消え、小さく震えだしていた。

「母さんに産み落とされた訳じゃないけど……、どうかしたのか？
小さく震える少女に少年が尋ねた。

「……きつと人違いよね、違ったドラゴン違いよね。きつとそうよ」
少女は熱病でうなされているかのように震え、揺れる震えを抑えようと両腕を交差し自分の身体を抱きしめた。

「寒いのか？ まだ夜は寒いからな」

少年は自分の毛布を差し出した。

同じ言葉を繰り返し、少女はただ震えている。

「母さんがどうかしたのか？」

「の、覗き魔さんのお母様は今何処に？」

少女は震える声で少年に尋ねる。

少年が微笑みを向け、自分の胸のあたりを指差し示し言葉を続ける。

「母さんは四年前に死んだ。住んでいた街を救おうと魔物の群れと戦って……結局、街は魔物が吐いた炎で焼かれてしまったけどなあ……、俺は母さんから貰い受けた循環のお陰で運良く生き延びる事ができたけど……」

「四年前……死んだ？ 街を守って？」

少女の瞳は虚空を見つめるように宙を彷徨わせていた。

「ああ、流石の母さんも循環の力抜きではドラゴンの姿に戻っても野を埋める程の魔物たちと刺し違えるのがやっとだった」

「ハングラードの神罰……。あまりにも有名な話です……。遠い昔に魔物使いと弾圧され追いやられた山羊飼いたちが多く住んでいた東の辺境の街。自分達を追いやった者たちに積年の報復として魔物呼び出したハングラードと近隣にあった五つの村を壊滅させた天

空より『神』が放ったオレンジ色の閃光」

少女は静かに眼を閉じた。

胸に広がる悲しみに、ハングラードで起こった悲劇に眼を覆ったようにも何かを想い出しそうとしているように……。

暫しの間、黙祷を捧げ少女は静かに口を開く。

「七年前の冬……、覗き魔さんとあなたのお母様は何処にいて何をしていたか覚えていますか？」

「俺と母さんがハングラードの街に住みだしたのは七年程前だったかなあ？ それまでは放浪の旅をしていた。その頃にはもう山羊を連れて旅をしていたけど」

「北方の山間に広がった裾野にあったグリーンベルという街を知っていますか？ その頃から放牧をしていたのですね？」

「グリーンベル？ 知らないなあ……、北には行った覚えはない。確かにその頃から山羊は連れて放浪の旅をしていた。でも俺が山羊飼いになったのは母さんが死んでからだ」

「良かった。やはり、ドラゴン違いだったのですね……」

少女は、ほっと胸を撫で下ろした。

「ドラゴン違い？ それはないかなあ？ この世で古今東西、真にドラゴンを名乗れる存在は母さんしかいない」

「そ、そんな……炎を吐く凶暴な竜リリオンは野にもいると言っじゃないですか」

「それらは、きっと眷属か竜族の亜種だろうさ。姿かたちが似ているからなあ」

少女は、ぎりつと奥歯を噛みしめ、難しい表情を浮かべ水晶石の眼を瞼の奥に隠し先程、胸の前で撫で下ろしていた手を止め強く握った。

「グリーンベルは私が生まれた街。七年前……ドラゴンに焼かれた街。家族を焼かれ全てを失った場所です」

少女は、消えゆく鈴の音のような切ない震える声で少年に告げた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

く グランソルシエールの禁術書 く 第四話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 >（
ー）<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第五話

戒め

つい先程まで続いていた賑やかな笑い声は、蒼い闇に吸い込まれた。

時折、羊たちに付けられた鐘が軽い音を立ては、夜の闇に消えていく。

プラムは、尻尾で地面を払いながら主の膝から愛くるしく潤む黒い瞳で心配そうに見ている。

プラムのへこたれていた三角の耳が、ぴくんと立ち上がりあたりの様子を探り始め、急に落ち着きを失くし、闇の一点を見つめ吠え出した。

「どうしたの？ プラム」

虚空を彷徨わせていた少女の瞳が、何時もと様子が違う吠え方をするプラムに気付き視線を動かした。

プラムは、闇に向い吠え続けている。

プラムとほぼ同時に少年も気配に気付き地面に耳を当てている。

「何か近付いている……。風下からこっちに向かって……。一つ、二つ……。数が多い、音が舞ってる」

少年は、まだ遠くに感じる気配を探っている様だ。

眼も闇に慣れ月明かりもある。

しかし、そうとはいえ夜の闇は昼間と比べる事が愚かな程視界を遮っている。

空気を伝う音は風に流され風上にいる少年たちに届かない。

「いったい何が近付いているのです？」

少女が不安げな表情を向けている。

「一つは無数の軍馬……。もう一つは分からない。でも大丈夫いざと

なれば何とかするさ」

地面に耳を当てながら少年は懸命に気配を探った。

「一つは馬鉄が大地を蹴る音、複数……、もう一つ……、魔物かそれとも魔獣か、でかいが静かだ、まるで風のようにしかも速い……追われてる？ のか」

得体の知れないものは、ぐんぐん加速し馬鉄の音を引き離そうと速度を上げたようだ。

少女は不安が勝ったのかプラムの首に回している片方の手を離し少年のシャツを摘んだ。

「大丈夫。さあ、羊たちと森に隠れている、普通の獣くらい魔除けの術でなんとか出来るだろ？」

少年は眼光炯炯がんこうけいけいを向けて言った。

「覗き魔さん？ あなたまさか！」

少女が心配そうに瞳を揺らして震える声を絞り出した。

「もうそこまで来ている早く行け、俺が囫になる」

「そ、そんな事……駄目です。一人で囫になるなんて、絶対に駄目です」

少女が仇かも知れないドラゴンの循環ちからを宿す少年に向って強い口調で言い放った。

「俺一人なら何とかなる。伊達に辺境の土地を旅していた訳じゃない。だいじょ……！ 不味い伏せろ！」

地面から伝わる音は馬鉄が地面を掻く音を残して消えた。

少年は声を荒げて言った。

「えっ！」

少女が悲鳴を上げる事すら出来ず視界は、星が躍る蒼い夜空に向いた。

少年は、少女に飛び掛かり地面に伏せさせ、重なるように少女に覆い被さる。

二人と羊たちの頭上を一陣の風が通り過ぎる。

山羊を含めた三十頭程の羊の群れごと視界の外から飛び越えた風

が近くの大地に触れた音が数回聞こえ、その先で停止した。

「なに……あれ？」

少女の視線が夜空に向いた際、恐らく少女は飛び越えた姿を見たであろう、ものの怪を少年の眼が捉えた。

「さあ？」

月夜の中、月明かりを浴び輝く見事な毛並みをした巨大な狼の姿。重い荷馬車を引く、馬体の大きい荷馬を軽く凌駕する程の巨体が月夜の闇に浮かび上がっていた。

薄暗い闇に光る琥珀色の鋭い視線を向けてこちらを見ている。

その獣の視線に呼応するかのように少年は首筋に痛みを覚えた。

少年は琥珀色の眼光に縛られ動けない。

プラムも吠える事を止めていた。

纏わり着くような圧倒的な恐怖が身体を縛る。

左首筋の紋章が七色の光を放ち始め熱く痛い。

少年はその痛みで封印がはつきり浮かび上がっているのだと感じた。

その光に、ただならぬ畏怖を感じてか巨大な狼も動かず身構え、その場で牙を剥き出しにしたまま動かずにいる。

「ド……ラゴン、魔法陣に囚われてるみたいです」

少年の首筋に現れた紋章を見て言った。

少年に守られるように抱きしめられた少女の眼に映るもの。

「これがドラゴンの力とその循環を封じた封印の魔法陣……？ ドラゴンの姿を野の竜や書物に残された記述から想像してました。思ってたものより何と言えいいのか……綺麗、こんなに綺麗なもの見た事ないです」

「こんな時に綺麗かあ？」

——少年は動けない。動けば少女が狙われる。

「六芒の中に描かれた紋章は魔法陣の檻に囚われたドラゴン、姿は

記述にあるものに似ていますけど、それ程禍々しい姿じゃないです」

「こんな時に、何を呑気な事を言ってるんだかなあ」

「大丈夫、何だか怖くない。大丈夫」

少女はやわらかい声で呟いた。

「どつちがだ？」

——少年は狼から眼を逸らせない。

視線を外せば殺^やられると本能が……、熱くなつた首筋の循鱗が教えてくれる。

「ドラゴンもあの狼も……怖くないです。それに循鱗の光がとても温かいような気がして不思議だけど……とっても穏やかな気持ちになつてきます」

「ひとつ聞いていいか？ きみは魔術を使えた。なら、それを発動する源と魔法陣の仲立ちを出来る者なのだと思うんだよなあ、きつと」

「覗き魔さん？ 魔術の存在は知っていると云いましたよね？」

「ああ、確かに言っただけ……聞いているだけだ。魔術師の存在も母さんから、実際に眼にした覚えはない。循鱗を封印した時の事も」
「どれくらい知っているのです？ もしかして、本当は使えるんじゃない——」

「俺には使えない。知つていてもそれを扱^{すべ}える術を持つてないからなあ。何かが起きる動き出す。何らかの力が働いているって事、それは道理だ。」

——嫌な汗が吹き出し頬を伝う。

「魔術も同じだと？」

「切り出した大きな石を運び出そうとする様で例えれば、人や馬が力の源、石とそれを繋ぐ縄は言わば仲立ち、そして石は陣、魔術の

源までは分からないが、限られた人だけが持つ何か特別な意志か或いは、自然界が生む膨大な力を仲立ち出来る者、もしくは両方を出来るものが魔術師。魔法陣は、力を呼び出すための指標じゃないかと思うんだ」

巨大な狼と向き合ってから、それ程間が過ぎてないはずなのに膠着した時間がやたらに長く感じる。

「私に何をしろと言うんですか」

「封印の魔法陣を解いて貰いたい」

「どうやって」

「魔除けの陣を解読した事はあるよなあ？」

——封印が疼き始める。

「あります。一応……魔術書も」

「なら、封印に使われた魔法陣を解析してくれ」

「き、急にそんな事言われても出来ません。解析するには時間が無さ過ぎますし今の私には知識が足りません」

「きみなら封印を解ける！ 気がする」

「どうして、そんな根拠の無い事を自信満々に言っんですか！ 覗き魔さんは」

——何故が分かる。

「封印が疼く、こんな事は初めてだ。まるで解放して貰える事が分かってるみたいだ」

「無理です。こんな複雑な陣見た事がないです。六芒陣ですよ！

これ」

「そうなの？ 俺見た事無いから、見えない場所にあるし」

「鏡使えばいいじゃないですか」

「あつ！……そ、そんなに都合よく鏡なんか持っている訳がない、浮かび上がる事なんて滅多にないんだから」

「……あつ！ 気付かなかったんですね」

——張りつめていた緊張感が緩んでいく、心地よい程度に。

どうやら、ものの怪を目の当たりにして身体が強張る余り堅くなっていたようだ。

「ああ、気付かなかったさ。悪いが、それより解読してみてください」

「もうやってます……魔術は応用でしたよね？」

「そうだと聞いている」

「……何故？ 解るんだろう……」

少女は解読できる自分に驚いている様子だ。

「解るの？ 案外簡単な魔術ってさ」

「そんな事無いです。こんなの解ける方が不思議です。それを解けている自分が一番びっくりしてます」

軽く伏せ身構えていた狼が巨大な身体を更に伏せ低い姿勢で構えた。

「来るぞ！ 早く」

「もう少しです」

少年が少女を抱き起こしながら膝を立てた。

「解けました！ でも、こんな事……出来ません」

少女の顔は茹でた蟹のように赤くなっている。

「迷っている暇はないようだ」

「わ、わわ、分かりました……、眼を閉じて貰えませんか……」

「それは出来ない、注文だ」

——眼を離す訳にはいかない。

——刮目しなければならない。

——対峙している眼前の『敵』と。

「光栄に思ってください……は、初めてなんですから……その……キッ……ス……」

少女が、鈴の音が消えるようなかわいらしい声で口早に言つと俯いた。

「何が？ 初めてだつて？」

「……キ、キキ、キス……です」

裏返つた声で少女が答える。

「そう？」

「もう——、知りません！ もっと時と場所を選びたかつたなあ、はあ——」

少女が、かわいらしい溜息を吐き小さくつぶやき、何時も持ち歩いている節くれた杖を振り魔除けの鐘を響かせた。

To Be Continued

く グランソルシエールの禁術書 く 第五話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 > 「――」
<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第六話

グリンベルの悪魔^{ドラゴン}

蒼い夜の薄暗い闇の中に巨大な狼が伏せている。

大地を掻く馬鉄の音が近付いて来ている。

膠着状態が続いていた空気は静かに破られた。

巨大な身体に見合わない俊敏な動きで少年に襲い掛った。

少年は少女を抱え地面を転がる。

「しまった。羊たちが……」

少女は解読を既に終えたのか、異様な程集中し小さな声で呪文らしき古語を唱えている。

少女に辺りの様子も少年の声も届いていないようだ。

「くそっ!?!」

巨大な狼は大きな口を開き、牙を剥き出したまま。

しかし、羊たちの群れを襲う事はなかった。

狼が少年と少女の方に向き直った。

その大きな口からは、流暢な人の言葉が飛び出した。

「小僧、久しいな」

「……」

「無理からぬ事が、ドラゴンの奴めが儂^{わし}のところ^{ところ}に貴様を連れて来たのは随分前の事だ。小僧よ！ お主の母親の事は風の噂で耳にした。残念な事だ」

「……!?!」

少年に抱きかかえられた腕の中で少女は、もそもそ動きながら口から発する古語に合わせ、懸命に杖を振り鐘の音を奏でている。

「……終わりました。最後に詠唱して……あ、あの……その……く、

くくく、唇に……くく、口づけを与えて頂き……わ、私が覗き魔さんの首筋の六芒の紋章に口づけを与えると封印は解けるはずです」

少女は、封印を解く準備が整った事を告げ顔を熟した桃のように赤らめ俯いた。

「ansuz・perth・nauthiz・othila・fe
ヒュー ティウス ソウエイ ウルス
hu・teiwaz・sowelu・uruz」

（秘め事を受け取りなさい。戒めを放ち所有者の下に導き、完全なる力を）

少女は杖を振り鐘の音に呪文を乗せた。

からん♪ と軽い鐘の音色が響けた後、胸のあたりに杖を引き寄せ、杖を握っている拳にもう一方の手を覆い被せた。

初めての行為に、恥ずかしさと緊張から震えを抑え込むように杖を握る拳を手の平で包む。

そして、静かに瞳を閉じその瞬間を待った。

「……あつ！ 思い出した。えっと……北の風狼^{ウォルフス}だけか？」

「北？ うおるぶす？」

少女は、胸に嫌な違和感を覚えると同時に嫌な予感が脳裏に過ぎる。

胸の前で祈るように両手で杖を握りしめ瞳を閉じたまま眉間を寄せた。

「なに、呑気に眼を閉じてんだ？」

「……」

少年の言葉に少女は頬えを膨らませた。

「すまんな小僧、折角の再会だったが……五月蠅い奴らが来たようだ。またな……長々話している暇はなさそうだが……気になった事だけ言っておく。お主、母親の循環を上手く引き出せてないようだな、その戒めを解けば力を得るに容易いが戒めは、あまり解かない事だ。何のための戒めか良く考え、自身の意志である程度使えるようにしておけ、戒めを解くのはそれから良いな」

巨大な狼は身を翻し二人に背を向け森の方へ、ゆっくり歩き出し

た。

「惜しかったな小僧、また機会があれば話そう。お主とドラゴン（はは）の昔話をな」

風狼が失笑の混じった声で言うと巨大な身体を軽快に走らせ、森の闇へと消えていった

「惜しかったですね？ 覗き魔さん」

「だから、なんだっけ？」

「封印の解き方聞いてませんでした？」

「きみも聞いてなかったのか風狼が言ってたろ？ 無闇に解くなつて」

「覗き魔さんから口づけ出来るのは、初めて封印を解く時だけです。よ。その後は首筋の六芒の紋章にするだけです」

（うそですけど）

少女は、おどけて様に少しだけ舌を出して少年を茶化した。

「そんな事、一言も言わなかったじゃないか」

「言いませんでしたから」

（だって……、うそですもん）

「……それより私たちも逃げた方が良いのでは？」

風狼に森へ逃げ込まれ追うのを諦めたのか、手綱を緩めたようだ。

「その必要はないと思うぞ、馬の鳴き声が聞こえるだろ？ 恐らく

騎士の一団だ」

「……あの、覗き魔さんは確か北を訪れた事はないと言ってませんでしたか？」

少女は、胸に痞^{つか}えている事を言葉に変えた。

「確かに言っただけ風狼を見て思い出した、ごめん。でもグリーンベルという街は思い出せない。もしかしたら、母さんが本当にきみの街を……？ しかし……母さんが無闇に街を襲った覚えはないし襲う理由が見つからない」

「そ、そうですね……ならいいんです。北と言ったも広いですから……出来る事ならグリーンベルを焼き払った魔物が覗き魔さんのお

母様でない事を信じたいです」

「ありがと」

少年が満面の笑みを浮かべ、その微笑みを少女の顔に近付け肩を掴んだ。

杖に括られた鐘が、からんと音を奏でる。

「なあっ！ うむっ……」

突然起こった思いも由らぬ出来事に少女は身体を強張らせ言葉を失った。

少女に近付けられていた少年の顔が、ゆっくりと離していく。

「な、何するんですかあ——」

「何って？ キスしてほしかったんじゃないのかあ？」

「ば、ばばば、ばかあ——！ 初めてだったのにい——もう、ばかあ——！ プラムううう」

獣の咆哮を上げながら、プラムが少年の尻を目掛け矢の様に駆け出す。

「痛てえ！」

少年の尻に……また尻尾が生えた。

焚火の灯りを見つけてなのか、少女の怒鳴り声を聞き付けてなのか、鎧を着けた軍馬が一騎近付き二人と羊の群れの傍まで来ると馬の脚を止めた。

兜と軽めの鎧、鎖帷子で身を固めた偉丈夫^{いじょうぶ}たちがマントを翻し馬上から見下ろしている。

「怪我はないか？」

まだ若い張りのある声で近付いた騎士が二人に声を掛けた。

騎士団の隊長と思われる、その男が跨いでいた鞍を後にし傍らに控えている男に手綱を渡した。

若い騎士が兜に手をやり取り去ると長めの金色の髪が現われた。

金髪金眼の騎士が近くにいた副官と思われる中年の騎士を呼び、二言三言指示を出している。

若い騎士は向き直ると少女の前で膝を折り、少女の手を取った。
「触らないでください」

少年に尻尾が生えて直ぐ、膝を抱え地面に座り込み顔を伏せていた少女が手を払った。

「随分、冷たいじゃないかアウラ。久しぶりだな」

少女は、聞き覚えのある声に伏せていた顔を上げ、若い騎士を見て表情を華やかせた。

「ランディー様！」

若い騎士は微笑むと、再びアウラの手を取り、その甲に口づけを与える。

アウラの顔が火が点いたかのように赤みが差す。

「魔獣に襲われていたのか？ 怪我はないかね？」

「はい。襲われましたが……怪我はありません」

「それにしても、浮かない様子だったな。さぞ怖かっただろう？」

もう大丈夫。魔獣は何処へ？」

「森を飛び越えて逃げました」

アウラは森の方を指差した。

「たいしたものだ羊飼いの魔除けと言うのは、いや、流石アウラと言うべかな。まだ歳は十半ばだというのに魔術書の解読が出来るのだからな」

「は……いえ……私の方こそランディー様には貴重な古語魔術目録と書物を見せて頂いておりますので、そのお陰かと思えます」

少し考えアウラはそう答えた。

「いや、役に立てて嬉しいよ。間接的にでもアウラを守れたような気分になれる」

「そんな……私の方こそ感謝しています」

アウラは少年の方を、ちらつと横目で見遣った。

「アウラ。例の件はどうするのかな？」

「は、はい！ 学園の件ですね。お願いしようかと思ってます」

「アウラのような才色兼備の人材を紹介出来るのなら、私も鼻が高

いというものだ」

「ランディー様！　そ、そんな事は決して……ごさいません……」

「本当の事だ。実際、魔除けの術を扱える羊飼いは、少ない貴重な人材だ」

「……」

「アウラ。きみも知っているように近年になつて魔物たちの活動が活発化している。きみのように魔術を扱える存在は魔物たちと対峙して行く上で一騎当千の……いや、それ以上に値する可能性を秘めている」

ランディーがアウラの顎をやさしく持ち上げる。

ランディーの顔がアウラに近付いていく。

「……ラ、ランディー様」

アウラは、咄嗟に顔を横に背けランディーの視線から紫水晶の瞳を逸らした。

ランディーは動きを止めて言った。

「失礼したね。先程からきみの視線が間を置かず向けられる彼に妬いてしまったようだ。まったく大人げない事だね。良ければ彼を紹介してくれないか？」

「私も昼間に出会ったばかりで彼の名前を知りません」

アウラは少年の方に視線を遣った。

少年は尻に生えた尻尾と格闘している。

「ただ、山羊飼いとしか……」

「山羊飼いは？　それは興味深い。落ち着かない瞳の原因は、それだね」

「……」

「山羊飼いは魔物を扱う」

戦場を生業にする騎士の鋭い洞察力で心中にある動揺を見透かされているようで落ち着かない。

アウラは、心の動揺を誤魔化すように話題をすり替える。

「ランディー様？　こんな所まで先程の巨大な狼を追って来られた

のですか？」

「いや、それもあるがね。本来の目的は古語魔術目録の情報を聞きつけて、その魔術書の探索なんだがね」

「古語魔術目録がですか？」

「そうだ。北の古い神殿に隠されているらしい。調査に向かう道中、魔獣と遭遇して捕まえようとして逃げられた」

「何故？ 魔獣を捕まえようとなさったのですか？」

「個人的にだが、あれを魔獣などと呼ぶには聊いささか疑問があつてね」

「疑問？」

「今は断言できないが、あれは遠い昔に神々（・・・）に数えられた神と言つべき存在だ」

「神々？ ですか……」

「我々が信仰する唯一無二の『神』が寄こした魔物を抜う力を持つ聖獣の事だ」

アウラは騎士の言葉に違和感を感じた。

「……しかし、過去に教会は、その神々を――」

野太い男の声がアウラの言葉を掻き消した。

「隊長殿！ 我が隊の野営準備が整いました」

近寄つて来た男は、きびきびとした引き締まった動きでランディーに告げた。

「御苦労、休んでくれ」

「はっ」

間を置かず、また男が近付き報告を行っている。

「伝令、これより隊長会議を始める。各小隊長は速やかに騎士団長の下に参集せよとの事であります」

「直ぐに行く」

ランディーは、やれやれと言つたように肩を竦めマントを翻し、アウラの方を振り向いた。

「アウラ。北の神殿に眠る古語魔術は、偉大な魔女グランソルシエールの禁術書だそう
だ。この情報が本物なら、きみの願いが実現出来るかも知れない…

…魔物は勿論の事、きみの故郷を焼き払い家族とその全てを奪った
グリンベルの悪魔を討つ魔術が記されているかも知れない」

「本当ですか？」

アウラは、思わず顔を綻ばせた。

「本当だ。見つかった暁には、きみに解読の手伝いを頼みたいと思
っている」

「はい！」

「解読出来たその時、きみの積年の思いは成し遂げられるだろう。
その為にきみは魔術を知りたがっていたのだからな」

「……」

アウラは、今し方まで心の奥に追いやっていた事を思い出し茫然
と立ち尽くした。

アウラの討ちたくて止まなかったグリンベルの悪魔を宿している
かも知れない少年は直ぐ傍に居るのだから……。
ドラゴン

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第六話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 > 「――」
<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第七話

回想

風狼は去り、身体に纏わり着くような張りつめた重々しい空気は風と共に消えた。

風狼に代わって現われた騎士たちの登場で賑やかになった草原は野営の天幕で埋まっている。

アウラは、ただプラムとじゃれ合う少年を茫然と見つめる事しか出来なかった。

「顔……色が悪いなあ、どうかしたのか？」

少年が浮かない表情をしている、アウラの様子に気付き声を掛けた。

「顔……？ 悪いですか？」

「う——ん。かわいい。それに綺麗だった水辺に女神が降りて来たのかと思ったんだぞ？ 本当に」

少年が微笑み掛けている。

「……」

少年のやわらかい微笑みに浮かぶ碧眼と、まともに視線を交える事が出来ない。

なかなか無いであろう衝撃的な出会いから、まだ半日程しか過ぎてないと言うのに聖誕祭と収穫祭が一度にやって来た、思えるほど楽しい時間を過ごした気がする。

何時以来だろう？ あれ程心が弾んだのは……街を焼かれてからついぞなかった事だ。

少年の雲を掴むような話しは、自分たちと違う尺度で事を見ているようで新鮮であり奇怪でもあり、とても興味深く、怒っていた事も忘れ何時の間にか少年の一語一句に引き込まれている自分が不思議

議だった。

話が進んでいく中で少年もまた、母親と定住を始め出した街を魔物に焼き払われ失った自分と同じ痛みを抱えていたのだ、と知った。少年に、母がドラゴンなのだと聞いた時、顰めていた憎しみの湧き上がる苦しさ、憎むべきドラゴンを宿す少年との出会った驚きと複雑な感情が込められる中、辛く忌々しい過去が重なり忌々しいドラゴンの力を体内に秘めた少年も、また故郷を失くし家族や知人を失った痛みと苦しみをも自分と共有しているように思えた。

胸の奥に少年の母がグリンベルの街を焼いたドラゴンではないかと、疑う気持ちと違ってほしいと思う気持ちが同時に浮かび絡み合い混乱もした。

神の裁きと教会で教えられている『ハングラードの神罰』は少年の話と食い違う。

アウラは、教会の教えと少年の話に違和感を感じながら、少年たち山羊飼いは世間から受け続ける言われ無き冷遇と冷たい視線から逃げるように辺境へと流れていった事実が、ふと脳裏を過ぎる。

彼ら、山羊飼いの事を語った少年の痛みが、我が身に降り掛った災厄のように感じた。

自分は事あるごとに旅商人などの旅人に道中の安全や街に繁栄を願い出られ祈りの儀式をし重宝がられているのに……。

それに加え、山羊飼いたちは魔物使いと呼ばれ王国や教会から冷遇され、その果てに神罰まで受け魔物ごと街を焼かれた憎むべきはずの山羊飼いの少年に同情を覚えた。

風狼が少年の事を知っていたお陰で死線の難を逃れ、ほっとしたのも束の間、登場した騎士団にランディーがいた事に驚いた。

ランディーから街を焼いたグリンベルの悪魔を討破れるかも知れない禁術書の存在と在り処を聞いた時、嬉しいと思う気持ちが湧き上がったのは正直な気持ちだった。

「どうした？　かわいいと言ってやったのに嬉しくないのか？」

「……」

「昼間の事をまだ怒っているのか？ あれは本当に事故だったんだぞ？ おいってばあ」

アウラは少年の顔を見る事が出来なかった。

——グリンベルの悲劇。

七年前の冬。その悲劇は起こった。

その日、街の大人たちは総出で聖誕祭の準備に追われていた、大きな街の教会の司教様が街を訪れるとの事、北の端にあるグリンベルまでわざわざ聖誕祭に合わせ信仰を説きに来るらしい。

街の外に出る者はおらず街を上げて司教様を迎える準備に勤しんでいた。

同じ年頃の子供たちが祭り事に、はしゃぐ姿を横目に父から預けられた十頭にも満たない羊たちを連れ祭り事に浮かれる人々の脇を通り過ぎ街の外に出た。

貧しい家だった事もあり他の子供たちより早く羊飼いの仕事を手伝っていた。

ある日、家の納屋に、こっそり乾草のベッドを拵えてある秘密の遊び場で埃を被っていた術書を見つけ、見た事もない蚯蚓ミミズが、のたかったような不思議な文字に興味を持った。

街の小さな教会で初めて文字の読み書きを教えて貰った時、夢中になった事を覚えている。

見様見真似で術書に描かれた陣を街中に落書きしながら覚えた。羊たちを山の裾野に広がった小さな森の中に円形に広がった草原までよく連れてくる。

季節も冬に差し掛かった頃で大地の色合いは寂しいかったが、冬の草花は力強く緑を放っていた。

雪が降るのはもう少し先、十頭にも満たない羊たちには十分にも

思えるだけの草はあった。

そこを秘密基地と呼び羊を追って来ては覚えてたの陣を描いていた。

その日も秘密基地に着くなり術書を広げ描いて遊んだ。

父が行なっている魔除けの儀式を真似、小さなカウベルを括り付けた木の棒で鐘を鳴らし術書に書かれた文字を読みながら、良く分からぬ言葉が発して夢中で振ったのを覚えている。

文字を覚えた時のように、術書の解読は面白く夢中で解いた。

羊たちを追っている最中も術書を読み耽って文字をなぞった。

陽も暮れ出した頃、秘密基地を後にし街に戻る道中、羊が一頭足りたない事に気付く慌てて秘密基地に戻り迷子の羊を探しようやく見付け出した時には、すっかり暗くなった空に月が蒼く光を放っていた。

父や母と自分より三歳下の弟がさぞかし心配している事だろう、と思い父にこっぴどく怒られる事を覚悟しながら帰りを急いだ。

グリンベルに通じる帰り道の中程で街の様子がおかしい事に気付く。

黄昏時はとうに過ぎているのにやたらに空が赤い。

嫌な予感が羊探して疲れているにも拘らず、街へと向かう足取りが自然に速くなる。

不気味な程に赤くなった夜空。

その理由は街を見下ろす事の出来る小高い丘の天辺にようやく辿り着いた時に明らかになった。

グリンベルの街が真っ赤な炎に包まれていた。

緩やかな坂を転がるように駆け下った。

頭の中は真っ白で何度転んだのか、転んだ事すら曖昧だ。

自分の口から発している言葉も自分の耳に響かない。

その時、泣いていたのかどうかさえ、はっきりと分っていなかった。

ただ、頭の中に響いていた言葉で覚えているのは、ほんの少しだ

け……。

「お父さん……お母さん……アウル……お婆ちゃん、お爺さん」
他にも友達や近所のおじさんやお婆さんの名前、文字の読み書きを教えてくれた教会の老神父の名前を叫んでいたに違いない。

街に近付こうとして既に駆けつけていた騎士に止められたが、その時の自分の取り乱していた姿をあまり覚えていない。

「お婆ちゃん、お爺さん」

「お父さん……」

「お母さん……」

「アウル——、いやあああ——」

どれ程時間が流れたのか分からない。

涙は枯れ果、もう出てこない。

ただただ、泣き疲れ地面に膝を組んで顔を埋めているだけだった。

不意に肩を叩かれ顔を上げた事を覚えている。

さぞかし虚ろな眼をしていただろう。

「大丈夫かい？」

そう声を掛けた若いひよっこ騎士。

当時、グリンベルの街に繋がる街道を警備する詰め所に駐留していた若いひよっこ騎士だったランディーは、グリンベルの街が焼かれた夜、炎で真っ赤に染まった空を見つけ街に駆けつけた駐留軍の一員だった。

放牧から帰り一人、街の外で炎に包まれた街を見て泣き疲れ地面に膝を組んで顔を埋めていた、幼い自分にやさしく声を掛けてくれた人物だった。

「寒いから、これを飲んで身体を暖めるといい。それとこれ」

ランディーに差し出された、蜂蜜入りの温かいミルクとふんわりとやわらかい白いパンに良く伸びるチーズをたっぷり振り掛け焚火で炙^{あぶ}った温かい香ばしい匂いがするパンと「寒いから」と言い渡させた毛布を無言で受け取った。

「こんな時に何だけど……街の生き残りはきみだけだそうだ。酷だとは思うけど言うておくようにと命令を受けちゃって……ちよつと考えたけどやっぱり話しておいた方がいいと思って……きみだけでも生きていてくれて良かったと思う」

「……」

「だって、グリンベルの人たちの生活や街並みを覚えていてくれて伝えてくれる人がいるのだからね」

「……」

「街を焼き払った犯人の事なんだけど、きみは見たのかな？」

赤く残り火に染まる街の焼け跡を虚空の瞳で見つめながら、アウラはゆっくりと顔を横に振った

「見てないか……、夜だったとはいえ、街一つを誰一人逃げる暇を与えず焼き払えるものなんてやっぱり、魔物の仕業だと思うんだ」

「……魔物？」

「そう、魔物」

近くで騎士たちがざわめき出していた。

調査の末、巨大な足跡が見付かったのだとか何とかで騒ぎになっていたよ。

ランディーが「ちよつと様子を見て来る」と言い騎士たちがざわめく中へと駆け出していった。

金髪の若い騎士が、程なく戻って来るとこう言った。

「街を襲ったのは魔物だ。足跡も見て来たけど一つが民家程もある大きさだった。街の上空から火を吐いて焼いたのだろう、と隊長たちが話していたよ」

「……」

「こんな事が出来る魔物は原典や古伝記に登場する究極の魔物。古

いにしえ

のドラゴンしかいないと……グリンベルに現れた悪魔だと騒いでいた」

若い騎士から受け取った温かったパンと蜂蜜入りのミルクは、何時しか立ち昇っていた白い蒸気を失くしている。

チーズの固まり掛けたパンと冷めたミルクの入った木の器を手にしたまま、ぼんやり意識の外から響く声を覚えている。

「……グリンベルの悪魔^{ドラゴン}」

今でも、はつきりと――。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第七話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 > 「――」
<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第八話

葛藤

東の空が明るみ始め、夜の闇を掃い辺りの様子をゆるりと露わに
していく。

山の裾野に広がった草原は山からせり出し始めた暗雲が幾分か光
を遮り、何時もの夜明けより遅く感じる。

アウラは、羽織っている二重に重ねた毛布をそのままに立ち上が
った。

春が訪れたばかりのこの季節は、晴れた日中は沐浴が気持ちいい
程温かいと言うのに、夜が更けていくにつれ寒くなる。

明け方は尚さら更冷える。

更に山からせり出し始めた雲が陽の光を遮り、温もりを寄こして
くれない。

何とも意地の悪い雲なんだろう！ などと腹を立ててみても自然
営みを何とか出来る筈もない。

昨日、少年が言ったように雨の気配が見て取れる。

昨夜まで広く見えた草原は、昨夜現れた騎士団一行が野営してい
る天幕が、あちこちに張られ狭く見える。

アウラは、考え事をしながら山にせり出し始めた黒く重なる雲を
ぼんやり見ていた。

昨夜ランディーが言っていた言葉がアウラの心を締めつける。

……私は、いったいどうするのだろう。

偉大な魔女の禁術書がもし、北の神殿で見つかればグリーンベルの
仇討ちが出来る力に入るかも知れない。

グリーンベルの悪魔を打ち破る強大な魔術を知る事が出来る。

それ程強大な力を発現させる魔術を習得する事が並大抵ではない

事も分かつている。

山羊飼いの少年が言っていた話が、本当なら彼自身の預かり知らぬ処で起きた悲劇だったのかとも思う。

ただ、少年が知らないだけ……そうだったとしたら許せるの？

アウラ？ グリンベルの悪魔を体内に宿したあの少年を……。

本当に？ アウラは自問自答を繰り返した。

山羊飼いの少年は、もしかしたら原典や古伝記等に記されている
オフティマール・モンスター究極の魔物ドラゴンの称号は母だけが持つに相応しいと言う自負から、他の竜族ドラゴンの存在を否定しているのではないだろうか？ と考えてみる。

もし、少年が言うようにドラゴンと呼べる唯一の存在が彼の母だけとするならば、彼を討たなければならぬ……討ちたい。

しかし、少年の母であるドラゴンの本体は既に死滅していて、この世に存在していない。

山羊飼いの少年は、ドラゴンの力を発揮する循環を体内に宿しているだけだ。

直接的ではないものの、ドラゴンの力を発揮する循環とか言う代物を滅してしまいたい気持ちがあるが胸中の何処かにあるのも確かな事だ。出来る事なら彼の体内から循環だけを取り出す方法はないだろうか？

少年の命は奪いたくはない。

もし、出来たとして、この山羊飼いの少年は、素直に循環を渡すだろうか？ 彼が循環ははを滅されると知ったらどう思い、どうするのだろうか。

いや、考えるだけ愚かな事かも知れない、滅されると知りながら渡す訳がないのだ。

大切な形見ははを……。

ウォルフス風狼と遭遇したあの時、危急を脱する為に循環を封印を解こうとし心の何処かで迷いながらもグリンベルの悪魔を討つその日のまで生き延びる為に仇かも知れない循環の戒めを解こうと決めた。

あの時、循環鱗が放つ光の中に浮かび上がったドラゴンの姿は思い描いていた伝承にある、恐々とした姿からは想像も及ばない程に美しい。

その姿とドラゴンが放つ七色の光から伝わる感覚は母の腕に抱かれているような安らいだ気持ちと温かく、やさしい感触が風狼の恐怖を取り去ってくれたようにも思えた。

少年が話してくれたように、その身を投げ打ってまで究極の魔物ドラゴンが人間如きを護るために魔物の群れから、この世に数多存在する内の極僅かな人間たちと一握りの街を守った理由はなんだったのだろうか。

ドラゴンが威厳ある美しい姿を、恐らくは魔術が何かで人間の姿に変えてまで人間の子供を育てながら、人々に疎まれる山羊たちを連れ、人の世を少年を連れて放浪の旅を続けている内に人の情にも触れたであろうドラゴンだったとしても少年だけを連れて逃げる事など循環鱗を少年に与えていたとはいえ、本来の姿を持ってすれば雑作もなかっただろうに。

ドラゴンは何故？ 我が身を犠牲にしてまで人々を守ろうとしたのだろう……。

アウラの胸は、故郷を焼いたとされているドラゴンに対する憎しみと、この少年に抱き始めている今まで感じた事のない、切なく胸を締め付けるような不思議な想いの間で揺れ動いていた。

アウラは、まだ毛布に包まっている少年に眼をやった。

少年がもそもそと毛布の中で動いている。

「パ、パンプキンパイ！ も、もう……むにゅ……れない……あつ！」

「……！？ 寝言……？」

（ピ、ピーチパイじゃないんだ……）

「おはよう。起きていたのかぁ、アウラ……だっけ？ ふぁ——、あれ？」

少年が毛布の中から顔を出し動こうとして置かれた状態に気付く。
「お、おはようございます」

（パンプキンパイ？ いったい誰の……違った何の夢みていたの？）
アウラは、ちらりと自分の胸元を覗いた。

悔しいけど……そこには熟れる前のやや固めの桃の果実が二つ……

「はあっ……」

アウラは、まだ発展途上の控えめな自分の胸のふくらみを見て、
小さく溜息を吐き肩を落とした。

ちよっぴりシヨックを受け一人ごちていると何やら、もぞもぞ少年ごと毛布が動いている事に気づく。

「う、動けない……ああそうか！ 夜中に縛られたっけ？」

少年は、毛布に簀巻きにされていた。

毛布の上からは縄でしつかりと縛られている。

「の、覗き魔さんが夜中にいきなり抱き付いて来たりするからですっ！」

「ああ、ごめん、寝ぼけてたんだ。母さんの夢を見てたかなあ？

だから、あれは事故だ」

「随分、事故が重なりますね？ わざとじゃないんですか？」

（お母様は、パンプキン並みの胸でいらしたのですね……）

アウラは、目を細め少年を睨んだ。

「良かった。元気なアウラだ」

少年がやわらかな笑みを向けている。

「えっ！」

アウラは、突然の言葉に驚いたが、何処かしら嬉しかった。

（気付いていたんだ……心配して気に掛けていてくれたんだ……私の事）

「昨夜、何かあったのか？ あの騎士と」

「そんなに気遣わなくてもいいですよ。聞こえていたのでしょ？」

「……良く分かったなあ」

「名前を呼んだじゃないですか」

「ああ、そうだった」

「聞こえていたのなら聞かないでください」

「何て言うかなあ——。う——ん、俺は元気な方のアウラ好きだ」

またまた、突然突拍子も無い少年の言葉に、どきつと胸が跳ね今にも心臓が飛び出すかと思う程、心臓が鼓動を打っている。

「な、何を！ と、突然……言うんですか……」

弾んでいるたはずの胸が今度は締め付けられ、きりきり痛み出す。
「だから、縄解いてくれないかなあ？」

「なっ！ だからって、なんですか！ だからって！」

何だか、無性に腹が立つ。

アウラは、しぶしぶ少年を縛った縄に手をやった。

「前にも言ったけど……、俺は、こんな趣味は持ってない、どっちかって言う——」

「うるさい！ です。よ。騎士様たちは、まだ寝ておられるのですから」

家畜を飼う放牧者たちの朝は早い。

アウラは、しぶしぶ少年を縛った縄を解きに掛った。

「心配するな。俺は逃げたりしない」

少年の顔には何時もの微笑みはない。

「に、逃がしません」

「俺には逃げる理由がない」

「……」

「もし、万が一母さんがアウラの故郷を襲った犯人だったなら、俺はお前に討たれてやってもいい」

「な、なにを……急に……その時は討ちます」

熟した赤い果実の様に顔を赤らめ、アウラは俯いた。

——討ちます。でも……討ちたくない。どうして？ そう思うの

だろう。胸が……苦しい。

自分の気持ちに戸惑うアウラの耳に次の瞬間、飛び込んできた少年の言葉に耳を疑った。

「俺は母さんもアウラも大好きだ。だからどちらかを失う事になるのなら、母さんの代わりに俺がお前に討たれてやる。二度も母さんを死なせたくない。だが、俺にも成し遂げたい想いと夢がある、討たれてやるのはそれが済んでからだ」

「す、好き？ 突然言われても……、そ、それに、そんな事言われても……私……どうしたら」

「アウラには、成し遂げたい想いがある。故郷を焼いたグリンベルの悪魔だっけ？ を討つと言う想いがなあ。……しかし、知らない間に母さんの二つ名も増えたなあ」

少年の顔に何時もの微笑みが戻り、間の抜けた口調でそう言い笑った。

「……覗き魔さんが成し遂げたい想いと夢って？」

「成し遂げたい事はアウラとあまり変わらない。俺は街のみんなと母さんを殺した魔物の群れを生み出した魔術師たちを倒したい。夢はえっと――、内緒だ」

「今……何と……」

「魔術を使って魔物を創り出した魔術師たちを倒したいと言った」

「じゃあ、私たち……仇同士？ それに敵ですね……」

「それはまだ、分からないなあ」

「魔術師たちを倒すって……今」

「アウラ、お前は魔物を創り出した事があるのか？」

アウラは、桃色の髪を揺らし、勢い良く首を横に振った。

「今の私に、そこまで魔術を扱える力はないです」

「なら、味方だ。俺の封印を解く術^{すべ}を知っているのは、今のところアウラだけだからなあ。いざとなったら解いて貰わないと、それに俺は魔術師全てを倒したい訳じゃない」

「……」

アウラは、みるみる顔に赤みが差していく事を感じた。

真っ赤になっっている事が、自分でも分かるくらいに頬が熱い。

「俺と母さんの力が、アウラに必要ならば貸してやる。約束だ」

「あ、ありがとう……でも私は……覗き魔さんを討つかもし知れない」

「本当に母さんが、アウラの故郷を焼いたのならそうしてもいい」

東の大地から陽が顔を出し始め、空の明るむ光の世界へと変えていく。

夜が明けもう直ぐ何処までも広がる空に、また陽が昇る。

ただ、山にせり出し始めた厚い雲が、その光を完全に遮るまで……。

…。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第八話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 >（――）
<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第九話

山羊飼いの名

静かだった草原は、起床の銅鑼の音と共に静けさを失った。

毛布に包まって寝ていた騎士たちが銅鑼の音を合図に起き出して朝食の準備に取り掛かった者たちで俄かに騒がしくなり始めている。先程まで見張りをしていた騎士は大欠伸をし眠そうに眼を擦っていた。

「あれ？ 解けない……」

「うん？ 何が？」

「縄……」

「アウラ？ きみって才能ないなあ、今度俺が——痛え、まだ何も言っていないのに……酷いなあ」

草原の朝に乾いた鐘の音が、からん♪ と響いた。

「プラム呼びますよ！ プウ——」

アウラは薄桃色の口を尖らせた。

「待つて……、あいつが来ると俺の尻に尻尾が生える」

「大丈夫です。今の状態では喉しか噛めませんから」

「それは困る」

「いいじゃないですか？ 討たれてくれるのでしょ？ 私に」

「きみ……人の話全然聞いてないねえ」

「覚えてます。討たれてくれるのですよね？」

アウラは、やわらかく微笑みを浮かべ口調は何処か冗談と確認の意を含めて言った。

「う——ん、今直ぐは困るなあ」

「何故？ 覗き魔さんの夢を叶えたいからですか？ もしかしたら私たち敵になるかも知れないのですよ？ それに仇同士かも知れな

いのですよ?」

「そうかも知れないし、そうでないかも知れない。それに……」
「それに?」

「俺は、まだ約束を守ってない。もう忘れたのか? 馬鹿だなあ――
アウラは」

少年が満面の笑みを浮かべた。

「……という事は循環の封印を解かなければならない時が来るかも知れませんか? 風狼さんに叱られますよ?」

アウラも少年が浮かべる微笑みと同じく紫水晶の瞳を瞼で覆うと弓のように反らせた。

「そうだなあ……、まあ、それはそれでいい事がある」

少年の含みのある言葉にアウラは、顔を赤らめながら苦笑した後、くすくす笑い出した。

「覗き魔さんて可笑しな人ですね。何を考えているのか、さっぱり分からないです。それにエッチで間が抜けてるし、それでいて覗き魔で変態だしなのに……それなのに物知りで頭の回転は早い人……まったく覗き魔さんは変な人です」

「……その言い様じゃ、まるで俺が危ない人みたいじゃないか、それに最後は助け船になってない。せめて風変わりと言ってくれ」

アウラと少年は、くすくす笑い合った。

今は、この少年の言葉を信じよう。

雲のようにふわふわ笑う少年の笑顔を信じていようとアウラは思った。

アウラの紫水晶の瞳は、やわらかな輝きを浮かべていた。

手の平に握った硬貨を振った時のような金属のぶつかり合う音が近付いて来ている。

「おはよう、アウラ」

長めの金髪を先程から強まった風に泳がせ金眼の騎士がアウラに声を掛けた。

「ランディー様！ おはようございます」

アウラは、寝ぐぜで乱れた桃色の髪に慌てて手櫛を通し整えると長いスカートの中程を摘み、恭しくお辞儀をした。

ランディーの後ろには、二人の騎士が控え朝食のライ麦パンと日持ちのする野菜と塩漬けされた豚の肉を水で煮込んだスープが入った皿、葡萄酒を水で薄め蜂蜜を入れた飲み物が入った木の器を持っている。

「う——ん？ 俺は乳の方が良いんだけど……」

少年が騎士に微笑み掛けた。

少年の言葉に後ろの騎士が肩を揺らしながら笑いを堪えている。

ランディーは、にこりと微笑を見せ少年に言った。

後ろに控えた騎士は我慢出来なくなつたのか「ぷぷっ」と引き締めている唇を割って出る息の洩れる音が聞こえる。

「すまない。生憎王都からの遠征でね、傷みやすい乳は持ち合わせていないんだ」

「それなら俺が連れている山羊の乳を絞って来よう、アウラもその方がいいろ？ 子供なんだから」

少年の碧眼がアウラの顔を見た後、胸元に移った。

「なっ！ ど、何処見て言っているのですかぁ？」

アウラは、碧眼の矢を受けている胸元を両手で隠し頬を膨らませた。

「さあ、内緒だ」

アウラは、わなわな身体を小刻みに揺らした。

「馬鹿にしないで！ こう見えても私は、もうじき十六になるんだから、まだ十五だけど……」

「なんだあ、俺は三月程前に十六になつたばかりだ。俺と同じ年の頃じゃないか、小さいなあアウラは！ そうだ！ 山羊の乳は栄養価が高い、大きくなるかもしれないぞ？」

「だから……何処見てそう思う訳ですか？ まさか！ 昨日の事を思い出して言ってるんじゃないですよええ！」

「言ってもいいのか？」

「言っちゃ駄目です」

「えっと——」

「わああああああ、言っちゃ駄目ですってばあ」

アウラの声が少年の声を掻き消す。

「——と胸」

「あつ……、ばかあ——！ ランディー様の前でえ……もう知らない。ばかあ——」

アウラは、今のも顔から火を吹きそうな程赤らめ肩を落とした。

「大きな声出すから肝心なところが聞こえなかっただろ？」

「いや、むしろ肝心なところしか聞こえなかったですう……」

アウラは肩を落とし「はあ——」とかわいらしい溜息を吐いた。

後ろに控えていた騎士たちが遂に堪え切れなくなつて笑い出した。

「私は気にしないよ。アウラ」

ランディーが苦笑いを向けていた。

「ラ、ランディー様まで……世の殿方は皆、大きな胸に惹かれるのですね」

アウラは、細い肩を小さく落とした。

「いや、皆がそうとは限らない。それにアウラは今のままでも十分魅力的だ」

「そうだ！ 断じてそんな事は無い！ 俺も気にしない。むしろ俺は控え目な——」

「何を力説しようとしてるんですか！ プラムううう」

からん♪ と鐘の音が響きアウラが呼んだ名前じゅもんは荒々しい息を吐ながら疾駆し少年との距離を急激に縮めて来ている。

そして、少年の尻尾と化した。

野営の後を始末し終えた騎士団が馬を引き出した。

「アウラ。この先どうするんだね。急ぎの用でもなければ、放棄さ

れた街まで一緒に来て貰えないだろうか？　そこに例の禁術書が隠されていると噂になっている神殿がある」

ランディーが部下が引いてきた馬の手綱を握て尋ねた。

「はあ……はい……私は、これから降り出す大雨で氾濫するかも知れない川の事を伝えに、シュベルクの街に急ぎ戻らねばなりません……」

禁術書が眠っていると聞いてアウラの胸に複雑な感情が湧き上がり、一瞬戸惑った。

禁術書の力を手にする事が出来れば、故郷を焼いたグリンベルの悪魔を討つ事が出来る。

しかし、その憎むべきグリンベルを滅ぼした悪魔^{ドラゴン}の力は、ここにいる山羊飼いの少年の体内に封印されているのだ。

——胸が……切なくて苦しい。

ドラゴンの循環^{じゅんりん}を宿した少年の事を考える度に心臓は踊り、何とも言えない切なく苦しい気持が湧き上がってくる。

この気持ちは何？　アウラは、今日まで感じた事のない感情に戸惑った。

戸惑いを見せるアウラにランディーが言葉を掛けた。

「羊飼いの天候を読む力は侮れん。確かに山の雲行きが怪しい。なら尚の事、アウラの手助けが必要になる」

「いえ、今日まで私にも分りませんでした。彼がそうだと言っているのです」

アウラは、ランディーにそう答え山羊飼いの少年を、ちらりと見て目配せを送った。

「山羊飼いの少年が？」

「はい」

アウラの言葉を聞いてランディーが考え込むように腕を組み少し間を置き少年に向かって言った。

「山羊飼いの少年！ 頼みたい事があるのだが、良いかね？」

「何かなあ？ 人には出来る事と出来ない事がある」

少年がすっかり馴染んだ微笑みをランディーに向けた。

「アウラが連れて来ていている羊を連れシュベルクの街に行つて、きみの言つ事を伝えてくれないかね」

「それは出来ないなあ」

少年の顔から笑顔が消え、困つたような顔をした。

「何故かね？ きみは山羊飼いだ。群れを扱う事には長けているはずだ。きみの連れていている山羊とアウラの羊、三十頭程何と言つ事はあるまい」

「う——ん。数の問題じゃないかなあ」

ランディーが隣に控えた副官らしき人物に目配せすると、その男が腰に下げていた革の袋を差し出した。

革の袋は、ごつごと歪いづつな形にをしている。

「これは豪気だなあ」

恐らく金貨がぎつしり詰まつた革袋だろう。

「足りないかな？」

嫌な眼を少年に下してい副官らしき男が言つた。

「困つたなあ……、金は欲しいが、そういう問題でもない」

「なら何だ。言つてみる」

「俺は山羊飼いだ」

傍で話を聞いていたアウラは、はつとして顔を上げた、細い桃色の髪がふんわり宙を踊る。

「俺は山羊飼いだ。これ位の頭数の羊たちを連れて行く事は、造作もない、でも俺がシュベルクだっけ？ に行つて話をしても誰も信じてはくれない」

「見た目で羊飼いと山羊飼いの区別などつかないだろう？ それに山羊は街にもいる」

「羊飼いは、山羊も飼っているからなあ。大きな羊の群れに何割か山羊を交ぜるからだ。アウラの羊に俺の山羊、合わせて三十頭程の

小さな群れに三分の一も山羊が交じった羊の群れを街に連れて行っても誤魔化せない。それに羊飼いは自分の羊を見分ける眼を持っている」

副官は黙ってしまった。

「それに俺にはアウラと交わした約束がある。逃そはにない」と

少年と副官の様子を見ていたランディーが長めの金髪を揺らし高らかに笑った。

「副官、貴様の負けだ。少年、名を聞こう」

少年は微笑んで応えた。

「俺の名は——」

その時、出立を知らせる大きな銅鑼の音が草原に鳴り響き渡り少年の声は掻き消された。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第九話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―）<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十話

フラッシュ・レッド
名も無き赤の騎士団

高らかと打ち鳴らされる銅鑼の音に騎士たちは慌ただしく動き出した。

出立の合図は音の間を詰めている。

「アサー！ マイル！」

ランディーが二人の騎士を呼び寄せた。

呼び寄せられた二人の騎士がランディーの方に手綱を引いき馬の腹を蹴り走らせた。

全く同じ軌跡を描くように揃った動きで馬を向ける。

訓練の賜物なのだろう、その動きには一糸の乱れもない。

二人の騎士はランディーの近くで馬を止めた。

「どの様な御命令でしょうか」

声まで揃っている。アウラと少年は好奇の視線で見っていた。

「二人に重要な任務を与える」

「「光荣であります」」

また揃った。

アンディーの傍に立っているアウラと少年の首もそろって横に傾く。

「これから二人に与える仕事は非常に名誉な任務である」

ランディーが唇の端をやわらかく吊り上げている。

「「光荣であります」」

「是非、お前たちに任せたい……お前たちにしか出来ない任務だ」

「「光荣であります」」

「聞きたいか？」

「「光荣であります」」

「よかるう！ お前たちの任せる」

「「光荣であります」」

ランディーが更に唇を吊り上げている。

「美しき姫君の——」

「「護衛でありますか」」

「そう逸るな」

「「光荣であります」」

「美しき姫君のお供を——」

「「了解であります」」

「まあ、聞け、美しき姫君のお供である愛くるしい瞳のか弱き羊たちと四角い瞳の山羊たちを伴い、今から聞く話をシュベルクの駐留軍まで行き伝令せよ」

「「光荣で……あり、ます……」」

「私の隊で二人の洗練された連携は一番である。羊たちを追つての伝令任務にその力を借りたい。それに二人の馬は我が隊の中でも屈指の駿馬である。臨機応変に堪えられる」

「「光荣であります」」

ランディーが金髪を揺らしながら金色の視線を少年の方に向けた。

「少年！ 雨は何時降る」

少年は、碧眼の瞳を弓のように反らし唇の両端を動かした。

「この辺りは早ければ夕方。長ければ四、五日安定しないかも知れない。街まで歩いてどれくらい掛るのかなあ」

「街まで歩いて行けば、陽が昇ってから陽の入りまでくらいの時間だ。個人差はあるかな」

「地形は？」

「大きな起伏はない、程なく行けば丘の間と丘を削って均し固めた、街道がシュベルクまで、おおよそ真っ直ぐ走っている」

「アウラの胸みたいだ……、痛え、川は？」

「からん」 と少年の頭上で鐘が響く。

ランディーが一瞬苦笑いを浮かべたが、すぐさま表情を引き締め

た。

「街道沿いに北の山脈から流れる川と、ここを流れる川とが街の手前で合流している、川幅は徐々に広がってはいるが合流先と川下は然程広がってない」

「もつと細かい情報が欲しい」

「分かった、ただ我々も間もなく出立するが余り時間がない。きみの言う事に納得がゆけば、我々が取る進路を変更し雲を大きく迂回し東の街で補給してから北の神殿に向か経路を辿るよう団長殿に進言しよう」

「それが賢明だ」

ランディーが詳細を急ぎ少年に伝えた。

騎士団の一部の隊は動き始めている。

「この地形では三日も山間地で豪雨が降って、早い段階で雲が街まで届けば、その日の内に川が溢れるかも知れないなあ。街の水門を締め鉄砲水に備えた方がいい、深い孤を描いた水路には枝を作り水を逃がす溝も掘った方がいいかあ」

「時間は、無いがシュベルク近郊に駐屯している兵を集め出来るだけの協力はさせよう」

「そこまでしなくても俺は困らない。だけど……アウラが困るから頼んでみてくれ」

少年の碧眼がアウラに向いた。

ランディーが二人に向き直り命令を伝えた。

「聞いている通りだ。シュベルクの運命はお前たち二人の双肩に掛かっている。私はこれから団長の下に向い先程の経路で北に向かうよう進言してくる。お前たちなら慣れない羊追いをしながらでも夕方までにはシュベルクに着けるだろう。手段は任せる。以上」

「「光荣あります」」

「この任務には我が隊、^{ブラッディレーズ}名も無き赤の騎士団の名誉が懸かっている、失敗に終われば、名もなき赤の騎士団の名が泣く。心して掛れいな」

「「僭越^{せんえつ}ではありますが、我らは例え羊を鳴かせても、我が、名もなき赤の騎士団の名は泣かせません」

「おおいに結構！ では行け」

「「はっ」」

ランディーが二人に命令を下し高らかに笑った。

アウラの隣にまで近付いた少年が、口元を隠すように右手の甲を当てアウラに尋ねた。

「なあ、アウラ、聞いていいか？」

「なんですか？」

「なんだか俺……身体調子が悪くなつて来ているような気がする。これって病気で言うのかなあ？」

「覗き魔さんは毎日病気みたいなものじゃないかな？ と想像できますけど」

「なにゆえ！？」

「思考や行動が異常です」

「う——ん、そうじゃない……なんかさあ、あの騎士二人が同じに見えるんだよなあ？ 眼の焦点が合わないんだ、さつきから二人の騎士が、ぼやけて見える。それに声も重なって聞こえる。これも魔術？ 分身の魔術とか？」

少年が碧眼を時折、擦りながら好奇心な視線を二人の騎士に向けている。

「違います。魔術なんかじゃありませんよ！ あれはきつと……分裂、増殖したのですよ」

「そんな原始の藍藻みたいな言いよう……一卵性の双子だろ？ 酷い奴だなあ、アウラは」

「なっ！？ わ、解ってます！、それくらい。覗き魔さんが知らないのだと思って……冗談を言ったのです！」

アウラの紫水晶の瞳から眼光炯炯^{がんこうけいけい}を向け眼尻を吊り上げた。

「俺は馬鹿にされてるのかなあ——」

「そんな……事ないですよ？ 馬鹿には見えますが……覗き魔さんは私の知らない事や魔術の事も私なんかより詳しいように思えます」
「旅すがら……かなあ、街に住んでいた時間より旅していた時間の方が長い、旅の中で学んだ事も多いし母さんが沢山教えてくれた……魔術の事も人の言葉も……文字の書き方は暫く共に旅をした爺さんに教えて貰った。『六分儀』と言う道具を使った天測も習ったかなあ」

「覗き魔さんには知らない事がないみたい……」

「そうだなあ……。俺は知らない事以外は何でも知っている。それに知らなければ良かった事も沢山ある」

「知らなければ良かった事……」

アウラは薄桃色の唇を緩く噛み俄かに表情を曇らせた。

「アウラは気にする事はない、俺は気にするが」

少年がブルーマールが映える前髪を揺らし屈託のないやわらかな微笑みを向けている。

アウラは、その笑みの何処かに違和感を感じた。

少年の笑みは見ている方も微笑ましい程綺麗に表情を作る。

時折、少年はこころ表情を変えて話すが、何処か不自然で最後は必ず形の良い微笑みを浮かべる。

そう……。

まるで微笑みの表情を模った人形のように。

「何をしている。アウラ！ それに山羊飼いの荷物を纏める！ 我らも出るぞ」

ランディーの引き締まった声が向けられた。

「名もなき赤の騎士団、出るぞ」

ランディーの部下たちは巧みな手綱捌きで隊を纏める。

「私は団長の所に行く。伝令——！ 先行の騎士隊に伝えよ。東に迂回し北に向かう。とな」

「隊長！ それはまだ決定事項では——」

「この私を変えるさ。これから行く道も……そして、この世界の未

来もな」

ランディーが意気揚揚と高らかに声を張り上げた。

「おお——！」

騎士隊からは歓声が起こる。

ランディーが纏っているマントを翻した。

艶のあるビロードの表地がマントの揺れで裏地を見せる。

裏返って見えた裏地は血のように赤く、血溜まりにも見える裏地には銀色の刺繍系で何かを呪うかのようにしっかりと逆十字の紋様が縫い付けられていた。

To Be Continued

く グランソルシエールの禁術書 く 第十話（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。 > 「――」 <
次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十一話

雷鳴。そして悲鳴

東に大きく迂回し精銳の騎士隊ともどもアウラと山羊飼いの少年が山間の野に入って半日が過ぎた。

雨が上がった後、ぴたりと風の止んだ山間の野は、地面は膿んでいて歩く事すら困難だった。

膿んだ野道を重い荷物背中に担ぎ、両手に武装を持った大人数で歩いているのだから、余計に地面を捏ねる。

昨日までの雨が嘘のように止んでいて、清々しいはずの陽の光が運んでくる暖かさが、今は忌々しく思える。

山間の野は、風が抜けず淀み陽に暖められ蒸している。

湿気を含んだ空気が身体に纏わりついて余計に体力を奪っていく。まだ半日しか歩いてないというのに足元は泥濘ぬかるみやたらに足取りが重い。

その上、自分の荷物を持っているのだから尚更だ。

それでも重い装備と天幕や食糧、水袋等の荷物を背負った騎士たちより、随分身軽な方だ。

アウラは心の中で呟いた。

（女の子なのに……）

「アウラ、へばっているのかあ？ もっと荷物を持ってやりたいけど、俺には生憎腕が二本しかない。残念だ」

「見れば分かります！」

（そんなこと）

アウラは、少年を睨み頬を膨らませたが直に思い直した。

少年は、既にアウラが持つはずの騎士団から預かった荷物を持ってくれている。

自分の持ち分を背中に背負い胸にはアウラの荷物を掛けている。両手には、街で騎士から渡された予備の火打ち式の銃を二丁。自分とえば、水の入った小さな水差しと肩掛けになった分厚い書物と着替えが入った革袋が二つ。

それでも少年は泥濘んだ地面から、ずぼずぼ足を抜き進んでいく。少年の身体は、それ程大きくないのに何処にそんな力があるのか分からない。

屈強な騎士たちでさえ、疲れ切っているというのに……。

そう言えば、少年は細い見た目の割に引き締まった身体をしている事を思い出す。

昨夜、少年の部屋での出来事を思い出しアウラは、急激に顔が熱くなる事を感じた。

山間の野は、広いと言っても平地に広がる野に敷かれた街道程もない。

雨をやり過ごす間に開かれた会議で軍を割き、精鋭だけで北の神殿に行く事になったそうだが、それでも降り出した雨で泥濘む道無き道を想定し重い鎧と軍馬に着ける鎧は大方、街に置いていく事になった。

雨を避けて東回りに来たものの、山脈から延びた雲の足は速まり、結局追い付かれ一行は補給をした街で結局足止めを食らう羽目になったのだが、あの時少年の言葉に耳を貸した騎士団は正解だった、とアウラは確信を持った。

少なくとも野営のテントで強い風を伴った豪雨をやり過ごすのは難儀な事である。

思ったより雨が酷く、あのまま川沿いを北に上って行ったらどうなっていたか分からない。

下手をすれば、鉄砲水の濁流に吞まれ、精強の騎士団と言えども全滅の憂き目に遭っていたかも知れないからだ。

シユベルクの街も、あの二人の騎士が水門を閉めるように忠告し

に言ったのだから大丈夫だろう。

ほっと溜息を吐きながら、アウラは騎士たちが借り切った街宿の自分に当てがわれた部屋の窓から檜のように降る雨を眺めていた。

黒い空が光り出したと思ったら遅れて雷鳴を轟かせ始め、光と雷鳴の間隔は徐々に狭くなって来ている。

その内、光と同時に轟音が轟き暫く耳を両手で押さえ絶えていたが、次第に心細くなつて来る。

光と轟音の間に自分の悲鳴が混じり出す。

音が止んだ……その隙に机に置かれている燭台の蠟燭に火を灯し、それを手に部屋を出た。

一抹の不安はあるものの、暗闇を裂く光が射し込む部屋と轟音には耐え兼ねる。

アウラは、自分の部屋を出ると小走りに隣の部屋にいる少年の下に向い部屋の扉を開いた。

アウラが扉を開いた瞬間、窓から一際大きな轟音を響かせ雷鳴が轟き、暗闇を裂く光が窓から差し込み部屋の様子を照らし出した。

「……」

アウラの紫水晶の瞳には、轟音が聞こえなくなってしまう程の衝撃的な光景が飛び込み、頭の中は真っ白になった。

「きゃあ——！ 覗き魔——、……と叫ぶべきなのかなあ？ この場合……何時かのアウラみたいに」

雷鳴の間の暗闇に見えなくなった少年の状態をアウラが把握した時、雷鳴が轟き窓から光が出し込み少年の姿を照らし出した。

「きゃあ——ばかあ！ 露出狂、覗き魔あ——！」

アウラが少年の姿を見て悲鳴を上げた。

「気にする事はまいかなあ？ これでお互い様で事だ」

「わ、わわ、私が気にします！ な、ななな、何故、服着てないんですかあ！ 覗き魔さんはあ——、それにお互い様って……私は女の子ですよ！ 見られた裸の重みが違うもん……裸、見られたもん

……私……女の子だもん……ふえん」

アウラは、目尻を下げ顔に歪めた。

「何も泣く事はないだろ？ 俺の部屋だし別にいいじゃないか……それに今覗いているのはアウラの方だろ？ まあ、いいか減るもんじゃないし……でも、そんなに一所を見詰められるとちょっと……恥ずかしいなあ」

「ぐすん……えっ!？」

我に帰ったアウラは、少年の一点を見詰めて固まっている事を指摘され、顔を真っ赤に染め上げ両手で眼を覆った。

「ぐすん……うわぁん」

初めて異性の裸を見てしまった恥ずかしさと少年に指摘された事でアウラは混乱し泣き出した。

「なあ？ アウラ！ アウラってば、お前顔が赤いぞ。アウラ熱でもあるのか？」

アウラは不意に掛けられた声で我に帰る。

「きゃっ!」

驚いた拍子に泥濘に足を取られ転びそうになった時、少年の手が支えてくれた。

「あ、ありがとうございます……？ 銃は？」

少年が両手に持っていたはずの銃がない。

「上」

アウラは、少年が指差した方向に視線を向けた。

銃は宙で一瞬止まり、ゆっくり半回転しながら落ちてくる。

アウラは、ぽかーんと口を開けたまま少年に視線を戻す。

少年は微笑んでいて銃を見ていない。

アウラの身体を支えていた両手を離すと少年が腕を伸ばした。

銃は計ったように少年の手に戻った。

少年がアウラの顔を見たまま微笑んでいる。

「今……何をしたの？」

アウラは啞然と少年を見て尋ねた。

「特に何をした訳じゃない。ただ他の人より――」

「先頭の様子が変だぞ」

二人の傍を歩いていた騎士に声を掛けられた。

先頭の騎士たちが一斉に伏せ出した。

水面に波紋が広がるように先頭から順に前にいた騎士たちが伏せていく。

「もう少しで神殿だというのに忌々しいな」

ランディーが苦虫を噛み潰した。

やや、なだらかに下った場所に小さく神殿が見えている。

草で緑に見える地面の一部が帯状に黒い。

「斥候を出せ」

ランディーの指示で斥候が蛇のように野を這う姿勢で神殿の方に向かった。

「ランディー様 どうなされたのですか？」

「先客かなあ？」

ランディーの代わりに少年が答えた。

「そのようだ。草原が荒れている」

陽も傾き掛けた頃、ランディーが放った斥候が戻り報告を寄こした。

「人影は確認できませんでしたが神殿に入ったと思われる痕跡多数確認、既に神殿を後にした模様です」

ランディーは報告を受け、野営準備の指示を出した。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十一話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 く
―）<

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十二話

壁画の伝言 メッセージ

何処からか切り出して来たと思われる大きな石積み神殿を中心に崩れ去った石の街跡が見て取れる。

神殿と石造りの家は所々苔むしていて崩れている所が目立っていた。

先客たちが泥足で歩いた跡が残されているが、その数から少人数が調査していた事も読み取れる。

足跡は古くない。

調査中、ランディーたちの接近を逸早く察知して立ち去ったと思われる。

ランディーが調査の指示を細かく指示を出し最後に言った。

「これから神殿の調査に移るが、我々より先に神殿に隠されていると思われる偉大なる魔女の禁術書の場所を嗅ぎ付け来た者たちがいる。まだ近くに潜んでいる可能性が高い。それに後を追って来ている者たちもいるかも知れない。見張りの者は気を抜くな」

「はっ」

「イミテーションを含め、数ある禁術書の中でもグランソルシエールの禁術書は、これまでその存在を知られながら今日まで一度もその隠された場所も情報も明確に示された事の無い代物だ。何故、今になって集まる情報が、この神殿に集中するのか謎も多い。皆も心して事に当たるように」

「はっ」

ランディーは言葉を一度きり騎士たちを見渡す。

「残された記述と口伝から察するに禁術書を隠したのは、天才魔術師ソルシエール本人であるらしい。どんなブービートラップが仕掛

けてあるか分からない心して掛れいいな。怪しいと感じた物には決して触るな、報告の上、指示があるまで軽拳は控えよ。それでは調査に移ってくれ」

騎士たちは、それぞれ細かな指示の確認をしながら調査を始め出した。

調査出発前の小会議で現地調査期間は最大で五日と決められたが、神殿到着時に持ち込んだ食糧と予備装備の数量から調査期間は最大で三日と改められた。

先客の動向調査に時間を裂いた事と泥濘に進軍を阻まれ予定より大幅に到着が遅れた事が原因だった。

予想以上に泥濘に手間取り、身を軽くする為に予備装備を大半減らし道中で捨てて来た事が大きく影響している。

二人は、ランディーの言い付けで邪魔をしないよう崩れた石積み民家跡の石を椅子代わりに座っていた。

騎士隊ではないアウラと少年に仕事はない。

アウラの仕事は、トラップかも知れない魔法陣など魔術に関する痕跡が見付かった時だ。

ただ待っているだけと言うのは、思う以上に退屈なもので自分でも気付かない内にアウラの視線は、ぼかんと口を開け辺りを見渡しでは首を捻る少年を観察していた。

「覗き魔さん？ 落ち着かないようですね？」

「う——ん……この神殿なんだけど……何処かで見たようなあ、気がするんだけどなあ……気のせいだよなあ？ アウラ」

「私に聞かれても……神殿なんて何処も似たような造りですから、気のせいかも知れませんか」

「アウラは、この神殿に見覚え無いのかあ？ 北の街に住んでたんだろ？ 確かグリーンベルと言ったっけ？」

「グリーンベルは、もっと西に在りましたから、この神殿を見た覚えは無いです。無論来た事もないですよ」

「そっか、アウラの生まれた街はもつと西にあるのか……神殿の近くにあったのなら行って見たかったのになあ」

「……今は、もうグリンベルの街跡に行ったとしても何もないです」
アウラは、眼頭が熱くなるのを感じ紫水晶のような瞳を瞼の奥に隠した。

「……」

暇を持て余すあまり話し出したのはいいが、故郷の話になるとやはり辛い。

「グリンベルにも神殿がありました。教会が来る前から使われていなかったみたいですけど、神殿には綺麗な壁画が描かれていて街の物や旅の絵師たちが立ち寄り綺麗に管理されていたみたいです。放浪の絵師さんがよく立ち寄る姿を覚えてます」

「あつ！ 思い出した」

アウラの隣に座っていた少年が突然立ち上がった。

アウラが視線を上げると陽の光を浴びた小年の白銀にブルーマー
ルが映える髪が光を通し青く輝いて見える。

少年がウラの手を掴み、引きずるように神殿の方に歩き出した。

「ちょ……なに？ いったい何処に？ わ、私を連れていくつもり
なんですか……まさか！ 人気のない所に私を連れ込んで……覗き
魔さんは私を——」

少年の言葉がアウラの言葉を遮った。

「思い出したかも知れない。この神殿の壁画を見れば分かる。たぶ
ん」

「勝手に入ったらランディー様に怒られますよ」

調査をしている騎士たちを気にした風もなく押し退け少年は神殿
の中へと入って行く。

「何事か！」

神殿内で調査をしていたランディーが声を荒げたが、少年は何食
わぬ顔をして神殿の中央まで行き、立ち止まった。

「やっぱりそうだ」

少年が、神殿の高い天井と高い壁一面に描かれている壁画を獲物を探す鷹のような鋭い眼で見渡している。

アウラも少年の眼が辿って軌跡を追うように神殿の中を見渡した。

外見に幾分崩れた所があるものの、神殿の中は綺麗な状態を保っている。

「急にどうしたのですか？」

「この壁に描かれた壁画を覚えている。この神殿を守っていたのはあの風狼だ。母さんに連れられて来た時に、ここで風狼に出会ったんだ」

「それが何か？ ……もしかして覗き魔さんは、お母様の冤罪を晴らすうとしてるの？」

「う——ん、でもあるけど、アウラはグランソルシエールの禁術書を探しているんだろ？ グリンベルの悪魔を討つために」

「そうですね……べ、別にどうしてもという訳じゃ……」

アウラは胸の中に広がる、きりきりとした痛みを感じ誤魔化すように語尾を濁した。

——本当は違う……グリンベルの悪魔を討ちたい。出来る事なら今すぐにでも……。

少年に対する何処か後ろめたい気持ちとそれを思う自分の気持ちが切なかった。

「グランソルシエールの禁術書はここに眠ってる」

「何を根拠に……」

アウラは、少年の突然の言葉に驚きと疑念を抱いた。

「あそこに書かれている文字が見えるか？ アウラ」

少年が戦に赴く騎士たちの様子を壁一面に描いた壁画の一点を指差した。

「どこに？ 書かれているのですか？ 私には見えません」

アウラは、紫水晶の瞳を少年が指差す辺りを中心に壁画の描かれた壁に視線を彷徨させた。

「見えないのか？ 右の縁から七分目、上の縁から三分目辺りに描かれた騎士が持つ軍旗を見てみなよ。文字が書かれているだろ？俺はここに來た事がある」

アウラには、軍旗どころか描かれている人物たちが小さな虫程度にしか見えない。

周りに集まった騎士たちもざわめきながら、少年が指差したあたりを探し始めた。

「いったいどんな事が書かれているの？」

アウラの紫水晶の瞳が持ち前の好奇心で輝き出した。

「俺には読めない」

少年が騎士に羊皮紙と羽ペンを借りると壁画に描かれた文字を書き始めた。

『n a u t h i z ・ p a r t h ・ t e i w a z ・ n a u t h i z』

少年は書き終えた羊皮紙をアウラに向けた。

アウラは少年の書いた文字を読み上げる。

「ナウシズ・パース・テイワズ・ナウシズ」

アウラがもう一度読み返す。

「ナウシズ・パース・テイワズ・ナウシズ」

「解けるか？」

ざわめいていた騎士たちは息を吞んで見守っている。

「……」

アウラが幼い頃から興味を持ち、今では読みなれた文字。

「……」

アウラは、持っているだけの知識を頭の中で組み立てる。

「解りました」

アウラは、桃色の髪を揺らし顔を上げる。

紫水晶の瞳を輝かせながら、薄桃色の小ぶりで形の良い唇が、偉ッルシエール

大な魔女が残したと思われる壁画の伝言メッセージを繰り返し呟いた。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十二話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございます。く

く

次回をお楽しみに！

本日、ブログ開設二周年記念UPでございます。

く グランソルシエールの禁術書 く 第十三話

ちから
魔術を欲する者たち

壁画に残された碑文^{メッセージ}を読むアウラの様子を窺^うがう騎士たちは、何時しか言葉を失い神殿には静寂が流れている。

アウラの眼に映し出された文字。

『^{ナウシズ}nauthiz・^{パース}parth・^{ティウス}teiwas・^{ナウシズ}nauthiz』
(苦難を越えよ。秘められた重要な財産を探せ、されば見つかる)

「なんて書いてあるんだあ、アウラ」

少年は碧眼の瞳をアウラに向けた。

アウラの形の良い薄桃色の唇が言葉を紡ぐ。

「苦難を越えよ。秘められた重要な財産を探せ、されば見つかる」

「苦難を越えよ……、苦難……これは厄介な事になるかも知れんな」
壁画に残された碑文^{メッセージ}を解読する様子を傍で見守っていたランディがアウラの言葉を反芻した。

「はい。ランディー様……恐らく神殿の何処かに盗掘者たち除けの罾^わや仕掛け……或いは魔法陣があると思われます」

アウラは、紫水晶の瞳を輝かせて推測を立てた。

「盗掘者たち除けの罾^わや仕掛けがあるのは至極当然な事だがね。魔法陣がある……何故、そう思うのだね？ アウラ」

「それはソルシエールが天才魔術師だからです。彼女は禁術書の力を求めようとしている者を試しているのだと思います」

「魔法陣を解いて見せると言っているんだね？ 解けぬ者には与えぬと、そう……」

「ランディー様も御存じの様に文献等から見て取れる魔術の力は強

大です。解ぬ者は持つべきではないと、彼女はそう言っているのかも知れません」

「あつ！」

緊迫する空気を破り少年が、何かを思い出したのか、突然声を上げた。

「静かにしてして下さい。大事な話の途中です」

何かを言おうとした少年にアウラは鋭い紫の視線を向けた。

隠されたグランソルシエールの禁術書をもし探し出す事が出来れば、グランベルの悪魔を討つという、アウラの願いに大きく近付く事が出来る。

アウラの気持ちは高鳴っていた。

「しかし、どうして魔術は滅ぼされ、魔術師たちは滅ばなければならなかったのかね？ それ程までに強大な力が……何故に」

ランディーが以前から持っていた疑問を口にした。

「強過ぎたからだ。正確に言うと魔術がだ」

「覗き魔さん！ 静かにし——」

ランディーがアウラの前に手をやりアウラの言葉を制した。

アウラは、自分が平常心でなかった事に気付き小さく息を吐き呼吸を整えた。

「聞こうか。山羊飼い」

ランディーが、そう言う少年は微笑みを浮かべ話し出した。

「母さんに聞いた話だ。母さんは俺を育てる為に苦労し悩んだと言っていた。それで母さんは、住み慣れた森を出て人里に下りる事を決め、人の世を回って俺を育てた。その時、母さんは人の姿を——」
少年の話を興味深く聞いていたアウラは、平常心に戻りつつあった。

この先、少年が発するであろう、言葉を慌てて遮る。

「覗き魔さんその事は——」

アウラは、少年が体内に宿しているグリーンベルの悪魔デモンの事を知っている。

少年の母が、グリーンベルの街を焼き払ったかも知れないと言う事を……。

——もし、少年の母がグリーンベルの悪魔だとランディーをはじめ、他の騎士たちに知られたら……。

無事では済まない……アウラは、咄嗟にそう思った。

魔術同様、軍に利用されるか最悪、教会に連れていかれ殺されるかも知れない。

憎むべきはずの仇を咄嗟に庇っている自分にアウラは戸惑っていた。

そんな自分に微笑み掛ける少年の微笑みがアウラの胸に僅かに灯る恋心を射抜いていく。

「母が人の姿……？」

ランディーが疑問を抱いた視線で少年を見ている。

「俺の育ての親はドラゴンだ」

アウラの心配を余所に少年が答えた。

「ドラゴンだと!？」

周りにいる騎士たちもざわめき始めている。

「覗き魔さん!」

アウラが声を張り上げ、ランディーに眼をやった。

ランディーが薄い笑みを浮かべ唇を吊り上ている。

「それは、興味深い事だ……大いにね」

少年の宿している循環の力も魔術に匹敵するかそれ以上だろう。

「分かってる、アウラ。でも近い内にはれるような気がするなあ」
「……」

アウラは、ランディーの表情を見て確信した。

少年がドラゴンの力を宿している事にランディーは、まだ気付いていない様子だ。

やはり、循鱗の力を知られれば、誰かに利用されるかも知れないと……。

魔術の力を欲する自分も同じなのだと知りながら矛盾する思いが湧き上がる。

この少年の秘めた力を他の誰かに利用されるかも知れない。

そんな事は嫌だと思った。

まだ気付いたばかりの灯火のような小さな恋心が独占欲を駆り立てる、胸中の大半は循鱗を討ちたいと思っているのに……。

少年は、アウラにやわらかい笑みを向けて再び話し始めようとした。

「俺の——」

「ドラゴン……覗き魔……、きみはいつたい何を覗いたのかね？アウラの何を！」

少年の言葉を遮り、ランディーが喰い付くように少年に問い掛けた。

「ランディー様！」

アウラは顔を赤らめ俯いた。

「そっちに喰い付くのか」

「すまない。場の空気が少々重くなって来たんでな、和ませる為だ続けてくれ、その前に大勢に聞かれると不味いなら人払いをするが」

「……」

「しなくていい」

「そうか。なら続けてくれ」

「俺の育ての母はドラゴンだ、四年前に死んだ。母さんは俺を、とある滅んだ場所で拾った、と言っていた」

「とある滅んだ場所？　覗き魔さんが住んでいた魔物に滅ぼされた街の事？」

アウラは瞳を揺らした。

少年は何も言わずに碧眼の眼をアウラに向ける。

「ごめんなさい」

少年は言葉を続けた。

「人里に下りた母さんは魔術師たちが滅ぼされていった理由に納得した。人間の知恵と新しく物を作り出す早さを目の当たりにしてだ。遠い昔、凶悪な魔物を極寒極北の氷土に追いやり、閉じ込める程の力を持った魔術師が剣や弓に敵わなかったと思うか？」

「思わんから不思議なのだ」

ランデイーの言葉にアウラが桃色の細い髪を揺らして頷いた。

「魔術師は陣を描いて何らかの切っ掛けを与え、魔術の力を発揮行使すると俺は考えてる。俺が知るところによれば、その方法は様々で魔術師たち個人の秘密事項だったそうだ」

「例えば？」

アウラの眼に好奇の光が宿った。

「例えば……呪文の詠唱、羊皮紙や石板に書いた文字、道具とか……」

「そうだなあ——、鐘の音とかかなあ」

少年がアウラに微笑み掛けた。

「力を行使する魔術の陣を描くには膨大な時間を要する。強大な魔術になればなるほど陣も複雑になり、尚更手間の掛かる作業だと聞いている」

アウラは頷きながら少年の話に聞き入った。

「言い換えれば陣を描いていない魔術師は、ただの人に過ぎない。ランデイー騎士たちが持つ剣や弓で十分あしらう事が出来るし、追い詰める事も難しくない。母さんは遠い昔から魔術師を知っていたが扱える人間は全体の内でも極僅かな人間だったと言っていた。その他の大多数が、農耕や狩猟に使う便利な道具だったものを発展させ武器に変え更に進化させ、大多数で魔術師を追い詰めたのだろう」と母さんは言っていた。何者かが魔術師を弾圧し魔術師狩りを先導したらしいが、その時母さんにとっては特別興味がある出来事ではなかったらしい」

「確かにな」

「ここからは俺の推測だけど……それに魔術を扱う天稟でもない限り、遠い昔でも魔術を扱う事が出来なかったのだとしたら、さぞ、敬われ、また疎まれただろう、と思うなあ」

「ならば、ソルシエールの禁術書は諸刃の剣どころか扱うには、それ相応の手間が掛る……掛り過ぎる……代物と言う事が」

ランディーは無言で眼を瞑った。

「そうでもない、魔術が弾圧を受け魔術師たちが狩られ、辺境に追われた後もソルシエールが天才魔術師と称えられた由縁がそこにあるんじゃないかなあ」

「もしかして――」

アウラが少年の言葉に何かを感じ取った。

紫水晶の瞳をころころ揺らしている。

少年はアウラの言葉の後を引き取った。

「例えば陣を用いず魔術を行使するとか……かなあ、それを出来るかも知れない人物を俺は一人知っている」

「それは誰？」

アウラが少年の碧眼を覗き込んだ。

「内緒だ。まあ、強力な魔術を誰もが簡単に使えてしまったら、生き物が住む場所が無くなってしまいそうだけどなあ」

少年は微笑みで答え、祭壇に祭られていた奇怪な像に手を置いてもたれ掛かった。

「あれ？」

古語で書かれた翻訳が鍵だったのか、調査の段階でこれといった報告を受けていなかった像が倒れた途端、祭壇から石臼で粉を引く時のような音を立て始め、祭壇は徐々に床面へと沈み込んでいく。祭壇が沈んだ後、現れた後ろの汚れない白い壁には扉が設けられていた。

扉は手を掛けてもいないのにまるで、この時を待っていたかのようには開き出した。

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十三話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 く

く

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十四話

グランソルシエール
偉大な魔女の禁術書

祭壇が退いた後に現れた壁は陽の光に触れておらず白く、埃や手垢の汚れもない。

壁の状態から、これまで誰の眼にも触れられた事のない様子が見て取れた。

山羊飼いの少年とアウラ、ランディーをはじめ、彼の側近の騎士数名を選抜し扉を潜った。

神殿の地下へ繋がると思われる螺旋階段が視線の先に見える。

螺旋階段へと続く通路は思いの外明るかった。

所々に鏡か何かを取り付けられているのか地上の光を運んでくる通気口を有効に使用し光の屈折を利用して明りを得ているようだ。もしかすると偉大な魔女^{グランソルシエール}が魔術で作り出している光りなのかも知れない。

しかし、実際にグランソルシエールが残した魔術による明かりだと考えれば、何百年も昔から継続的に魔術が作用している事になる。これだけ長い年月を継続させるには、それ相応の労と時間を費やさなければならぬ。

並みの魔術師には、困難な事でも天才魔術師と今日まで言い伝えられる程のグランソルシエールなら呼吸をするに等しい作業だったのかも知れない。

そう思ってしまう程、地下に通路の螺旋階段は明るかった。

「何か、簡単に見つかってしまったような気がするんだけど……、グランソルシエールって案外、間抜けだったのかなあ」

少年が碧眼の瞳を弓のように反らせた。

「いや、そうでもない。巨大な絵画に残された伝言^{メッセージ}を今日まで見付

けた者はおらず、あの高さに残された文字を見つけ出し、あまつさえ小さな文字を読み取るなど普通の人間には到底出来まい。まず一つ目、探せ、されば見つかる」

金髪を揺らし難しい顔をしたランディーが壁画に残されたメッセージを反芻した。

「覗き魔さんが見つけた古語……戻してみても気付いた事ですが、像が見詰めていた先に残された壁画に隠された古語のメッセージ……ですね。二つ目は、秘められた財産とは……おそらく古語を翻訳する為の資料や知識です。私は、この神殿の何処かに隠されているに違いと考えます」

アウラは紫水晶の瞳を少年に向けた。

少年は何時ものように微笑みを浮かべている。

——なによ！ 覗き魔さんの見解が聞きたいのに！

少年の微笑みからは、アウラの思いなど微塵も気付いていないように見える。

何だか、無性に腹立たしく思う。

アウラは、胸の奥に切ない痛みを感じた。

アウラの気持ちを余所にランディーが少年に向けられた問いに答えた。

「アウラが翻訳した古語で書かれたメッセージだね。古語を資料を用いず翻訳するのも至難の業だ。まったく私は運がいい」

「そして、三つ目……苦難を乗り越えよ……いったいどんな試練が待っているんでしょう……」

「分からねね。何れにせよ仕掛けたのは、あのグランソルシエールなのだからな」

アウラの紫水晶の瞳が少し湿り始めた。

小ぶりで薄い唇も小刻みに震えている。

「怖いのか？ 大丈夫、アウラに危険が及んだら俺が何とかするか

ら

アウラは、少年の微笑み掛ける視線から眼を逸らした。

これから得ようとしている力は、グリーンベルの仇かも知れない。

この少年の中に宿るドラゴンの循環ちからを滅する為に自分自身が手に入れたいと願ったグランソルシエールの禁術書なのだから……。

そんな自分が屈託のない微笑みを浮かべ『守る』と言ってくれた少年を見れるはずがない。

この少年は、一方的に自らが言い出した約束を律儀に守ろうとしている。

少年の望みはアウラと同様。長く過酷だっただろう、往く先々で冷遇され続けた山羊を連れての長旅に終止符を打ち安住の地を求め、長閑な日々を迎えようと選んで住み始めたに違いない街と母を襲った魔物たちを創り出した魔術師を討つ事。

アウラは思う。

それでもこの山羊飼いの少年は、禁術書を手に入れようとしている自分に危険が迫れば、自分の命も顧かえりみる事無く、きっと守ってくれようとするだろう、自らが交わした約束を果たす為に……。

数奇な出会い方をした、この少年を心の何処かで自分は信用している。

この少年が体内に宿すドラゴンがグリーンベルの悪魔ではないと、はつきり分かるまで胸の奥に閉じ込めたままにするであろう、少年に対して生まれた灯火のように淡く揺れる自分の気持ち、何にでもあるかという事にもう気付いている。

この少年は何時も飄々とし間が抜けていて、いい加減な事を言っているように思える。

しかし、彼が言う事は的を得ていて実際にそれらは当り、少年が言ったように現実のものとなってきた。

それらの経緯から彼が言う事、全てが真実でもあるかのようにも思え、それは信用に値し頼もしい魅力のある少年の姿だった。

風狼ウォルフスが現れた時、捨て身で自分を守ってくれた……ちよつとかつ

こ良かったぞ。

などと思っていると無意識の内に階段を並んで降りている少年の手を知らず知らずの間に握っていた事に気づきアウラは、顔を赤らめた。

程なくして地下に降りていた階段が視線の先で終わっている。

広いダンスホールのようにも見える床一面には、一つの魔法陣が、薄ら積った埃の下に描かれ一見ただけで、その複雑な模様が見て取れた。

グランソルシエル自らが禁術書を残し隠したと伝えられていた噂は、やっぱり伊達じゃない。

アウラの仕事はこれから始まる。

この難解な魔法陣^{マジ}を解けば、グリーンベルの悪魔を討てるだけの力が綴られているだろう、グランソルシエルの禁術書を手中に出来るのだ。

アウラは、胸の鼓動が早まり弾んでいる事に気付くと同時に、弾めば弾む程に息苦しさ、きりきり痛み出す切ない気持ちを感じた。

「あっ！」

少年が不意に声を上げた。

「どうしてんだね？ 急に」

ランディーが少年に問い掛けた。

「言い忘れてたけど……、街跡の外に嫌な気配を感じたんだっ……忘れてた」

「それは先客かね？ それとも……魔物かね？」

「そこまでは遠過ぎて分からない。魔物だとしたら循鱗が疼き出すんだけど……いつもは」

「循鱗？ 何かね、それは」

「ドラゴンの循鱗^{ちから}だ……詳しく説明をする気もないし説明しなくてもその内分かる。たぶん」

そう言って少年は壁に近付き耳を当てた。

「動き出した……大地を蹴る音……恐らく軍隊だ金属が細かくぶつかる音がする……が、まだ遠い。奴らは援軍を待って禁術書が無事に運び出されるまで潜んでいるのかも知れないなあ」

「戻った方がいいのかな？ 我々は」

「その方がいいと思うけど？ どう思う？ アウラ」

「わ、私に聞かれても……」

アウラは突然、少年の問い掛けに驚いたが、この魔法陣を解く事が出来る可能を持っているのはこの場では自分だけだと思い答えた。

「ランディー様……行ってください」

「分かった。そうしよう」

ランディーが身を翻すと他の騎士たちが、その後に着いて神殿の外に向かう階段を上っていった。

「ランディー頑張るんだぞお。死ぬなよ絶対に！ 俺の目覚めが悪くなるから」

「……覗き魔さんも行って下さい」

「……分かった。そうする」

少年が寂しそうな背中をアウラに見せ、元来た階段を上り始めた。

少年が神殿の外に出ると神殿内の明かりとは違う眩い陽の光に眼がくらむ。

先に戻っていたランディーと側近たちの指示を受けた騎士たちが戦拵えをしていた。

敵の姿はまだ見えてない。

こちらの動きに異変を感じた敵の斥候が状況を本陣に伝えたのだろう。

一筋の煙が天に延びた。

敵側もまだ戦拵えを整え始めたばかりなのか、今すぐ攻めて来られるといった気配は感じられない。

地下室に入る前に感じ取った気配は、敵の援軍が先遣部隊に合流

しようと思いつく気配だったのか、進軍を始めた動きなのかまでは分からない。

「こちらの援軍が神殿に到着出来るのは、早くて二日後それまで我々だけで持ち堪えなければならぬ……さて、どうするか」

ランディーが少年に金色の視線を向けた。

「俺に聞かれてもなあ」

「我々は神殿に到るまでの道中、予備の装備を捨てて来ている。祭壇裏の扉を発見して直ぐ、正確な神殿までの道順を記した伝文と地図を持たせ早馬を出したが、あの泥濘では早い段階での援軍到着を期待し過ぎるのは愚かな事だ」

「敵の条件も似たようなものだと思うけどなあ、既に敵の先遣隊が援軍と合流してもランディーたちに向こうの先遣隊も援軍を待っていた事を気取られなくなつただろうし、監視の兵を残して相当な距離を取らなければならぬはずだ……それに悪路の条件も同じだと思うけどなあ」

「それはそうなんだがね」

「天運に任せるさ、俺は……。後はアウラがどれだけ早く魔法陣を解いてくれるかだ。早く解いてくれれば、敵が攻めてくる前に逃げる事もできるからなあ」

「私は騎士なんですね。天運などに任せる訳にはいかないんだがね。それに逃げる訳にもいかない」

「いざと言う時は、何とかするさ、ランディーがだけどなあ」

ランディーは、やれやれと言つたように手の平を開いて肩を竦めた。

夜が明け幾時か経つた頃、一人の見張りが人影に気付いた。
「何者か」

一人の騎士が声を張り上げた。

桜色の髪の毛を、そよ吹く風に遊ばせた人物が立っていた。
騎士たちは素早く武器を構え、その人物を囲んでいる。

その人物は、無人の野を歩くかのように歩みを進め、騎士たちの間を割って神殿に向かって行く。

ランディーが剣の柄に手を掛けたが、少年の様子は何時ものように、ぼかんとした間抜け面でその人物を見たいた。

「やれやれ……、旦那が留守だと言うのに昨日といい、今日といい大勢で人の住み家に土足で入ってくれる」

「……何者かな？」

「随分な事を聞いてくれるねえ——、無粋な事を聞くもんじゃない、ここに住人だよ。私は」

「ここに住人？」

「そう、私の名はソルシエル・エクル。あんたたちが云う、偉大な魔女^{ソルシエル}さね」

古の魔術師の名を耳にしたランディーは、険しい表情を浮かべ眉間を寄せた。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十四話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 く

ーく

お楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十五話

偽りの真実 前編

綺麗な桜色の長い髪を後ろで乱暴に麻紐で纏め、紫水晶のような瞳の美女が薄い夜着のように透ける羽衣を纏って立っていた。

羽衣の襟元は、今にも重なる襟を押しつけ弾け出しそうな程の豊かな胸が谷間を覗かせている。

「グランソシエール？ 貴様、たいそうな虚言を吐く。人を本気で謀るなら、もつと控え目な嘘を吐いた方良いと思うがね」
たばか

「本当さね。私の名はソルシエールさ」

「グランソルシエールは、五百年程も昔の人物だぞ」

「そうさね、今の私は五百歳を有に越える人妻さね、いや、旦那は風狼だから狼妻と言うべきかな？」

ソルシエールが首を傾げた後、左右に振り騎士たちを見渡した。

ソルシエールの周りを囲んでいる騎士たちは、その名を聞き動揺の色を見せている。

「魔術で不老の術でも編み出したのかね？」

ランディーが問い掛けた。

「魔術にそんな都合の良い物があると思っているのかい？ 若さの秘訣を教えてやるのか？」

ソルシエールと名乗る人物は、紫水晶のような瞳を踊らせながら妖艶な笑みを作り出した。

「若さを保つ秘訣は恋する事さね。私は若い時から毎晩のように風狼の唾液を吸っていたからねえ」

ソルシエールは、そう言うつと神殿の中に視線を移した。

「おや、扉が開いてるね？ あんたたちが壁画の伝言^{メッセージ}を見つけて解いたのかい？」

「いや、壁画の文字を見付けたのは、この少年だ」

ランディーが山羊飼いの少年を指差した。

「メッセージを翻訳したのは、アウラだ。今、おばさんの描いた魔法陣を解読している。俺と同じ年頃の羊飼いの女の子だ……それにしてもおばさん……アウラに似てるなあ？」

少年が微笑みを浮かべ、ソルシエールの顔を見て言った。

「そりゃそ、その娘は美人に違いなねえ——。面白い！ 今、その娘は最後の苦難に挑んでるんだね？ さて、解けるか解けざるか見ものだよ。あつははは」

ソルシエールが大声で笑った。

「はあ——、さて、あんたたちは禁術書を欲して、この神殿に来たんだね？」

ソルシエールが眼光を研ぎ、再び周りを見渡した。

鋭い眼光を受けた騎士たちは、その鋭さに思わず後退りした。

「如何にも禁術書を求めて、ここに來たのだがね」

ランディーも眼光炯炯の視線で答えた。

「まあ、あんた達は運がいい。今日の私は機嫌がいいからな。何んにせよ、私の残したメッセージを初めて見付けてくれたんだしねえ……見逃してやるとするさね。折角、メッセージを残してやったと言うのに五百年もの間、誰一人見付けてくれないというのも寂しいもんだよ。まったく生き残りの魔術師は脳無ばかりなのかねえ、はあ——」

ソルシエールは呆れた顔をして大きな溜息を吐いた。

「見付けてほしいなら、最初から隠さなければいい」

少年がソルシエールに向いそう言った。

「そうもいかなかったんだよ。いろいろ事情があつてね。大人の事情と言うやつさね」

ソルシエールは視線を落とし小さく溜息を吐いた。

「質問があるんだが、宜しいかな？」

ランディーがソルシエールに問い掛けた。

「言ってみなさい。坊や、けれど答えるかどうかは分からないよ」

「何故、近年になって禁術書の隠された正確な場所の情報が回るようになったのですか？ ソルシエール、あなたが情報を自ら流しているのでは？ と疑っているのだがね」

「なかなか察しがいいねえ、騎士殿。その通りだよ。流しているのは私たちさね」

「私たち？ あなたの他に誰が何の為に」

「風狼だよなあ」

少年が呟くように言った。

「まったく勘のいいガキどもだねえ、その通りだよ」

ソルシエールは一度息を吐くと言葉を続けた。

「近年、私たちが遠い昔に北の大地に閉じ込めた魔物たちを解放し、その力を我が物にしようとしている者たちがいる。それどころか新たに魔物の軍勢を創り出し世界を我が物にせんと企む魔術師とその一団を誘き寄せる為さね」

「貴女程の魔術をお持ちなら、待たずとも討って出ればよいだろうに」

「騎士殿よ。貴殿たちはその一団を知っているのかい？」

「存じております。我々もその存在を討つために魔術を集めております故に」

「毒を以て毒を制するか」

「眼には眼を、歯には歯をですか……我々、戦を生業にしている騎士流に言えば」

「で？」

「……と申しますと？」

「その一団の尻尾は捕まえたのかい？」

「お恥ずかしい話ですが、まだ……」

傍で話を聞いていた少年が言葉を挟んだ。

「隠れて尻尾を出さなければ、餌を捲いて誘き寄せればいい。餌が上等だから直ぐに飛びつく。討つて出なくても餌に飛び付き、このこやつて来る奴らを狭い山間に引き込んで、長く延びた軍を分断、各個撃破するって事かなあ」

「まったく、勘のいいガキだよ。敵戦力の分断はセオリーだろ？」

何せ、こっちの戦力は風狼と私、二人だからねえ」

ソルシエールは桜色の髪を掻いた。

「魔術の事でお聞きしたい事があるのだが宜しいですか？」

「また質問かい？ おしゃべりな男は嫌いだよ。何度も親切に答えて貰えると思っているのかい？ まあいい、言ってみな」

そう言いながらもソルシエールが答えてくれる事を分かっている、ランディーがやれやれと肩を竦めた。

「魔術で本当にその様なものを創り出せるのでしょうか？」

「創り出せる。理論上はねえ」

面倒臭そうにソルシエールが答えた。

「五百年程前、私たちは遠い昔に神々と人が呼んでいた者たちの力を借りて魔術を発展させた。魔術は強力だが陣を用するのに時間が掛り過ぎる。魔物はこちらの準備が整うまで待つてはくれないからねえ、陣を用いなくとも行使出来るように魔術を発展させる過程で考えられ、最後まで残った懸案は二通り、その内の一つは魔物並の力と魔物の強力な攻撃に耐えうる防御力を持った、魔力ではなく己の意志で動く言わば生命を持った鋼^{ゴレム}の人形、或いは魔法生物を創り出し陣を完成させるまで守り切る事だった」

「それも大変な思い付きだったのでは？」

「まあねえ、だから土地の豊穡や天候、商売、魔除け等、人々の生活や習慣に深い関わりを持っていた風狼^{だんな}たちの力を借りたのさ。結局、魔術ではそれらに生命まで与える事が出来ず頓挫したけどねえ、生命は生まれ出もので創り出すものではない。まあ、その前に禁術

書に残した魔術が完成したんだけどさ」

「今になって、それらを創り出そうとする者が現われたのですかな？」

「騎士殿もご存じのように魔物を封じ込めた魔術師たちはその後、追われる身になり、放牧者に扮して辺境に逃げる事になった。その混乱の際、完成していなかった魔術の殴り書きや写本やらを残して来たから、どこぞの馬鹿者が偶然見付け出してろくでもない事をおっぱじめたんだろうさね」

「……」

「どうしたんだい？ 騎士殿」

ランディーは難しい顔をして考え事をしているようだった。暫しの沈黙の後、結んでいた唇を開いた。

「もし、その様なものを創り出すという魔術を完成させた者がいたとしたら……驚きますか？」

「そりや驚くさね。神々の力を借りても創れなかった代物だよ」

「……七年前、グリンベルという街が滅びましたね。その時の事は世間には魔物の仕業と言う事で片が付きましたが、その事実は見た事もない魔物らしき死骸と魔法陣が発見され魔術が用いられた形跡と多数の異なる魔術痕も街中に残っておりその結果、魔術師によるものだと断定出来ました」

「何故、隠ぺいを？」

「当時、魔物による被害が増えていき、王国や教会の威信は失墜する一方で魔物に対峙する力として極秘裏に集めた魔術書と魔術師を使った魔術の導入が検討されていきましたから、反対派に対して魔術のイメージを損ねる訳にはいかなかったのです」

「その時の魔物らしきものが魔術によって創り出されたものだと？」

「そこまで断定はできませんが、おそらく……そして、その魔法陣からは今も魔物が誕生しているかと」

「俄かには信じられないねえ」

天才魔術師と呼ばれたソルシエールはその自負からか渋い顔をし

た。

「魔術を使っただと思われるその人物は、この神殿に來ています」

ランディーの言葉に少年は笑みを消し話を聞いている。

「今より高度な魔術を要した私たちの暗号を解き、その上まだ完成半ばの殴り書きの一部を基に魔術を完成させたと言うのかい？」

「はい。当時、若干八歳の少女です」

ランディーの話を傍で聞いていた少年がランディーの言葉に少年が言葉を荒げた。

「それじゃあ、まるでアウラがグリンベルの街を焼いた犯人のように聞こえるなあ？」

微笑みを消していた少年は険しい表情を見せた。

「ああ、そうだ。彼女はその夜、魔術書を抱えて燃え盛るグリンベルの街に戻って來たんだ」

少年の時間が氷り付いた。

まるで置き忘れられた人形のように……。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十五話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 く

ーく

お楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十六話

決意

暫しの沈黙が流れた後、腰掛けていた崩れ落ちた石壁から静かに腰を上げ、少年は神殿の入口へと向かった。

「話すのかね？ アウラに」

神殿の地下室に通ずる扉を潜ろうとした時、背後から届くランデイーの声に少年は歩みを止め振り返った。

「今話した事をアウラは知らない。彼女はグリーンベルの悪魔を討ちたい一心で魔術を学んで来たのだよ。『グリーンベルの仇を討つ』という彼女の強い意志が、当時今にも壊れそうだった彼女の心を支え、今も彼女の生きる支えになっている。きみはそれでも彼女に話すのかね？」

「分からないけど……心配ない。ただ、アウラの傍に居ただけだ」少年は静かに言い言葉を続けた。

「ランデイー……、お前はアウラを利用してるのか？ 魔術書を解けるアウラを」

「私は騎士だ。魔物から人々を守る義務がある。その為に利用できるものは人であれ物あれ使おうさ……しかし、アウラの過去を隠し見守り続けた事も事実だ」

「ランデイー……お前馬鹿だなあ、アウラは確かに仇を討ちたがっている……でも、それだけじゃない。それだけを支えにして生きている訳じゃない。だからアウラは微笑む事ができるんだろ？ 泣いたり怒ったり笑う事が出来るんだろ？」

「出会って間の無い、きみにアウラの何が分かって言うのかね」

「ランデイーやアウラの周囲にいる人たち、アウラが今住んでいる街の暮らしが、きつとアウラを支えてるに違いない……アウラは偉

大な魔術師になる可能性と類い稀に見る魔術の才能に溢れていても、俺が知っているアウラは、慈悲深い羊飼いのやさしい一人の女の子だ。俺はそれでいい。微笑んでくれるならそれでいい。その笑みを俺に向けてくれるなら更にいい」

少年は満面の笑みをランディーに向けてみせた。

「きみはよく微笑むのだな」

「微笑むさ。この微笑みは、母さんが死の間際、俺に見せてくれた。最後にやっと作れた笑顔だからなあ」

少年はそう言うと言ランディーに背中を向け地下に下りる階段に身体の正面を向けた。

「まさか！ 魔法陣の解析を止めに行くのかね？」

「……」

「無言は肯定を意味する。ならば仕方無い」

ランディーが腰の剣を鞘から抜き放った。

「止めに行く訳じゃない。約束を守りに行くだけだ」

「約束？ 何のだね」

「思い出したから……だ。それと俺の想いを果たす為に」

「アウラと何を約束したのか知らないが、共に旅をしてここ数日きみを見てきた。きみにはアウラに貸せる力など無い。勘の良さ素早さ、それに体力は有りそうだがね」

少年は止めていた歩みを進め出した。

「あつ！ 言うの忘れてたけど、例の奴らの動きがちょっと前から慌ただしくなつて来てるから……じゃあ、後は宜しく」

「さてと、私も行つて来るかねえ、現役のグランソルシエールの顔を拝みにさ」

ソルシエールがそう言つて桜色の髪を揺らした。

「あなたにそっくりな綺麗な娘ですよ」

ランディーが抜き身の剣を鞘に納めた。

「あら、やだ。綺麗だなんて人妻……違った狼妻に向かつて罪な男ね騎士殿。……案外、六百年程前の旦那との間に生まれた私の子孫

かも知れないさね」

ソルシエールが少年の後を追って神殿に入ってしまった。

アウラは、自身の持ち込んだ資料の書物と地下室の壁に納められていた膨大な書物を開き魔法陣と格闘している。

「ぴきや——！」

アウラは、不意に訪れた脇腹の違和感に何とも言えないかわいらしい悲鳴を上げた。

少年が地下室に入って来た事に気付かなかった。

それ以前に少年は地下室にいるものだと、アウラは思っていた。

「がんばってるなあ、アウラ」

少年が水差しを差し出しアウラの肩を軽く叩いた。

「覗き魔さんの封印を解析してから、魔術書や魔法陣の術式が頭も中に流れ込んで来るように解るんです……鐘の音が頭の中に心地よく広がるように流れて来るんですよ。もう、半分くらい解析しちゃいました、へえへえ」

アウラは、紫水晶の瞳を弓のように反らし形の良い小ぶりの唇から舌を出した。

「案外、簡単なのかあ？ 天才魔術師と伝わっているグランソルシエールも大した事ないなあ——」

少年がわざとらしい乾いた声で階段の方に向かって言った。

「覗き魔さん？ 誰に向かって言ってるのですか？ ってソルシエールかあ、えへえ、聞かれてたらソルシエールに怒られますよ。もうこの世にはいませんけど」

アウラは白い小さな拳で自分の頭を、こつんと叩いた。

「そう、ソルシエールに言った。アウラ……？ 何か変だぞ？」

「へえへえ」とか「えへえ」とか、熱でもあるのかなあ？」

アウラの額に少年の手に平が当てられた。

「疲れているのかも知れません……私」

アウラは、顔を赤らめると少し甘えた声を出した。

「根を詰めるからだ」

少年が何時もより引き締まった声で言った。

「私……怖い……です」

アウラの紫水晶の瞳が潤み出し不安の意を示し出した。

「何が怖いんだ？」

「グリンベルの悪魔を討てるかも知れない魔術を世に解き放つてしまふ事や……その魔術を使って自分の復讐の為に、この力を手に入れようと思う気持ち……力を持ってしまうてからの事を思うと怖くて……それに……」

「アウラの成し遂げたい事をやればいい。俺は、アウラが間違った魔術の使い方をしないと信じている」

「覗き魔さん！ また根拠のない事を言っては駄目でしょ！ 何時も何時もいい加減な事ばかり……違うか、何だか覗き魔さんが、そう言ってくれると何故か安心できます」

少年の視線は何時も先を見通している、アウラはそう思った。何時の間にか、この少年の話に……心ごと引き込まれていく。ブルーマールの映える碧眼の少年に……。

「そうか！ それは良かった」

「それでも私……覗き魔さんのお母様がグリンベルの悪魔なら討ちたいと思います。……いえ、討ちます」

アウラは、瞳から溢れそうな滴を拭って微笑みを作り出した。

——本当は……討てないかも知れない。

「それでいい。その時は討たれてやる約束だ」

「逃がしませんから……絶対に」

「それも約束した」

少年が、もう見慣れた満面の笑みでアウラの言葉に答えている。

「ああ——あ、グリンベルの悪魔なんて見付からなければいいのに、私がお婆さんになって魔術なんて使えなくなってしまうまで……」

「それは助かる。うむっ？　じゃあ、俺はアウラの傍から離れられないじゃないかあ？　俺の想いはどうなるんだ？　夢とかも」

「いいじゃないですかあ、こんなに綺麗な女の子と、ずっと一緒にいられるんですから……、なあ——んてね。それともお——、お母様の方がお綺麗でしたか？」

「う——ん、そうだなあ、母さんはこの世で一番綺麗だった。アウラはこの世で一番かわいい……て事で駄目かあ？」

「だめです！　両方一番にして下さい」

アウラは、顔が熱くなっている事に気付き更に頬を赤らめた。

「欲張り過ぎは良くない」

「お二人さん仲が宜しいようで若いって良いねえ——。遠回しに将来の約束？」

「ひゃあ——」

アウラは、突然現れた声の侵入者に驚き声を上げた。

ソルシエールがしゃがみ込んで二人の顔を近くで覗き込んでいる。

「お……母さん」

アウラが声のした方に振り向く、そこには同じ髪の色、同じ紫水晶の瞳があらわれた顔が、己の瞳に映り込んだ。

それは、まるで鏡を見ているようでもあり、グリーンベルで死んだはずの母が、その場にいるようにも思えた。

アウラの整った顔が、くにやりと歪み、拭ったはずの滴が湧き上がり溢れ出した。

「お、母さん……」

アウラは暫くの間、ソルシエール豊かな胸で縋^{すが}り付き泣いた。

ソルシエールも実の子をなだめるようにやさしく抱きしめ桃色髪
の頭を撫でていた。

「残念だけど人違いだよ。私には今、子供はいないねえ。わたしも驚いてるんだけどさ」

桜色の髪を後ろで麻紐で纏めた女性が答えた。

「……」

「この人がソルシエルだ」

碧眼の少年がその女性の代わりに名前を告げた。

「……？ えっ！ グランソルシエル？ そんな……だってソルシエルで言ったら、伝説に！？ えっ……遠い昔の人物じゃ……」

アウラの涙顔は、みるみる驚きの表情へと変わっていく。

「初めまして、現役のグランソルシエルさん。私の伝言は^{メッセージ}いかがでしたか？」

ソルシエルがアウラの覚書が書かれた羊皮紙を横目で見やった。
「もう半分以上解析したの？ あなたなら魔物の——」

ソルシエルの声を掻き消すように少年が声を被せた。

「アウラ……お前は、偽りの真実と本当の真実、どっちが知りたい」
少年の碧眼がアウラを見詰めている。

「それは本当の真実を知りたいに決まっています」

「俺もその方がいい。真実を教えてやるから、早く魔法陣の解析を終えろ」

「どうしたの？ 急に怖い顔をして……覗き魔さんらしくないですよ？」

「思い出した事がある。解析を終えたらグリーンベルを焼き払った犯人を教えてやる」

硬い表情を残し少年は地下室を後にした。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十六話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。く
ー）く

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十七話

偽りの真実 後編

アウラは、途切れる事のない明かりの灯る地下室で眼を覚ました。少年が地下室を出てから、どれくらい経ったのだろうか、切れる事のない明かりの部屋で長時間過ごしたせいもあり、時間の感覚が麻痺している。

時間の感覚が麻痺していく中、少年の残した言葉が気に掛かり、不眠不休で禁術書を読み終えると急激な睡魔に襲われ眠りの世界へと落ちて行った事を思い出した。

アウラは、禁術書を読み終え、故郷を滅ぼしたグリンベルの悪魔を討てるかも知れない禁術書に記された内容と、これから知るであろう犯人が明らかになると言うのに弾んでもおかしくない心が少しも弾まない、代わりに嫌な予感を感じ胸の高鳴りが広がっていく。

グリンベルの悪魔の正体を教えると言った少年の言葉が、やたらに胸に引っ掛った。

少年は何時？ どうやってグリンベルの悪魔の正体を知ったのだろう、と疑問を感じながらも、何時の間にか少年の言う事を信じている自分に気付く。

不意にアウラの脳裏に地下室を出て行った時の少年の姿が浮かんだ。

何時も微笑みを浮かべる少年の表情は見た事も無いくらい硬い表情を作り出し獲物を狙う獣のような眼光鋭く矢を射るような視線を向けられた時、どんな恐怖とも比べられない不安と戦慄を憶え、どんな出来事とも比べられないグリンベルの街を焼かれ家族と全てを失った時のような悲しみ、今まで味わった事のない切なさが入混じり、アウラの紫水晶の瞳から涙が零れ出た。

階段の方に向き直った少年の背中が、何処かに消えてしまいそうで悲しくて寂しくなった事を思い出す。

アウラは、グランソルシエールの禁術書を胸に抱えて地下の階段を早足で駆け上り、神殿の薄暗い礼拝堂に出ると、神殿の外は夜が明けようとする頃だった。

明かり取りの吹き抜けになった窓から差し込む僅かな朝陽がやたらに眩しい。

朝とはいえ不気味な程、静まり返っている辺りの様子が、更にアウラの胸に不安を加速させた。

確か少年は、軍隊がこの神殿に向かっていると言っていた。

少年の気配を感じ取る力は、風狼の件と天候を読み切った事で承知している。

アウラは、心の奥底であの少年が間違うはずがないのだと、信じている。

それ故に余計に胸に引つ掛かる、グリンベルの悪魔の正体を教えると言った少年の言葉が……。

正確な時間の感覚が麻痺しているとはいえ、食事が運ばれて来た回数から、どれくらい時間が流れたのか、アウラは過ぎ去った時間を追った。

神殿に着いたのは二日前の昼前の事、壁画の伝言を見付けたのは、その日の陽が沈むより前、神殿の地下に下りて暫くしの間において夕食が運ばれて来た。

次の食事の朝食を山羊飼いの少年が運んで来てくれた。

昼食を運んで来たのが、少年ではなく少し残念な気持ちと胸の奥が何故来ないのかと、むかむかする感情を覚えた。

食事を終えて幾時か過ぎ、少年が水差しを差し出してくれた時、ソルシエールと出会った。

その日の夕食を運んで来たのも少年ではなかったが、食事を運んでくれた騎士に外の様子を聞いてみると特に変わった事はないと言

っていた。

少年が感じた気配は、もしかするとソルシエールのものであったのかと、一瞬思ったもののすぐさま心の中で首を横に振った事を覚えている。

山羊飼いの少年は軍隊が動き出したと確かに言った、あの少年が違えるはずがないのだと……。

アウラはそう思った。

神殿の外も静かだった。野営の天幕をそのままに騎士たちの姿が見えなかった。

アウラは、一人置き去りにされてしまったのかと、不安に駆られた時、神殿の柱の陰に人影が揺らいた。

白銀にブルーマールが映える髪を朝のやさしい光が透かし淡いブルーが幻想的に揺れている。

決して見間違う事のない山羊飼いの少年の姿をアウラの瞳が捉えた。

アウラの胸中に、この上ない安堵感が広がる。

「ランディー様と騎士さんたちは何処に行かれたのですか？」

アウラは、唇を震わせ潤んだ紫水晶の瞳を少年に向けた。

「夜が明ける直前に狼煙が見えた後、早馬が到着し伝令をランディーに伝えた。伝令の内容は神殿に向かっていた援軍が敵部隊と鉢合わせ交戦中、名も無き赤の騎士団は臨機応変に備えよ。との事だった」

何時も弓のように反らしている少年の碧眼は、笑みを浮かべていない。

「それでランディー様と騎士さんたちがいないのですね？」

「敵は軍を裂いて幾手かに分かれ神殿を包囲したいようだから、ランディーは囲まれる前に討って出た。アウラが禁術書を解読中だったし、ここを戦場にするのは旨くない」

これまでアウラも戦や魔物に街が襲われたりした話を多々聞いて

いた事はある。その度に自分に起きた過去と重なり、心の中で怖い
と思いはするものの、自分の知らない場所で起きている出来事を、
今日まで何処か対岸の火事のように思っていた事に気付いた。

自分のいる場所が何時戦場になってもおかしくない状況下に置か
れた今、もしかすると戦になるかも知れないと、覚悟していたとは
いえ、いざ本当に自分のいる場所が戦場になる事を身近に感じると、
その恐怖は尋常じゃないものだった。

自分たちだけが、神殿に残された不安とまじかに近付いている恐
怖心が、アウラの華奢な身体を震えさせた。

「ここは大丈夫なのですか……」

「何とも言えないなあ、ランディーは軍を裂かず、まず援軍と自分
が率いている騎士隊とで敵を挟んで抜くつもりらしい。だから援軍
の加勢に向かった。まあ正解だと思う。その内援軍を引連れて来て
アウラと禁術書の護衛に全力を上げるさ」

「ソルシエールさんは何所に行かれたのですか？」

「ソルシエールは、敵の部隊に魔術師が交じっていた事を知ってい
て気になる場所があるからと言って神殿を後にした」

「ほ、他の敵は、神殿に近付いてるの？ ランディー様たちは間に
合うの？」

アウラは、細い桃色の髪と紫水晶の瞳を不安そうに揺らした。

「敵はすぐ傍まで近付いて来ている。先に敵がここに到達するか、
ランディーたちがそれまでに神殿に戻ってこれるか、ランディー
の手並み次第だからなあ、俺たちは兎に角隠れて様子をみよう」

「……はい」

アウラは、震える細い肩を抱いて小さく頷いた。

崩れながらも、まだ外見を残している石壁や石造りの民家の間を
迷路のように通路が敷かれている場所に入り石造りの民家に二人は
身を潜めた。

部屋の中に入った二人は木の扉が片方傾いている納戸を見付け中

に身を隠した。

傾いた扉の隙間からは窓が見える。

その窓から外の様子が窺がえた。

狭い納戸の中、アウラと少年の身体は自然に近くなる。

こんなにも近くに少年の息使いを感じたのは風浪の件以来の事だ。その時とは違う緊張感がアウラの身体を強張らせ顔を赤らませた。心臓が飛び出してしまふかと思えるくらい強く早い鼓動を打っている。

少年の眼光炯炯を外に向ける横顔が、隙間から差し込む光の中に見えた。

何時もは微笑みながら、間抜けな事をのんびりとした口調で話す少年とは、まるで別人に見える。

風が何かを揺らす音にも神経を尖らせて警戒する少年の姿に小さな胸が、どきつと跳ねた。

「何か臭う……」

少年が小さな声で呟いた。

アウラは、少年と密着していた身体から距離を置いた。

「に……臭いますか……」

アウラの赤らんだ顔が羞恥で更に赤くなった。

思えば宿を出てから数日、風呂に入っていない、水に浸した布で身体を拭いただけだった。

「ああ、臭う、嫌な臭いがする」

アウラは、少年を突き放すように身体を離そうと少年を両手で押しのけたが、狭い納戸の壁に阻まれた。

「うん？ どうしたんだ……痛い。狭いんだから、そんなに押すなよなあ」

少年が張詰めた表情を解き、やわらかく微笑んだ。

「あ、あの……そんなに……その……に、臭いますか……私……」

少年が首を捻って暫く無言になっていたが何かに思い当たったよう

に、はつとした表情をするとすぐさま微笑みを戻した。

「きやあ」

不意に引き寄せられたアウラは、少年の胸に顔を埋める格好になった。

「俺も臭う。気にする事はない」

「き、気にしますう……だって！ わ、私は……お、女の子だもん……臭いは気になります……よ」

「そうじゃない。嫌な気配が近付いて来るって事だ。アウラが臭う訳じゃない。アウラからは何時もやわらかい良い匂いがする」

「……」

アウラは、火が吹き出しそうな程赤らめ俯いた。

「誰か近付いて来る！ これは……残念だがランディーたちが戻る前に外堀を埋められた。数も多いなあ、見付かるのも時間の問題だ」

「私たちどうなっちゃうんですか？」

「俺は殺されるだろうなあ、アウラは辱めを受けるかも知れない」

「そんな……」

アウラの紫水晶の瞳は不安に震え、潤み出した。

「嫌だよなあ、俺は嫌だ。殺されるのもアウラが辱めを受ける事も嫌ですう……そんな、辱めなんて……そんなの嫌です、私まだ――」

――

「アウラ、封印を。循環の封印を解いてくれ。アウラに見せてやるグリーンベルを焼き払った悪魔の力を」
プレス

「……えっ？」

少年の言葉にアウラは顔色を失い茫然とするしかなかった。

T o B e C o n t i n u e d

く グランソルシエールの禁術書 く 第十七話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。く
ー）く

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十八話

封印解放

外の様子は次第に慌しさを増していく。

息を潜め外の様子を窺がいながら、納戸の中は二人だけの静かな時間が流れている。

短い時間がやたらに長く感じられた。

神殿で少年が話した言葉が気に掛かる。

少年の言葉……『ドラゴンのブレスを見せてやる』少年はいったい何を考え、伝えようとしたのだろうか……。

グリンベルを焼き払った強力な炎のブレスを自分に見せようとしているのか。

しかし、少年は母の冤罪を信じて止まなかったではないか。

……なら、どうして？

紫水晶の瞳を虚空に落とし俯き少年の意図を探っていると、少年の口から更なる衝撃が放たれた。

「アウラ。お前が俺の住んでいた街を襲った魔物を創り出した魔術師だ」

「えっ！？……突然なにを！……わ、私、知らない。魔物なんて創り出していません……何を根拠に言っているのですか？ もう覗き魔さんは、またいい加減な事を言っ、私をからかって面白いのですか？」

——少年が間違うはずはない。

アウラはそう思っている、アウラの心は少年を信じている。信じていればいる程、少年の言葉が気に掛かる。

アウラは、自分でも気付かない間に動揺の余り身体を震わせ視線を泳がせた。

「俺は母さんの力を使ってアウラを討つ！ アウラは禁術書の魔術を使ってドラゴンの循環を持つ俺を討てばいい」

「そ、そんな事……急に言われても……私どうしたらいいか……」

「禁術書の魔術……使えないのか？ もしかして」

アウラは静かに首を横に振った。

「確かに見た事もない文字の様な記号の様な物は解読できませんでした……でも、古語で書かれていた記述については解読を終えてます……一応……禁術書の大半は強力な魔術を描く事に時間を費やす面倒な陣を用いず発動させる為の言わば、短縮手法と強力な魔術の魔法陣が書かれていました。使えるかどうかはやってみないと分かりません」

アウラは咄嗟にそう言った。

ソルシエールの残した魔法陣を解いた時から本当はもう分かっているのに……自分には禁術書の魔術が使える事を――。

街の仇は討ちたい……でも、この少年は討ちたくない。

それに私は魔物など創り出した覚えはない。しかし、この少年の言う事は信じるに値する。

世迷言だと思えた事も、少年の言う事は現実起こって来たのだから……。

もし、自分が魔物を創り出した事があるとしたのなら私は、この少年の仇。

少年の言った『討つ』という言葉が心に突き刺さる。

心が傷付いた痛みとは違う、切ない痛みが胸を締め付け広がっていく。

アウラは、視線を落とし少年の碧眼から瞳を逸らせた。

落としていた視線を外に向けた時、紫水晶の瞳が窓の外の視線と交わった。

「誰かいるぞ！ 先日、我々の邪魔をした女だ」

外を見回っていた鎧の男がアウラの桃色の髪を見つけ声を張り上げた。

壊れかけた納戸を蹴破って白銀にブルーマールの少年が飛び出した。

少年の伸ばした手にアウラは手を伸ばそうとして一瞬、戸惑い、躊躇してその手を引いた。

「早く！ 俺はアウラ以外の奴に討たれてやるつもりはない。だからアウラも俺以外の誰かに討たれる事は許さない」

少年の研ぎ澄まされた刃物のような眼光がアウラの紫水晶の瞳を見据えていた。

アウラは少年の碧眼を見据え、伸ばしたまま差し出されている手を掴んだ。

アウラは、少年に手を引かれ裏口へと走った。

禁術書を胸に抱え、手に持っている節くれた杖に括りつけられた鐘が小気味良い音色を響かせている。

「逃げたぞ！ 裏口に回れ、男も一緒だ」

少年が急停止し壊れた窓縁に足を掛けると半身を翻しアウラの手を取り身体を引き上げた。

外に出ると崩れた民家を縫うように、からんからん、音を響かせながら、ひたすら逃げる。

「駄目だなあ——。先回りの先を大声で言うなんて」

少年が先程とは別人のように微笑んで言った。

「何処に逃げれば……」

「そんなの分からない」

アウラが残す鐘の音は石の塀に反響し上手い具合に騎士たちを攪乱してくれる。

アウラの手を引いた少年は、まるで川を流れる木の葉のように騎士たちのいる場所を避け瓦礫の街中を走り抜けた。

「はあはあはあ……やつぱり……駄目だあ、攪乱して……も街の外に出る事が出来ない……敵の数が多すぎる。このままじゃランディたちが戻るまで持ち堪えられない。封印を解いてくれアウラ」

「はあはあはあ……いや……です。はあはあ、そんな事……出来ないです」

「封印を……解く方法が嫌なのか？ キスするから」

「……それは……そのお——そうじゃなくて、もし、覗き魔さんが言った事が全部本当なら、私たちにはもつと複雑な事情が——」

二人は、外見の残る石積み of 廃墟に逃げ込み呼吸を整えながら話していた。

逃げ込んだ部屋にある放置され埃の被る木の机が乱暴に弾き飛ばされ、石の壁に叩きつけられ大きな音を立てて砕け散る。

「いたぞ！ 包囲して追い詰める！ この民家跡だ」

咄嗟に部屋の窓から外に逃げ出し一心不乱に走って路地に逃げ込んだものの、次第に敵の騎士たちが続々と集まり、二人を包囲し出した。

「鼠を燻り出せ、鉄砲構ええええ。てえい——」

指揮官の指示を受け騎士たちは素早く構え、火打ち式の銃口が火花を噴き出し、乾いた音を響かせた。

二人の隠れた石壁は着弾音と砕けた石が土埃を上げる。

「アウラ。こうなったら潔く、チュ——しよう」

「チュ——て……せ、せめて『封印を解け』とか『キスしよう』とか、少しは真顔になって言ってくだい……納戸の中にいた時にしていた顔で……」

こんな状況でも顔を赤らめてアウラは俯いた。

——石壁が着弾を立て土煙を上げ砕け散る。

「アウラ。封印を」

「わ、分かりました。は、始めますね？」

「じゃあ、いただきます」

「ま、待ってください。その前に」

「アンススansuz・パースperth・オウシズnauthiz・オシラothila・フエイfe
ヒューhu・ティウスteiwas・ソウエイルsowelu・ウルズuruz」

（秘め事を受け取りなさい。戒めを放ち所有者の下に導き完全なる力を）

禁術書に書かれていた短縮手法は慣れてないからと言ってアウラは古語の交じる呪文を唱え、節くれた杖を振った。

杖に括りつけられた鐘が小気味良く、からんゝと音色を響かせる。

少年の左首筋に六芒の紋章が現われ七色の輝きを放ち始めた。

——間を置かず着弾が土埃を撒き上げる。

「覗き魔さん……く、くく、口づけを頂けますか」

そう言うのと持っていた杖を肩口に掛けた。

アウラは、瞼で瑞々しく揺らいでいた紫水晶の瞳を覆い隠し、控え目に膨らむ胸の前で指を絡めるように手の平を組んだ。

形の良い薄桃色の唇を薄く開いて、その時を待っている。

少年に肩を掴まれたアウラは身体を強張らせた。

アウラは、重なっていた指をいっそう強く絡めた。

唇にやわらかな感触が重なり、やがて惜しむ様に離れていった。

互いの唇が離れ距離を開けていく。

アウラは、後追う様に少年の左の首筋に唇を近付けた。

六芒陣の封印に口付けを与えようとした時、少年の言葉にアウラ

は上げていた踵を地面に下ろした。

「いいかアウラ。グリンベルの悪魔と呼ばれる事になった母さんのブレスの威力がどれ程のものか、その眼にしっかりと焼き付けておくんだ」

——この少年が伝えようとしている事、それを感じ取りたい。

「はい」

アウラは、こくりと頷いた。

「ええええ——い。しぶとい鼠どもめ！ 突撃し捕獲せよ。抵抗あるなら殺しても構わん」

業を煮やした指揮官が命令を下した声が届いた。

アウラの唇に残っていたやわらかく温かい感触が名残惜しげに薄れていく。

アウラは、絡めていた指を外し両腕を開くと少年の背中に腕を回して爪先立ちで背伸びし、まだ少年の温かさが残る唇を七色の輝きを放つ六芒の紋章へと近付け、六芒の紋章に口づけを与えた。

封印の魔法陣が輝きをいつそう強めだした。

——二人の隠れた場所に近付いた騎士たちが腰の剣を抜き、二人を囲み切っ先を近付けてくる。

解き放たれ封印の紋章の輝きは、大きさと光を増し七色に輝く光に呑み込まれるように、少年は光の闇へと姿を消した。

紋章から解き放た続ける溢れ出した光は騎士たちを弾き、アウラを抱き包み宙へと浮かび膨れ上がった。

アウラを抱き包んでいた七色の光体は、少年の体内に戻るかのようになり形を変えながら、輝く粒子が薄い宝石のような形に変化し折り重なる水晶の結晶のように紡ぎ合った巨大な翼と水晶石の塊のような鱗を全身に纏ったドラゴンが陽の光を浴びて虹色の輝きを放ち大

空にその雄姿を現した。

アウラの身体程もある眼は、全てを焼き尽くす焰ほむいのように赤く、その真紅の眼中には爬虫類のように縦長の黒い瞳が開いていた。

アウラは、その瞳に見詰められた時、これまでの疲れが一度に吹き出したかのように身体が重くなっていくなを感じると同時に意識が遠のいて行く事を感じた。

意識が途切れる寸前にアウラが見たのは焰のように赤い瞳を厳つい瞼で薄くしたドラゴンだった。

薄くなったドラゴンの瞳は、やさしく微笑掛けているようにアウラの眼に映った。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ グランソルシエールの禁術書 第十八話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。 >（
―） <

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第十九話

ハングラードの閃光

アウラは、小高い丘に寝かされていた何時の間にか意識を失い次に目覚めた場所は、緩やかに丘を下った先に小さく神殿が見える。

北の神殿に来る途中、先客の動向を探る為に進軍を止め野営をした場所だった。

「ウォン」

「プラム？」

暫くの間、聞いていなかった相棒の鳴き声と近くで聞き覚えのある声のアウラの耳に届いた。

「気が付いたかね」

「ランディー様！ 御無事で何よりです」

「アウラも無事で何よりだ。敵に囲まれる前に街から逃げられたのかね？ しかし、あの山羊飼いの姿が見えないが……」

「それは……」

アウラは、言葉を絶ち小さく見える神殿を指差した。

アウラの指先に示された方向を、見事に敵の援軍を打ち破ったランディーの率いる名も無き赤の騎士団と増援の友軍は歩みを止め神殿に頭を向け見詰めた。

「あれが少年の言っていたドラゴンの循環鱗とか言う物の力かね。あれがドラゴンそのものの力なのか……圧倒的じゃないか、敵軍が虫けらに見える」

「……」

「どうしたのだね？ アウラ。もしかして彼がグリーンベルの悪魔だったのかね？」

「……わ、分かりません……でも、彼がそうだと……」

「……それが本当なら、暫く旅を共にした連れを討たねばならんアウラの気持は察する。それでも、きみがそうすると言うのなら私も及ばずながら助太刀しよう。だが現段階では、まだ彼は我々と旅をした頼もしい味方だ。これより我々も神殿に向かうとしよう」

ランディーが馬上にあがると片手を天に掲げ神殿の方向に振り下し騎士団に全軍進めの指示を出した。

「さあ、アウラ」

ランディーがアウラに手を差し伸べ、アウラの手を取ると馬上に引き上げた。

陽の光を反射した水晶群のようなドラゴンの鱗が神々しい輝きを放っていた。

「てえっ——」

乾いた炸裂音と共に撃ち出された鉛玉がドラゴンの鱗に易々と弾かれる。

人の身丈程もある矢は、石弓に置かれ極限まで引き絞られ弾かれた無数の矢は、ドラゴンの巨大な爪が、まるで集る蠅をあしらうかのように払われる。

巨大な翼を一度、煽られただけで重い鎧を着込んでいる騎士たちでも容易に地面から引き剥がされ吹き飛ばされた。

鰐のような鋭い歯が並ぶ顎あごが開かれ咆哮が上げると空気を淀ませながら、生まれた衝撃波が石造りの民家を崩し、一度鋭い爪を持つ前足を薙ぐと空気を切り裂き真空を生み出し石壁を両断した。

長い尾が振られる度に民家も壁も瓦礫へと変わっていく。

騎士たちが近付き一太刀浴びせる事等、到底出来ない。

勇敢にも立ち向かっていった騎士たちも手持ちの弾が無くなると終いには、腰に差していた剣や手に持っている槍を闇雲に投げ付けるが、ドラゴン本体まで届かず地面に落下する。

巨大な体の死角から如何にか、後ろに回り込んで届いた剣や槍は硬い鱗を穿つ事なく空しく宙を舞い地面に落下するだけで、その後、

振り向いたドラゴンの鋭い光を放つ赤い瞳が向けられると、それだけで騎士たちは尻もちを着いた。

その猛々しさに気押され、これまでに幾度も野の魔物を討つてきた屈強な騎士たちも後退りし始める。

「これが数多の魔物たちと一線を引かれる幻獣の一つ、ドラゴンの力なのでしょうか？ バルバロ指揮官殿」

「ターデン！ 魔術師どもはどうした？ 何故、来ぬ」

「いえ、それが一向に来る気配はなく。何しろ強力な魔術を使うには時間が掛りますゆえ……それに要らぬ邪魔が入ったとの報告も受けております」

「えええ——い！ 魔術師どもは何をしているかあああ！ あの愚図まどもがああ」

指揮官が怒を露わに怒声を上げた。

「指揮殿、我が軍は総崩れ、このままでは全滅致します。ここは一度軍を引き態勢を整えた方が良いかと……」

側に控えた副官が苦虫を噛み潰し指揮官に進言した。

「もう一步でグランソルシエールの禁術書を手中に出来たものを——。全軍、たいきやあく」

司令官が忌々しげに言葉を吐き、退却の命を下した。

「全軍、たいきやあく」

副官が復唱すると波紋が広がるように復唱の声が上がった。

それぞれの隊が手綱を引き出し退路に馬を向けた。

「なっ！」

指揮官も馬の手綱を引き退路に向けながら、暴れ狂うドラゴンを忌々しげに見ていた頭を向け絶句した。

ランディーの率いた騎士団が退路を塞いでいる。

「無用な戦いは避けたい。銃を下ろし剣を納められよ。指揮官殿」

「貴様等には……あれが見えんのかあ！ 悪い事は言わん、命惜しくば貴様等も軍を引け」

指揮官がドラゴンに向い剣で差し示した。

「すまんが、生憎あれは知り合いでね」

ランディーの言葉に指揮官は、皿の様に丸くした。

「そんな戯言を信じると思うか！ 道を開けよ。貴様らも軍を引け
と言っておる」

「残念だが、戯言でも絵空事でもないのね。 我らが逃げる理由
がない」

アウラは、ランディーの騎馬から、するりと尻を滑らせて馬上を
後にした。

「覗き魔さん！ もう、いいですよ——」

暴れ狂っていたドラゴンが、アウラの声に反応し大きな顔を向け、
大地に伏せた。

少女の一声で大人しくなったドラゴンを目の当たりにした指揮官
は、肩を落とし持っていた指揮杖を捨てた。

アウラの紫水晶の瞳は神々しいドラゴンの姿が映し出している。
今し方まで鋭かったドラゴンの赤い瞳が微笑みを表わしているか
のように薄くなった。

この猛々しくも神々しい姿のドラゴンは、どんな時も笑みを絶や
さないあの少年で、グリーンベルを焼き払った忌々しいドラゴンでは
ない。

アウラは、自分を仇と言いながらも、何だかんだと言って安全な
場所まで自分を運びんでくれた、このやさしいドラゴンをそう思お
うとした。

本当にグリーンベルの街を焼き払った魔物が、少年の母であるドラ
ゴンであったとしても、山羊飼いの少年が体内にその母が残した循
鱗の力を宿していても循鱗の力を彼に与え、残した少年の母は、も
うこの世にはいない。

しかし、少年の言っていた言葉が気に掛る。

少年の住み始めた街と、その街を守る為に戦って死んだ原因であ
る魔物の軍勢は、果たして自分が創り出したものなのか？ 幼い日

の記憶を辿るが、今も自分が扱える魔術は、魔物除けの小さな火を作り出す事が精一杯で、とても魔物の群れなど創り出せたとは思えない。

禁術書にも魔物の創り出し方を記されていたという記憶は無い。グランソルシエールが魔物を創り出そうとしたという記述も読んだ覚えは無い。

あの時、少年が言った『アウラを討つ』の言葉が心に突き刺さり切ない気持ちになったが、追い詰められ窮地を脱する為に封印を解き循環を解放する為に、あの賢い少年が言った一流の詭弁きへんだったのかも知れない。

封印を解く方法が方法だけに……。

少年の詭弁だったのだと思えば、少年の言葉が何処か心地よく思えた。

「俺は、アウラ以外の奴に討たれてやるつもりはない。だから、アウラも俺以外の誰かに討たれる事は許さない」

アウラは、あの時に少年が言った言葉を頭の中で反芻した。

——これって……ある意味。プロポーズだよな？ どちらかが最後を看取るまで一緒にいようって言う事だよな？ アウラ……。

まだ名前も知らないし覗き魔で天然スケベだし、悪気は無いようにだけどエッチで変態だし何処がいいのか自分でも分からないのに……でも、たまにだけど……本当にたま——にだけど、かつこい時もあるの——などと、お気楽な事を考えながらドラゴンの姿のまの少年をアウラは見ていた。

アウラとドラゴンの間の視界に桜色の髪を後ろで纏めた女性の姿が飛び込んだ。

「まったく……何処かで見たとような気はしてたんだけどねえ、よくもまあ、次から次へと驚いきが続くもんさね。しかし、あの時循環鱗の力を封じたガキが、あの少年だったとはねえ——。私以外に封印

を解く事が出来る人物と言ったら……まあ、ここには一人しかないか」

ソルシエールがアウラの方を向き、にやりと意味あり気な顔をした。

「ぶちゅ——としたのかい？ 小娘」

「ぶう……ちゅって……したというか……されました……」

アウラは、顔を赤らむのを感じて俯いた。

「あはあはあ、そうだった。その手順だったさね。でも……苦しそうだね」

「えっ……苦しいと言うか、なんというか……恋している事に気付いた時って胸が苦しくなるものなんですネ」

アウラは指を絡ませながら、もじもじと身体を動かし赤らんだ顔を伏せた。

「あんたじゃないよ。あの少年さね」

「……えっ！」

微笑の意だと思っていた薄くなった赤い瞳を何時の間にか巨大な巖つい臉が覆って隠している。

大きな口からは弱々しく小刻みな息使いが聞こえた。

「力の反動さね。ひ弱な人間が循環^{ドラゴン}の力を慣らしもせずに完全体そのものの力を使ったからさ。これ以上、あのまま放っておくと取り返しのつかない事になるよ。封印を戻してやりな」

「……封印を戻す？ 封印の戻し方は？」

「知らないのかい？ 知らずに封印を解いたのかい？ やれやれだねえ、まったく……仕方ないねえ、そんじゃあ私が戻すとするかねえ——」

ソルシエールは、頭を掻きながら、ドラゴンの姿のまま苦しんでいる少年に近付いていった。

「パス（p e r t h）・ウルズ（u r u z）・ベルカナ（b e r k a n a）」

（秘め事よ。力を戻しなさい）

ソルシエールの顔がドラゴン姿をした少年の大きな口元に唇を近付けた。

「いやあ——！　だっ、だめえ——！」

ソルシエールが、これから取るだろうと思われる行動に気付いたアウラが悲鳴じみた叫び声を上げた。

その時、ドラゴンの姿をした少年が突然、伏せていた地面から大きな顔を引き剥がし山々の重なる山間に振り向いた。

直後、地響きが鳴り響き大地と大気を大きく揺らした。

「こんな時に……全部の魔法陣を乱せなかったか！　結局、イタチごっこになっちまったねえ、いったいどれだけの魔法陣を用意したのかねえ、あの魔術師ども」

ソルシエールが忌々しそうに顔を歪めた。

「ゴーレム（土人形）？」

地響きと共に小高い山々がその数だけ数体の土人形ゴーレムに形を変えた。「ふっふっふ、はあはあは……これで形勢逆転だ。遅いぞ！　魔術師どもおお」

ランディーたちに捕らえられた指揮官が不敵な笑みを浮かべ声を張り上げた。

ゴーレムの軍勢を睨んだドラゴンの身体に青白い稲妻が纏わり着き始め、ドラゴンの全身に纏わり着いた稲妻は、大きく開かれた顎の中に飲み込んでいくように吸い込まれいく。

青白い稲妻は、大きく開かれたドラゴンの咽喉元に収束し、チリチリ音を立てながら一点に収束され稲妻は強力な磁場を生み出している。

その中に刺々しい水晶群のような鱗の結晶が一粒、現われた。

「ドラゴンの閃光！　今の状態で『絶対』プレスを使えばお前の身体が！

お待ちっ——」

ドラゴンがソルシエールの制止を聞かず、短い咽喉を身体と共に真っ直ぐに伸ばした。

すると咽喉元に現れた水晶のような鱗の結晶を吐き出した。

結晶がピキユ——ンと甲高い音を残し凄まじい速度で吐き出された。

吐き出された結晶は、大気との摩擦でオレンジの残光を空間に引き標的のゴーレムの軍勢に向い放たれた。

紫電一閃、オレンジ色の閃光が空を裂き、ゴーレムを一掃した。

水晶のような鱗の結晶は、程なくして大気との摩擦で燃え尽き消えた。

まともに閃光を受けたゴーレムは鉛細工のように歪み、やがて跡形無く塵と化し、直撃を免れたゴーレムは閃光の衝撃波を喰らい木端微塵に砕け散った。

閃光を放ったドラゴンからゴーレムの軍勢がいた場所までの大地は溶け溝となり、閃光の熱と衝撃波が残した軌跡を刻んでいる。

ゴーレムの後ろに聳えていた山は裾野を残し消し飛んでいた。

「やれやれ、地形を変えちまったよ。まったく。加減を知らないガキだねえ！ まあ、日当たりと風通しが良くなるさね」

ソルシエールが渋い顔をして頭を掻いた。

「……あれは、あの閃光は」

敵か、味方かは分からない。

誰かが、そう言った。

魔物を扱うと忌み嫌われ、冷遇された山羊飼いたちが逃れ住み着いた街。

ハングラードに神が下した審判の雷いかずちと伝えられているはずのオレンジ色の閃光。

「……ハングラードの閃光」

ドラゴンの凄まじいブレスを目の当たりにした者たちの中から何処からともなく声が上がった。

To Be Continued

く グランソルシエールの禁術書 く 第十九話（後書き）

最後までお読み下さいまして誠にありがとうございました。く
ー）く

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 第二十話（最終話）

魔術師の鐘

ふかふかの白い感触が少年の身体をやさしく包んでいた。

「おっ、おっぱい、いっぱい……あれ？」

少年が上等の綿が詰められたベッドと羊の毛を繕った上等の掛布の中で目覚めた。

「……よかった」

ベッドの脇に置かれた椅子に腰を掛け、細い桃色髪に紫水晶の瞳を潤ませたている少女の口から安堵の言葉が零れた。

アウラは、少年に飛び付き抱き着いた紫水晶の瞳から熱い液体を溢れ出させた。

「ばかあ——！ 本当に心配したんだからあ——」

「アウラ、痛い」

アウラの桃色のやわらかい髪が少年の頬を撫でた。

「……ここは？」

「北の神殿に向かう前に雨をやり過ごした街の宿です……も、もも」

「桃？」

「も、もう目覚めないのかと思ったんですよ。ばかあ」

アウラは、少年にしなだれ掛かり嗚咽を漏らして泣いた。

涙は少年が目覚めるまで、何度も泣いた涙の痕を辿って零れ落ち着衣を濡らす。

少年がしなだれ掛かるアウラを押し戻して言葉を紡いだ。

「さあ、始めようか。アウラ」

「……そ、そんな事急に言われても……わ、私、まだ心の準備が……」

「それに……お、おふ——」

「外に出よう」

「覗き魔さん？ まだ無理しちゃ駄目です。丸三日も眠りっぱなし

だったんですから。私は何処にも行かないから……ね？」

アウラは俯き、もじもじと恥じらいながらかわいらしい声で少年を諭した。

何時もの少年のやさしい微笑みが返ってくる……と思っていた。

「外に出て始めようと言っている」

少年の強張った声がアウラの鼓膜を揺すった。

「わ、分かりました……の、覗き魔さんが、そ、そこまで……そ、外で始めたいと言うのでしたら……わ、わわ私……やっぱり、外でだなんて……やだあ——！ 初めてのなのに、外でなんて……でも、そ、外もいいかも知れませんね……あはあ」

アウラの胸の内に嫌な予感が広がっていく、それを振り払うように複雑な気持ちと葛藤を抑え込み、精一杯おどけてみせた。

「言っただけだ。俺は街を襲い母さんを死に追いやった魔物を創り出した魔術師を討つと、アウラは言っただけだ故郷を焼き、家族を奪ったグリンベルの悪魔を討ちたいと」

「それは……今でもそうですが……覗き魔さんのお母様がまだ、はつきり仇と分かった訳じゃないですし……私には魔物を創り出したなんて記憶はないし、私が扱える魔術にそんな力はありませんから……何かの間違いじゃ……」

「確かに俺も肝心な所の記憶は無い。でも七年前の冬、グリンベルにいたのは俺自身だ」

「……そんな……うそ……ですよね？ 私、納得できません。言っている意味が解らない。訳が分からないのに打ち合う事なんてやっぱり私できない」

アウラは、混乱し紫水晶の瞳を彷徨わせた。

街の外、小高い丘に風車小屋が見える道を少年が人気のない場所へと気配を探りながら進んで行く。

アウラは、少年の背中を追うように歩いた。

「ソルシエールに聞いた本当の事だ。母さんに連れられ北の神殿に

行つたのは、循鱗の力が暴走し始めたからだそう。風狼が言っていたら？ 封印が何の為の戒めかって」

「暴走……？」

「例え、循鱗のほんの小さな欠片であつても人間の身体と生命力には余るドラゴンの力は、物心が付き始めた俺の精神を侵食し俺と混同した循鱗は別の自立した精神を持ち始め、俺の意識の外で動き出すようになった」

——碧眼の眼光が見詰めてる、右眼を閉じたまま。

「母さんは循鱗の力を封じる為に、かつて新たな魔術の開発に力を貸し凶悪な魔物たちを極北の大地に閉じ込める程の魔術を持ったソルシエールの下に赴き、魔術で循鱗の力を封じるようにと頼んだんだ。母さんは、自身の循鱗全てを魔術に使うの触媒とし差し出したそう」

「あの時、私がソルシエールさんの魔法陣を解析していた時、思い出したって言つてたのは……その事だったんですね」

「その時は半信半疑だったが、循鱗の封印を解いた時、焼ける街を見ていた記憶がぼんやり浮かんだ」

風車小屋の脇を通ると大きな羽根が風を切り、ぐわんぐわん音を立て回っている。

「……グリンベルを襲った時の記憶？」

「そう。封印の準備に取り掛かつていたソルシエールと風狼、そして母さんたちが一時、俺から眼を放した隙を見て自己の意思を持った循鱗は逃げ出した。その行き着いた先がグリンベルの街だ。たぶん」

「……」

——討ちたくない、討ちたくて止まなかったドラゴンを今は討ちたくない……だって私……この少年に惹かれてる。

「俺がグリンベルに着いた時、循環が身体の中で疼いた魔物を見てな、その事までは思い出したが、その後の記憶は全くない次に気が付いた時、良く利く鼻で俺の後を追ってきた風狼の口に首根っこを銜えられていた。俺の眼には炎に包まれた街が映っていたんだ」
「……そんなの……うそ」

——討ちたい家族と街の仇を討ちたい。でも……。

風車小屋の羽根の音が遠ざかる。

「それにグリンベルとハングラードを襲ったのは、たぶんアウラが創り出した魔物たちだ。今もアウラが描いた魔法陣から新たな魔物が生まれて来ているとランディーが言っていた」

「ランディー様が……」

「ソルシエールは、かつて生命を宿した魔物を創り出す魔術を完成させる事が出来なかった」

「それを私が……ソルシエールさんに出来なかった事を私に出来るはずが——！？……」

——そう言えば……覚えがある殴り書きの残された古語で書かれた羊皮紙が所々に挟み込まれていた魔術書。

「この魔術書はランディーが持っていたものだ。アウラが街に戻った時、脇に抱えていたものらしい。黙って借りてきた」

「その魔術書は……グリンベルの家の納屋で見付けたもの……」
「思い出したか？ アウラ」

——少年から手渡された魔術書。

「お、覚えて……る」

「思い出せ、その魔術書の中身を」

「思い出せ……ません」

——思い出したいくない。

「アウラは、偽りの真実より本当の真実の方がいいと言った。だから俺は話している」

「わ、私は……この魔術書の魔法陣を……街中や外に落書きしてよく遊んでいました……もしかして……」

——身体が……唇が震えてる。

少年が森の中に広がっている小さな草原で立ち止まった。

アウラも少年に合わせ立ち止まった際、何時も持っている節くれた杖に括りつけた鐘が小気味良く響いた。

「仇を討つと言ったろ？ アウラも俺も約束を果たそう。今ここで」
少年が閉じたままの右眼を開いた。

開かれている左眼の碧眼と今、開かれた右眼は焰のように赤く縦長の黒と金色の瞳が鋭い視線を向けている。

「俺が魔物共々、焼いたグリーンベルを思い出せ。アウラ！ 俺は覚えてる街を襲い焼いた魔物の軍勢の姿を——、命を賭けて街を守ろうとした母さんが最後に作った最高の笑顔を俺は覚えてる。俺は、その笑顔に誓った思いを果たさなければならぬ。母さんの笑顔に誓った思いを果たさなければならぬ」

——そこまで私を討ちたいの？ ……お母様の仇だもんね？

「でも！ 私が創り出したかも知れない魔物が覗き魔さんの街を襲ったとは限らないんじゃない？ ……野には野生の魔物や北の氷土に閉じ込められる難から逃れた魔物もいますし、北の神殿で私たちを襲った

ゴーレムを創り出した組織の魔術師が創り出した魔物かも知れないじゃないですか！」

——討ちたいのは仇、グリンベルの悪魔。この少年の中に宿る循環……でも私は、この少年を討ちたくない……だって恋してる。

「野生の魔物は数少ない。大方の魔物は極北の氷土に閉じ込められているはずだから、大地を覆う程群れたりはしない。何よりその魔物の姿は異形そのものだった。その魔術を完成させたのは、お前だ！　アウラ！」

「……でも、禁術書に眼を通すまで私は魔除けの小さな火を生み出す程度しか魔術使えなかったのですよ？」

——この少年がグリンベルの悪魔？　家族と街のみんなに討つと心に誓った仇。私は本当にこの少年の仇？　なの……切ない。心が……痛い。

「それを今から試すんだ。魔物を創り出せアウラ、お前の全てを奪った俺を……グリンベルの悪魔を討つんだろ？　俺は、街と母さんを殺した魔物を創り出したお前を討つ。アウラああ！」

——討ちたいよね？　私もそうだったのだから……。いや違う今も討ちたい気持ちに変わりはない。

「そこまで言うなら……分かりました。討ちます。……あなたを」
穏やかに吹いていた風が一瞬、強く流れた。

「始めようか魔術師。さあ、戦いの鐘を鳴らせ」
強く流れた風が、からんゝと響いた鐘の音色を連れ去っていった。

地面は所々消し飛び、半円の穴が空いている、木々が焼け薙ぎ倒された森が痛々しい。

明るくなった森の中にできた荒れ果てた地面に、少年が仰向けに倒れていた。

静かにそして……穏やかに……まるで眠るように……。

からんちゅ ♪ 魔術師の鐘 〽 グランソルシエールの禁術書 〽

出演

山羊飼いの少年（グリーンベルの悪魔・名前は内緒^{ドラゴン}）

羊飼いの少女アウラ・ヴァージニティ（羊飼いの少女・魔術師の末裔）

魔術師ソルシエール・エクル（偉大な魔女^{グランソルシエール}）

騎士ランディー・ハーニング（ブラッディーレッド（名も無き赤の騎士団））

騎士アサー・コークス 兄（名も無き赤の騎士団）

騎士マイル・コークス 弟（名も無き赤の騎士団）

騎士カックス・ローエン（名も無き赤の騎士団：副官）

エント・ヴァージニティ（アウラの祖父）

オリエ・ヴァージニティ（アウラの祖母）

ラガツシュ・ヴァージニティ（アウラの父）

アニア・ヴァージニティ（アウラの母）

アウル・ヴァージニティ（アウラの弟）

プラム（アウラの牧羊犬）

究極のドラゴン（オプティマール・ドラゴン）（山羊飼いの母。
北の風狼の盟友）

ウォルフス

北の風狼（ソルシエールの旦那。ドラゴンの盟友）

ジーエン・サルエル（グリンベルの老神父）

バルバロ・フォーカス（謎の騎士団：指揮官）

ターデン・ギミック（謎の騎士団：副官）

騎士A（謎の騎士団）

騎士B（謎の騎士団）

騎士C（謎の騎士団）

旅商人A

旅人A

著者：PN雛仲 まひる （HNヴいヴあ）

Special Thanks

作画提供：RION様 （HP：KOTONOH A）

イラスト：月森うさこ様（YAHOOブログ：月でお散歩。）

*HPに置かせて頂いてます。

監督：俺

監修：僕

脚本：私

助手：そんなのいない（つーT）

終幕

「ぶ、葡萄二房下さいなあ！……あれ？」
からん ♪

「……夕陽、綺麗ですね」
「明日も良い天気になりそうだなあ」

「きやあ！ 動いちゃだめですよ。くすぐりたいです」

「アウラの膝枕気持ちいい」

「……ばかあ」

からん ♪

「……アウラは強いなあ………痛え」

「女の子を褒める言葉になってません！」

「う——ん……控え目と思ってたけど下から眺めると——」
からん ♪

「痛いっ………そこ傷口………討たれてやれなかったけど、俺の負けだ」

なあ——」

「……こんな身体で無理するから」

からん ♪

「こんなにしたのはアウラだぞぉ？」

「……封印解かないから」

「腹減った。痛っ、何か食べたいなあ」

「……私の事……好き？」

「う——ん。やさしいアウラは好きだ」

からん ♪

「……！？ 動いちゃだめですてばぁ……もう——。ちょ！ 何処へ？」

「めし！ 捕ってくる。森に兎を捕まえに、この前捕まえ損ねたから」

「まだ、動いちゃだめです……もう少しこのままいて……それにもう、捕まえてるじゃないですか……」

「なにを？」

からん ♪ からん ♪

「かわいい兎わたしを……」

からん—— ♪ チュ——

Fin

く グランソルシエールの禁術書 く 第二十話（最終話）（後書き）

御愛読誠にありがとうございました。 > (—) <

本編最終話でございます。

エピローグ、再会の約束 く 使命と夢の先に く

次回をお楽しみに！

創作小説HP 『奇跡の穹』

<http://www.geocities.jp/yumemotobirawovivagahirakeru/index.html>

く グランソルシエールの禁術書 く エピローグ

再会の約束 く 使命と夢の先に く

石を敷いて幾重にも固められた街道と周りには、木の柵に囲まれた草原が広がっている。

小高い丘に建てられた風車小屋の羽根が風を受け、ぐわんぐわんと音を立てゆっくり大きな羽根を回転させ、のんびりと回っていた。アウラと山羊飼いの少年の目指すシュベルクの街が視界の遠くに見え出した頃、周りの街道沿いにも旅商人たちが布を広げ商品を置いた露店が目立ち始め、街道を行き交う人の数も増え始めている。

その街道に細い桃色の髪を風に泳がせ八面玲瓏はちめんれいろうの顔立ちに紫水晶の瞳があらわれた少女と白銀にブルーマールが映える髪と左眼の碧眼が美しい輝きを放つ少年が歩いている。

不可解な事と言えば、外見に刀傷や病で痛んで爛れた様子もないのに右眼の瞼を閉じられたままの少年は尻から、白と黒の良い毛並みの大きな尻尾を生やしていて、わさわさ揺らしている様が行き交う人の目を引いた。

その隣には、細い桃色の髪を風に泳がせた少女が、わなわな震え小さな手に持つている節くれた杖に括られた鐘を、からんからん小気味の良い音色を響かせて歩いている。

桃色髪の少女は、持っている鐘の括られた節くれた杖にをいつそう大きく振り、からん♪と鐘の音を響かせ、美しい紫水晶の瞳を潤ませ、泣き出し少年に何やら小言を言い始めた。

「痛てえ」

「ふゆ……えつ……えぐつ……ふにゆ……えぐつ、ふうえ——ん」

「何も泣く事無いじゃないかあ……俺と離れるのが嫌なのか？ そんなに……痛え」

小気味良い鐘の音色が、からんゝと再び鳴り響き、鐘の括られた杖の柄が少年の頭に落とした。

「さつき、他の女の子見てました！　ぐしゅ……今も、もつと前も……えぐっ」

「う——ん　街が近くにある街道は行き交う人が多いから自然に眼に入る。それは仕方がない事だ。その位の事で泣くかなあ」

「違うもん！　その後、見比べました。あの子とあの人とその子と私を！」

紫水晶の瞳を擦っていた白い手から細い指が伸びた。

「確かに見えたけど……アウラが指差すから……今も見てる。それと余り人を指差すのは感心しないなあ」

少年の碧眼が弓のように反れ微笑みの表情を作り出した。

「示した人たちの特徴を三つ挙げてください！」

「えっと……綺麗、かわいい、やわらかい匂いがしそう。アウラに全部当てはまるなあ」

「もう一つ！」

「三つ、言ったじゃないかあ」

「も、もう一つ追加です！　よ——く思い出してみてください！　覗き魔さんが見比べていた場所です」

「思い出してもいいのなあ？」

「むっ！　やっぱり……だめです」

アウラは、眉間を寄せて頬を膨らませた。

「じゃあ、仕方がない。忘れよう」

「し、仕方がないってどういう事ですかあ！　仕方がないって……忘れなさい！　今すぐに！」

「見たんじゃない。普通にしているても視界に入ってくるんだから仕方ない。俺は何を見比べてたのかなあ、忘れた」

「むっ！　む、むむ、胸、見比べてました……あの人たちの胸をじい——と見て、私の方をちらっと見て……くすって笑ってました！　こ、これはどういう事でしょうか？」

「そんなに怒らなくても……小さいなアウラは——」

「ち、小さい……どうせ私のむ、むむむ、胸は……ち、ちちち、小さいもん」

「違う。俺が言っているのは心根の方なんだけどなあ……それに直情的に怒るのはよした方がいいと思うぞお」

「違います！ それに……お、怒ってません！ ただ破廉恥極まりない覗き魔さんの視線を咎めているだけです」

「もっと破廉恥な事したじゃないかあ、俺たち……四回も」

「なっ！ 誤解を招くような事言わないでください！ キ、キキ、キスしただけじゃないですかあ……封印を解く為に……仕方なく……そ、それに、ご、五回です」

「そっだっけ？」

「もう——、ばかあ——知らない。一回目は風狼の時、覗き魔さんに突然、奪われたんですよ！ ファーストキス……二回目は神殿で封印を解いた時、さ、三回目はその……決闘の後、膝枕してた時……、四回目は……道中、私が謎の組織にさらわれて覗き魔さんが皆まで助けに来てくれた時に封印を解いて逃げた時と封印を戻した時の五回です！ 北の神殿ではソルシエルさんが戻しちゃったけど……全部で五回です……わ、忘れな……いでください……忘れないで……ふゆ……ふえ——ん」

アウラは怒りの形相から、へにやりと顔を崩し紫水晶の瞳からは怒りの余り引っ込んでいた涙が堰を切ったように再び止め処もなく溢れ出させた。

二人が目指すアウラの第二の故郷シュベルクの街は、もう目の前に見えている。

北の神殿に向かう前にアウラの羊たちと一緒に騎士に預けたままの山羊を引き取りに来た少年とは、もう直ぐお別れだ。

少年はアウラに『何処にも逃げない』と約束したが、少年は山羊飼いだ。

世間の山羊飼いに対する扱いの現状を鑑みると何処の街に行っても厄介者扱いされる山羊飼いの少年がシュベルクに定住出来るはずはないのだ。

「……忘れませんか……魔術をもっと勉強して私が描いた魔物を創り出しているという魔方陣と魔物を倒してみせます。きっと、それが私の使命ですから……王都の学園に行つて魔術をもっと……もっと上手く使えるようになって、覗き魔さんの右眼も元に戻してみせます。そして……あなたを討つてみせます……私……忘れませんか……絶対。だから……あなたも夢を叶えて戻つて来てください……私を討ちに……私の所に……私を……迎えに……」

時折、嗚咽を交えながらアウラは言葉を紡いだ。

「約束、覚えてるかあ」

「約束……覚えてます」

「俺はアウラと約束したから、何処にも逃^{そは}ないと……それに俺たちは切つても切れない仇と言う絆で結ばれている」

「仇と言う……絆？」

少年がやわらかい笑みをアウラに向けた。

「アウラの想いと使命、俺の想いと夢の先でまた会おう、約束だ。俺たちの向う先は、互いの想いの先で繋がっているさ」

「……」

「返事は？」

「……はい」

アウラはゆっくり頷いた。

少年が山羊を引き取りにアウラが住んでいる家に行くと驚いた事に、そこは貴族が住むような立派な屋敷だった。

何でもアウラが街を焼かれ天涯孤独になった時、当時ひよっこ騎士見習いだったと言っても爵位を賜る由緒ある武門の家系に生まれたランディーの口利きで彼の遠縁にあたる元伯爵の養女として屋敷に入ったとか。

老伯爵も跡目を譲った後、孤独な隠居生活を送っており、その寂しさからランディーが連れてきたアウラを養女にしたいと申し出たらしい。

屋敷の門には、槍を持った衛士が左右に立ち、屋敷内のは執事とメイド長の二人と数人のメイドたち、普段は厨房を預かるコック長とコックたちなどの小間使いたちが、老伯爵の身の回りの世話と屋敷の管理を任されている。

好々爺な老伯爵がアウラから事情を聞くと少年に暫く屋敷に滞在して傷と旅の疲れを癒してから旅を再開してはどうかと計らってくれた。

アウラは喜んだが、それでも別れの日はやってくる。
そんなに遠くない未来に……。

三日後……朝。

街を背に少年は山羊たちを連れ広い野へ旅立っていった。

アウラは、溢れ出る涙を堪え少年の背中を静かに見送った。

アウラの足下でプラムが尻尾を左右に大きく揺らし名残惜しそうに少年の尻を見送っている。

アウラと少年の絆は同じ想い。

北の神殿や少年を看病していた雨宿りをした街で少年が話していた事が全て真実なら、何時か必ず会う事になるだろう。

二人は、互いに憎むべき仇なのだから……。

少年が街を出る前に話してくれた。

もう一つの夢。

『大きな船を手に入れて世界を周る』

そう言えば、少年は夢を叶える為に山羊飼いになったのだと言っていた気がする。

何故？ 山羊飼いなのか？ と少年の思考を疑ってみる。

少年は何処か人と違う尺度から物を見ている時がある。と言うか何を考えているのか今一分らない。

少年には、人として欠落した感情や行動が見て取れ、その代りに人並み外れた体力や直観に優れている面を持っているし頭の回転も早い。

長い時を生きた賢いドラゴンに育てられたのだから、人としての欠落した一面があっても仕方ない。

少年が物知りの事も、そう思えば何と無く頷ける。

でも……なにゆえに山羊飼いの？ 随分、小さくなった少年の背中を見てアウラは不思議に思った。

少年の消えそうになる姿を見てみると山羊飼いと過ごした短い間に起きた出来事が走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

出会い方があれだったのが、どうにも腹立たしい……と思ったところで大切な事を聞いてない事に気付いた。

「あつ！ プラムううう……どうしよう……」

「クウウン？」

シュベルクまでの道中もいろいろあり過ぎて忘れていたし、そんな事を考えている暇も無かった。

少年が屋敷に滞在していた時は、彼を送り出す際に旅の祈りを執り行い旅の無事を願おうと思いつき、その儀式の踊りが、余りにもかわいくない事に気付いて新しい振付を考えるのに夢中になっていた。山羊飼いの少年とまともに話す事ができなかった。

振付が決まるとプラムに何度も噛まれ尻の布が薄くなった少年のズボンを当て布で補強した。

丸みのある尻部に苦戦しながらも動き易さも考え、生地が重ね縫いされた丈夫な縫い代を中心に尻の丸みに切り抜いた当て布を腰に向かい残っているズボンの厚い生地縫いに縫い付けると切り抜いた当て布がハートのように見えた。

何となくうれしく思え頬を緩めた。

しかし、ズボンの裾を床に下ろし得意げにハート型に縫い付けた当て布を改めて見ると逆さまになっている事に気付く、ちよっぴり

切なかった。

本当にいろいろあったけど……これはショックが大き過ぎる。

「プラムううう……どうしよう……名前……聞くの忘れてた……」

「ウオン！」

見えなくなつた少年の背中を思い出しながら、再開した時に聞こ
うとアウラは強く思った。

陽は今日も昇り始めている昨日とは違う今日がまた始まる。

再会の約束……二人は必ずまた会える。

二人の思いは深い絆で繋がっている。

使命と夢の行く先で交わっている。

だつて……。

名前も知らない、あの少年とは特別な深い絆で結ばれているのだ
から……。

からんちゅ 魔術師の鐘

グランソルシエールの禁術書

エピローグ End

く グランソルシエールの禁術書 く エピローグ（後書き）

最後まで御愛読、誠にありがとうございました。 >（――）<

く グランソルシエールの禁術書 く 本編完結。

エピローグがあると言う事は… ^^

この後、番外編 特別編 全三話 幕間を挟み続編に突入！

詳細は後日！

次回、続編の幕間に掌編番外編

ドラゴンの苦悩。最初で最後の笑顔をお楽しみ下さい。

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 番外編

ドラゴンの苦悩。 最初で最後の笑顔

磨かれた水晶の結晶のような巨体に陽の光を浴び、七色に身体を輝かせながら、一際巨大な翼を広げ羽ばたかせ空気を孕んで、その巨大な身体を宙に浮かべて飛翔する幻獣、人々がドラゴンと呼び、一度その力を発揮すれば『神』にも遅れをとる事はないと伝えられている。

その言い伝えに相応しい神々しいまでの姿をしたドラゴンは、人々がこの世の果て、死の世界と呼び、決して近寄る事のない大地の果ての大空を飛んでいた。

ドラゴンの眼下に人々に忘れ去られた巨大な水面に浮かぶ、巨大な孤島を映し出した。

これまで遠い時間を生き、様々なものを見聞きして来たドラゴンでも眼にした事が無い金属が肋骨の様に獣の屍さながら、あるものは天に向かって建ち、あるものは傾き、あるものは地面に横たわっている。

その孤島には、生命の欠片も感じられない程、荒れ果てた大地が広がっている。

大地の所々に聳えている三角錐の山々と、その山肌の切り立った場所に四角く穿った洞穴が巨大な口を開いた。

巨大な身体でも難なく入る事が出来そうな洞窟を見付けたドラゴンは、そこを今日の峙ねくぶにと巨体を大地に降ろし、更に巨大な翼を折り畳んだ。

「おや、珍しい卵が落ちとるのお」

久しぶりに深き森から出て、ほんの気まぐれで長い距離を飛んで

来て見れば、面白いものを見付ける事が出来た。

洞窟内は見た事もない金属の壁と石膏のような壁で囲まれていて、かなりの大きさの広さと奥行があった。

その洞窟内の奥に壁が抜けている場所を見つけて近付いてみる。

巨大な身体でも通れそうな程の壁に作られた吹き抜けの向こう側に色とりどりの小さな光が鮮やかに淡い光を放っている。

吹き抜けの向こう側に見える部屋に山仕事をこなす偉丈夫程もある卵型の物体を見付けた。

その周囲には、見た事もない形の机と椅子が並んでいる。

机の上には管に繋がれた四角い箱が置かれ、その箱の一面は黒い板のような物がはめ込まれていた。

ドラゴンは吹き抜けの向こう側にある物に興味を持ち、中に入ろうと巨大な翼を煽って動きに勢いを付け吹き抜けに向かって飛び込んだ。

ごっつん、と見えない壁に衝突しドラゴンの巨体は、くの字に折れ動きを止めた。

「どうなっておるのじゃ！ この吹き抜けめ！ 魔術の結界でも張つてあるのかのう？ おなめんじゃないよ。魔術如きに怯む私じゃないのぉ」

ドラゴンは、幾度も体当たりを繰り返すが、いつこうに吹き抜けを通り抜ける事が出来ない。

鋭い爪でがりがり引つ掻いても『キィ——キィ——』と嫌な音が出るだけでびくともしない。

「ええい！ 面倒でじゃのう」

ドラゴンは、大きな顎を開いた。

鰐のような鋭い歯が、ずらりと並んでいる咽喉元に青い光を収束させ閃光一閃、プレスを放った。

閃光が見えない壁に達するとプレスを浴びた吹き抜けは、飴細工のようにどろりと溶け落ちた。

ドラゴンは、自分が通れる程の穴を穿つと卵型の物体に近付いた。
「ふむ？ …… 人間の子じゃなあ？」

白い卵型の物体の上部は吹き抜けと同じ見えない壁のような物で覆われ中身を伺う事が出来た。

その物体から幾つもの丸い管が机や光を点滅させている壁に繋がれている。

ドラゴンが、暫く卵型の物体を鋭い爪で突いたり、そばえたりしているとな熟成したワインのコルクを開けた時に発酵したガスが抜けるような、シュパアと音を立て卵型の物体に切れ間が奔ると今度は、空気が狭い穴から漏れ出す時に発するような、プシュユと音を立て卵型の物体は中程から綺麗に割れ、その中から透明な液体が溢れ出した。

中には人間の赤ん坊が入っている。

「生きておる……」

赤ん坊の血色を見たドラゴンは言葉を発した。

その声に反応してか、赤ん坊は元気に泣き出した。

「まったく、世も移ろい変わって行くというのに人間という奴は、まだ生贄を捧げたりしてるのかのう。こんな赤ん坊を水の中に閉じ込めよって、やれやれじゃのう」

ドラゴンは、厳つい大きな顔を赤ん坊に近付け眼を細めた。

赤ん坊の小さく握られた、やわらかい手を固く握った拳がドラゴンの厳つい鼻先に触れた。

ドラゴンは泣き声を張り上げる赤ん坊をじつと見た。

「男の子じゃのお、良い子だから泣くのはおよし」

赤ん坊は泣き止まない。

「腹を空かしているのかのお？ 生憎私は乳が出ないんじゃない。すまんのぉ」

そう言い残しドラゴンは、その場で眠りに就こうと巨体を横たえ厳つい瞼を閉じた。

赤ん坊の泣き声が四角い洞窟の中に響き渡って止まない。

ドラゴンは暫し考えた。

人間は生まれたばかりの子供に自分の乳を与え栄養を与えると聞いている。

その後、乳を与えながらやわらかい粥も与え、歯が生え揃えば、やがて固形物を食べさせ育てる。

母親の腹の中で胎児は、へそから母親の栄養を分けて貰いながら、十月十日の歳月を母親の腹の中で過ごし生まれ落ちると聞いた事がある。

ドラゴンは、のっそり巨体を起こし鋭い爪で自分の胸の辺りにあてがった。

そのまま爪を己の胸に突き刺した。

胸の奥から腕を引き抜くと鋭い爪の先に麦粒程の七色に輝く宝石のような物が光を放っていた。

ドラゴンは器用に赤ん坊のへそに取り出した麦粒程の光を放つ物を埋め込み、へその回りに自分の血がべつとりと付いた爪の先で血の魔法陣を描いた。

魔法陣を発動させると光は赤ん坊のへそから体の中に溶け込むように体内へと消えていった。

「腹は満たさんが、生きる為の力はそれで賄^{まかな}える。すまんぬのう、これで我慢してくれのお、坊や」

赤ん坊は泣き止み、きやつきやつと笑い始めた。

赤ん坊の無邪気な笑顔を見たドラゴンは、大きな赤い眼を睨で細め、壊れ物を扱うように赤ん坊を大きな口に銜えると四角い洞窟を出て切り立つ断崖から滑空し巨体を宙へと舞い上げらせ、住処の森に向けて飛び立った。

深き森の中、巨大なドラゴンが溜息を吐くと、吐き出された息が森の木々をざわめかせた。

「ふむ……、循環の欠片を埋め込んだといってもものお——。やはり腹が減るか……」

赤ん坊は泣くのを止めない。

こここのところ、数日泣き病む事がない。

「坊や、お主のお——。いくら泣く事が坊やの仕事でものお、私は坊やの笑う顔が見たいのじゃがお……私は坊やのように笑えんからのお。ほれ、このように頬の肉が無いからのお」

そう言ってドラゴンは、大きな口を開いて見せた。

「そうじゃ！ 精霊どもが行使する魔法でも使って、人間の姿に化け人里に下りるとしようかのう。そこで人間に坊やの食い物を分けて貰えば良いのお、そうじゃその手があったのう」

ドラゴンは、眼を細めると魔法の詠唱を唱え、人の形へと姿を変えた。

年月は過ぎ、鋼鉄の屍の街でドラゴンが拾って育てた赤ん坊は、すくすくと育っていた。

固形物が食べられるようになるまでドラゴンは、たびたび人の姿を取り人里を訪れては、人間の摂る食事をその子共と食した。

ある日、街の中を荷車に載せた木製の黒い棺桶の後に黒い服を纏った人が続々と涙ながらに続いて歩く光景と出会った。

「母さん。あれ何？」

幼い少年が尋ねた。

「あれはのう、葬儀と言つてのお、この世をから旅立った者を心安かった親兄弟、友人を惜しみ、偲^{しの}んで、あの世に送り出す人間の儀式じゃ……、私は何れ坊やを看取るのかのお……それは嫌じゃのお……」

「僕はいつまでも母さんと一緒にいるよ」

幼い少年は、無邪気な満面の笑みを浮かべ母に向けた。

——人間の寿命は短い。

気の遠くなる時間を生きるドラゴンにしてみれば一呼吸するに等

しい時間の概念だった。

「坊や……、よし決めた！ 循鱗を抜き取り坊やに与え、坊やと同じ時間の中で坊やと同じ時の移ろいを見て過ごそうと母は思う」

「やったあ——！ 僕はドラゴンになれるんだね？ 母さんみたい」

喜ぶ少年に向い頬の肉を引き攣らせ、人の姿をしているドラゴンは慣れない笑顔を作り出した。

「循鱗を与えても坊やは、人間として生き、人の寿命を全うするのじゃ。坊やは人間じゃ、坊やがドラゴンに成らずとも、この母が人間として人里で坊やと共に同じ時間を過ごすのじゃ、坊やを立派な人間に育てるのじゃよ。この母がのう」

幼い少年は、きょとんとして母を見上げた。

見渡す限り大地は魔物に埋め尽くされている。

「母さん！ 魔物の群れが隣の街を呑み込んで行くのが見えるよ」
小さく見える街が魔物群れに易々と呑み込まれ、呆気なく見えなくなった。

避難して来た隣街の人々が一息つく間もなく慌ただしく動き出した。

「坊や逃げるのじゃ！ さあ、早く」

「か、母さんは？ 一緒に逃げないの？」

「私は、ここに残って奴らの足止めをする。逃げてでも直ぐに追い付かれるからのお」

ドラゴンが引き攣った笑顔を幼い少年に向けた。

「しかしのお——。なんじゃ？ あの魔物たちの異形の姿は……、それに何じゃ？ 魔物に混じっている、あれはゴーレムかのう？ 見た事もない形のゴーレムじゃなあ。それにしてもソルシエルが極北に閉じ込めた魔物や野の魔物が、かわいく見えるわ」

ドラゴンは、逃げる人を捕まえ、幼い少年を連れて逃げるように頼み込むと魔物の群れへと身を翻した。

「さあ、坊や、お行き」

「母さああん！」

引きずられるように幼い少年は逃げ惑う人の波へと消えていった。

ドラゴンと異形の魔物の軍勢の激しい戦いに終止符が打たれたのは、七日七晩の後だった。

幼い少年は、遠くにハンググラードの街が小さく見える山の頂から魔物と戦う母の雄姿を見詰めていた。

時折、オレンジ色の光と青い光が大地を奔る。

幼い少年は、その閃光が母のブレスである事を知っている。

誰かが言った。

これは、神々がハンググラードの人々に救いの手をもたらす慈悲の閃光なのだと。

少年は、静かに母の戦いを見ていた。

母の放ち続けていたブレスの閃光が途絶えてから丸一日が過ぎた。幼い少年は、避難していた場所に背中を向け街の方角に歩き出した。

建造物が焼け焦げた臭いと無数に焼かれた魔物が焦げた混ざり合う嫌な臭いが鼻の奥を、つんと刺激する。

煤に燻され黒くなった街の壁と崩れた家の残骸。

ハンググラードの街は姿を変えていた。

幼い少年は母の姿を探し、街内外を走り回った。

街の外れに湧き出た泉のある場所に幼い少年はやってきた。

枯れ果てた野に追いやられた者たちの街ハンググラードやその近隣の街の人々の命の泉。

その泉は、何時もと変わらず澄んだ水を湧き出させていた。

その傍らに、人の姿に戻った母の姿を幼い少年が見付け駆け寄った。

「母さん！」

「坊や……よかった……無事で……」

息絶え絶えの母が幼い少年に話し掛けた。

「母さん……死なないよね？　だって、母さんは気高き至高のドラゴンなんだから」

「……坊や傍に……来ておくれ、私のかわいい坊や……愛しい坊や

……」

「か……あさ……ん」

「私は幸せじゃたぞ……坊やと一緒にあの森を出て……人里を旅をし……坊やと同じ時間を過ごせて……嬉しかったのう」

「そんな、母さん……これからも、ずっと一緒だろ？」

「私、の、かわいい坊や……そんな顔をするでない……坊やの笑顔を見せおくれ」

「うん、見せるから……これからも一杯見せてあげるからね？」

幼い少年は、碧眼の瞳から今にも零れ落ちそうな涙を、ごしごし袖で拭い取り、母に微笑んで見せた。

「まあ、素敵な笑顔……嬉しい……坊や？　坊やはお腹が弱いから、へんな魔物は食べちゃ駄目じゃぞ……それと生肉ばかり食べちゃ駄目、火を熾して……焼くなり煮るなりするのじゃぞ……眠る時は沢山干し草を敷いて……眠るの……じゃぞ……坊やは、身体がやわらからのお……」

「わ、分かったよ母さん。魔物は食べない。母さんの言う事も聞く、山羊の面倒も手伝いもする。ふざけて母さんを困らせたりしないから……だから……死なないで母さん……一人にしないで」

幼い少年の笑顔が、へにやりと崩れ堪え切れず涙を零した。

「愛しい坊や……私は坊やの中に……生きておる。循環の力と共に……やさしい坊や……だから、泣かないでおくれ……ほら、笑顔を見せて……」

暫く泣いていた幼い少年は、涙を拭い精一杯無理をして微笑んで見せた。

「まあ……うれしい、母さんは、ちゃんと笑っているかのお？」

人の形に姿をしたドラゴンは眼を細め、頬をやわらかく動かし唇の両端を上げている。

「うん、やさしい笑顔だよ。母さん」

「……ありが……と……う……わ・た・しの……坊……や……」

「……母さん？……母さん、母さ——ん、かあ……さ——ん」

辺り一面に、焦げた嫌な臭いが鼻の奥を刺激した。

少年は、やさしい笑顔のまま息絶えた母に縋りついた。

煤に燻された黒い景色に変わり果てた街と最後に、やわらかく微笑んだ母の笑顔を幼い少年は決して忘れる事はない。

からんちゅ 魔術師の鐘 番外編 End。

ゝ グランソルシエールの禁術書 番外編（後書き）

最後まで御愛読、誠にありがとうございました。 >（――）<

ゝ グランソルシエールの禁術書 本編完結。

エピソードがあると言う事は… ^^

この後、特別編 全三話 幕間を挟み続編に突入！

詳細は後日！

次回、続編の幕間に短編 特別編 全三話

鉄の鳥籠 魔術書を欲する者たち 〃 をお楽しみ下さい。

次回をお楽しみに！

ゝ 禁術書（ちから）を欲する者たち 〵 特別編 第01話（前書き）

本編、ゝ グランソルシエールの禁術書 〵 では語られなかった
第零話に纏わるエピソード 全三話

鉄の鳥籠 〵 禁術書^{ちから}を欲する者たち 〵

お楽しみ下さい。 > (― ―) <

ゝ 禁術書（ちから）を欲する者たち 〵 特別編 第01話

鉄の鳥籠 〵 禁術書^{ちから}を欲する者たち 〵

「もう！ ばかあ——！ 覗き魔！」

長閑な草原が広がる街道上。

一陣の風が柔らかい一枚の布を豪快に持ち上げた。

不意に吹いた突風に成す術なく棒立ちになるアウラ。

慌てて抑えたのはスカートの裾ではなく、細くしなやかな桃色の髪だった。

「これは事故だ！ 神風だぞ？ 桃色パンツだったぞ」

「プツ、プラムううう」

「ウォン」

少年の尻を目掛け、プラムが鋭い犬歯を剥き出しにして突進してくる。

何時も放牧にでる際は、踝まである厚い生地の高いスカートが殆どだ。

それに埃除けの茶色のローブに身を包んでいるのだが、今回は違った。

北の神殿に向かう前に雨をやり過ごした街で、今回の礼だと言ってランディーから渡させた金貨で買い物をしたアウラは、ちよつと気になる少年を意識して、シュベルクの街など大きな街で流行っている薄手の色合い鮮やかで華やかなワンピースなど身に着ける物を中心に買い物をした。

「おまつ！ 来るな、お前が来ると俺の尻に尻尾が生え——！」

「ウォン！」

少年は喰らい付かれまいと、必死に逃げている。

アウラの小ぶりで桃色の唇には、同じ桃色のルージュが薄ら引かれ何時もより艶やかにしっとり湿り気を帯びていた。

少女と少年が、北の方面から南西に位置する街シュベルクを目指している。

アウラと少年は、ランディー率いる名も無き赤の騎士団と行動を別にしての帰郷の旅となった。

ランディーたちは、増援を待つて北の神殿と謎の騎士団追跡任務に分かれ行動を別にせざるを得ない事の運びとなり、グランソルシエールの禁術書を預かったアウラの護衛には、彼女にとっては因縁深きドラゴンを体内に宿す少年との二人旅。

と言つても少年には戦闘術を学んだ経験がない。

しかし、旅慣れたこの少年は頼りになる事この上ない。

二人が山岳部の小高い谷間に差し掛かる。

少年と言えば相変わらず、プラムに追われ逃げ惑う姿がアウラの遙か前方に小さく見えている。

少年にとっては、必死にプラムの牙から逃れようと逃げ回っているのだが、アウラから見れば何処か微笑ましく見えた。

羊飼いにとつて最大のパートナーであり、最大の友でもある愛犬が、恋心かも知れない感情を抱く少年と戯れているように見えアウラは、くすくすと声を抑えて微笑んだ。

アウラの姿は遙か後方に見える。

少年は仮にもアウラの護衛だ。

その実、グランソルシエール（偉大なる魔女）の禁術書の護衛と言う方が正しいのかも知れない。

「……」

「クウウン？」

少年とプラムが辺りの異変に気づく。

アウラの姿を確認した直後、少年の油断を衝いて何時もなら尻にがつちりと食い込むはずのプラムの牙は遠くを睨み獣の唸りを上げ出し牙も剥き出しになっている。

頬の無い唇を吊り上げ、涎を垂らし露わになった鋭い牙を剥き出し普段、先ばでへこたれている耳を三角にいきり立たせ、周囲の様子を探っている様子だ。

少年もプラムとほぼ同時に良く効く鼻と耳で周囲の異変を捉えていた。

相手も百戦錬磨の兵集団つわものと思われた。

そう簡単に気配を掴ませない。

「アウラ——！ 早くこっちに来いよ——、ヨシヨシしてやるから——」

遠くからの少年の声が微かにアウラに届く。

少年との距離は、大よそ千フィール（約三百メートル）。

アウラは、突然の言葉に顔を赤らめた。

——熟れた桃のように。

突然、理由もなく発せられた少年の言葉に疑問を抱きながらも何故か嬉しい。

周りの異変に気付かないアウラは、赤らめた頬でもじもじその場を動かない。

恥ずかしさと赤く染まった頬を少年に見られたくない。

ましてや『ヨシヨシしてやるから』などと言われて、ほいほい近寄って行けば、憎しみを超えつつある淡い恋心に気付かれてしまうではないか、とアウラの心が素直に駆け寄る事を許さない。

「プラム、ゴォー！」

少年がプラムに声を掛けた。

プラムも少年の意を酌んだのか、主人の下に駆け出した。

「来るかなあ？」

少年もアウラの下へ逸る気持ちを抑え平常を装い歩き出す。

少年が近づく姿を俯いて、もじもじしていたアウラの視界が感知する。

アウラもゆっくりと少年の方へと歩き出した。

「動いた！ プラム！」

アウラのすぐ近くまで戻っていたプラムが、小高い谷間の方に向い方向を急激に変え牙を剥き出し唸り声を発しながら、斜面を駆け上り「ウォン」と一鳴きすると、低い唸り声を上げ威嚇する。

アウラもプラムの様子に気付き、危険が迫っている事に気付いた。少年は、懸命にアウラとの距離を詰めようと走り出す。

——乾いた炸裂音が谷間に木霊した。

その直後、プラムにけし掛られた軽装の防具を身に纏った兵士が崖を転がり落ちてくる。

その後を追ってプラムが矢のように地面に転がった兵士目掛け追撃する。

兵士の喉元に、プラムの鋭い牙を宛がわれ抵抗を止めた。

「プラム！ 覗き魔さん！」

「アウラ動くな！ プラムもなあ」

少年がアウラとの距離を更に詰めようとするが、小高い崖の上には三十を超える人影が見下ろしていた。

「失敗したかなあ……俺たちがアウラに近づけば、慌てて行動を起こすと思ったんだけど……予想より人数が多いなあ」

乾いた炸裂音とほぼ同時に少年のこめかみに下がった白銀にブルームールの映える髪が、ぱらりと宙を舞う。

「覗き魔さん！」

「大丈夫。この距離なら簡単には当たらない。あいつらの使っている火打ち式銃は、量産品だから同じ銃でも微妙に全ての銃が違っている。射程距離も良くて百六十フィート（約五十メートル）だ」

「でも、血が」

少年のこめかみに滲む血が白銀の髪を僅かに赤に染めている。

「掠っただけだ。心配ない」

「でも——！」

アウラは、少年との距離百六十フィート。約六十から八十歩ほどの距離を詰めようとした。

「動くな！ アウラ、そこにいろ」

プラムは、少年から十歩程の距離で何者か分らない賊の喉元に牙の刃をあてがい、低い唸り声を上げて地面に伏している。

少年の怒鳴る言葉にアウラは、びっくりとして一瞬、身体を止めたその直後、複数の炸裂音と共に鏃^{やじり}が放たれた風切り音が無数に絶え間なく続いた。

その矢が向けられた先は、少年とプラム。

邪魔者とアウラを近づかせまいと二人の間に降り注いだ。

状況から賊の狙いは、アウラと彼女の持つグランソルシエールの禁術書と容易に推測出来る。

少年は、その事からアウラに危害を加えられる事はないと判断した。

「ちっ！」

少年は、軽く舌打ちをして前方に伏しているプラムに駆け寄った。

「この馬鹿犬！ 早く逃げろよなあ」

しかし、時既に遅し。

無数の矢が地面へと落ち始め、放たれた銃弾が地面を耕している。

少年は、プラムに組付くように地面を転がった。

少年のまだ、成長中のそれ程大きくない身体でプラムを抱き抱え、亀のように身を固めた。

鉄の礫と鏃の雨中に晒される、プラムを抱き抱えた少年の姿をアウラの紫の瞳に映し出された。

「覗き魔さん！ プラムう」

震える唇が涙交じりの声を発する。

アウラは、齒噛みした。
自分がもつと上手く魔術を扱えれば……。

——悔しい。

しかし、それは同時に恋心を抱いているかも知れない、少年を討つ術を手に入れると言う事でもあった。

「に、逃げる……アウラ！」

「今直ぐ魔術で助けます」

アウラは、グランソルシエールの禁術書を腰に下げた肩掛け鞆から取り出した。

「いいから、逃げ……」

少年の身体に数本の矢が立つ。

それとは別に血飛沫を上げて少年の身体を穿つ銃弾。

「きやあ——」

アウラの悲鳴が山間の野に木霊した。

「お嬢さん。我らと共に来ていただこうか」

何時の間にかアウラの背後に立つ金色の鎧を身に纏う屈強な騎士が声を掛けた。

「あなたたち、何者！？ 覗き魔さん、プラムう」

「^{エラ・ヘヴン}楽園の使者とでも答えておこうか。お嬢さん」

金色の男はアウラを拘束しアウラを肩に担ぐと、そのまま少年たちを背を向けた。

「覗き魔さん！ プラムう！」

「ア、ウラ……」

影のように金色の男に付き従っていた数人の男が訪ねた。

「この少年どう致しましょうか？」

「いやあ！ やめて！ これ以上二人を傷つけないでえ！」

「なら、お前が助けるんだな。禁術書の魔術で」

アウラは、悔しさの余り強く唇を噛んだ。

今の自分にはそれだけの力がない。

「どうした？ 見捨てるのか？」

金色の男が唇を歪に釣り上げ薄い笑みを浮かべ失笑を漏らした。

「殺れ」

「御意」

付き従っていた男が文字の書かれた数枚のカードを手品師のように口から取り出し魔術の言霊を詠唱し始める。

魔術の完成と共にカードを少年に投げばら撒いた。

ひらりと空気の抵抗を受け不規則に舞い落ちるカードが、その枚数分の短剣に様を変え、少年の身体に向かい方向を変え襲い掛かる。少年の身体の周りには、流れ落ちる赤い液体が地面の色に溶け込み赤茶色の血溜りを作っていた。

「いやあ——！ 覗き魔さん、プラムう——、……ごめんね、ごめんね。私に力が無いばかりに……あなたたちを守れなかった……」
アウラの何度も何度も謝り続ける悲鳴じみた悲痛な叫び声が響き渡った。

二体の物言わぬ人が地面に伏している。

一体は、プラムに崖から追いつき落とされ銃弾と矢を浴びた兵士の屍。もう一体は、十代半ば程の白銀の髪にブルーマールが映える少年の身体が血溜りの中に伏している。

その懷に長めの毛並みが見事な牧羊犬を宝物のように抱えたままその身を庇うように……。

T o B e C o n t i n u e d

ゝ 禁術書（ちから）を欲する者たち 〵 特別編 第01話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 >（――）
<

次回をお楽しみに！

く 禁術書（ちから）を欲する者たち く 特別編 第02話

鉄の鳥籠 く 禁術書^{ちから}を欲する者たち く

銃弾に耕された地面には無数の矢の花が咲いている。

二体の物言わぬ屍と少年の下で眠る獣の、^{むくろ}軀にたむけられた様に

……。

少年の身体が僅かに動いた。

「クウウン」

プラムが少年の身体の下から細く長い鼻先を擦りながら這い出した。

外に這い出したプラムが、身体をぶるり一振りするとうつ伏せに地面に伏している少年の襟首を銜えた。

少年の左首筋に六芒陣に囚われているかの様にも見える、ドラゴンの紋章が浮かび上がり七色の輝きを放っていた。

「痛てえてえ……プラム怪我ないかあ」

「ウオン」

「それはよかったなあ……母さんの循環鱗がなければ死んでたなあ……
……なんとか自分の意思で力を制御できた。右眼の代償のお陰かなあ
……アウラに感謝だなあ、なあ母さん、プラム」

少年は身を起し立ち上がろうとしたが、身体に力が入らない。
尻を持ち上げたところで地面に座り込む。

少年は、手持ちの荷物から牛皮の羊皮紙を取り出し、まだ乾き切っていない地面に流れ出た自らの血で文字を綴った。

「プラム。いいか？ この手紙を持ってシュベルクのお前の屋敷に向え、分かる？ アウラの後俺が追う。一刻を争うという事はないだろうからなあ、お前はその手紙をアウラの義理父が屋敷の者に届けてくれ、そうすれば屋敷の者がシュベルクにいるランディーの

部下に渡してくれるだろう」

「ウォン！」

プラムは、誇らしげに答えたように見えた。

「よし、いい子だ」

「ウォン」

（お前なんぞに、いい子呼ばわりされる言われはない。この世に生まれてから約一年と半年。人間の年齢に換算すると俺は、もう二十歳くらいなんだよ。小僧が！ お前如の鼻で俺の主が追えるのかは分らんが、まあ仕方ねえな。俺が追ったとしても、その後何も出来ないから仕方がない。お前の言う事を聞いてやる）

「頼んだぞプラム」

「ウォン」

プラムは、一吠えするとシユベルクの街へと駆け出した。

頑強な岩盤を割り貫いて断崖絶壁に造られた砦の中に設けられた牢屋の一室にアウラの姿があった。

細い艶やかな桃色の髪の毛と身なりに少々の乱れが見られる。

アウラは、両腕を交差させ、グランソルシエールの禁術書を大事そうに抱え、普段は愛くるしい紫水晶の瞳を鋭く尖らせ鉄格子の向こうに立つ男を睨みつける。

「その禁術書を素直に渡せば、このような牢ではなく、この砦で一番の寝室を用意したものを」

金色の甲冑を身に纏った騎士が薄い笑みを浮かべ、アウラを睨み返した。

騎士の鋭い眼光に気押されアウラは明かり取りに設けられた鉄格子の入る小窓の方へと向かった。

「無駄だ。ここは砦の最上階。地上までかなりの高さがある。この牢に近付ける者など皆無。よしんば、鉄格子を破る事が出来逃げ出そうとしても、その小窓から飛び降りたら最後、肉片にその身を変えるだけの事だ」

逃げる術を失ったアウラは、観念したかのように真一文字に結んでいた口を開いた。

「あ、あの……手洗い場は？」

恥じる様子でアウラは、身を擦って見せた。

「見ての通り無い。ふん！ これはまた古典的な事を」

金色の甲冑を身に着けた男が半笑いで傍らに控えた兵士に顎をしやくって合図を送る。

兵士は、無言で一礼すると何処かに姿を消した。

暫しの間を置きその兵士が戻る。その片手には木桶が握られていた。

「ほれ、これがお前の便所だ」

そう言って鉄格子に設けられた食事を出し入れする小さな格子を開け牢の中へと投げ入れた。

固い岩盤の床に乾いた音を立て木桶が転がる。

「き、木桶ですか……」

アウラは、身を擦り恥ずかしそうに答えた。

程良く離れた木立の中から断崖絶壁を見据える少年がいる。

「ここか……また難儀な皆に連れてこられたもんだなあ……アウラも」

少年は暫くその場で考えてみる。

アウラを浚ったのは、北の神殿で一戦交えた謎の集団か、それとは別の組織か、北の神殿では魔術師の部隊を伴った集団だった。

今回、襲撃を受けた時、この組織も魔術師を伴っていた。

しかし、魔術の系統が明らかに違っていた。

土人形ゴレムを創り出した魔術師の部隊と違う系譜の魔術を扱う魔術師を伴っていたが、その数は一人だった。

謎の集団と今回、アウラと禁術書を狙って来た組織は同じ集団の別部隊なのか、何れにせよ。皆に忍び込むには困難を極める。

何故なら砦付近はもう、魔術師のテリトリー。

感知式の魔法陣を始め、様々な魔術を発動させる陣が張り巡らせているだろう。

もし、魔術師があの人一人ならば、張られた魔法陣の規模に限界がある。

魔術師一人では、北の神殿に現われたゴーレムを創り出す程の巨大で強力な陣は敷けないであろうと考える。

一先ず、ここはプラムが携えた手紙を見て駆けつけてくれるだろう、ランディーの部下二人を待つかしかない。

アウラの命に関わる心配は殆どないと考える。

グランソルシエールの禁術書は、現時点でアウラにしか読めていない。

ランディーの隊が行動を共にしていた中隊の中に魔術師の部隊がいたが、禁術書を紐解くどころか古語を読む事すら出来なかった。

アウラが禁術書の解読に素直に応じれば酷い事をされる事もなく、逆に優遇されるだろう。

しかし、拒否すれば命は取られずとも拷問が待っている事など考える事すら愚かな事だ。

岩内にいる敵の数が分からない以上、戦闘訓練を受けた事もない少年が正面から突入する事など、余にも無謀で自殺行為にも等しい。しかし、少年には幼少の頃から母と共に過酷な旅を続けた経験則がある。

「うつかりこつそり忍び込みたいけど……魔方阵に引つ掛からないようにしないと……仕方ない。使ったばかりで、ちとしんどいけど循環の力を使って魔方阵の位置を見極めるとするか」

少年は、夜陰に紛れて岩肌に取り付き絶壁を登る事にした。

——そうそう時間は残されていない。

少年は、何人も近づけないと、そそり立つ断崖絶壁を見詰めて右眼に巻かれた包帯を解いた。

「う——ん……アウラは上に見える鉄格子の部屋かなあ？　そこからアウラの匂いがする……思っていた以上に大変そうだけど……仕方がない登るとするか！」

砦の外に暗い闇が差す。

月の位置が悪いのか月は小窓からは見えなかった。

「覗き魔さん……プラム」

アウラの目の前で弾丸と矢を無数に浴びた少年とプラムの光景が瞳の奥で残像として浮かび上がる。

鮮明に映し出される程、少年とプラムの安否に絶望を感じる。

——生きていてほしい。

アウラの願いは、せめてプラムを庇った少年のお陰でプラムが無事でいてくれる事。

そう考えれば考えるほど、少年の安否に絶望を感じ頬を涙が伝い止める事を知らず、冷たい床を温かい滴で濡らした。

最上階に置かれた牢の為か、格子のすぐ外には監視の兵士は置かれていないようだ。

牢の中は薄暗く眼が慣れてやっと、部屋の輪郭や粗末なベッドがぼんやり見えてくる。

床に転がったままの木桶も……。

「だ、誰もいないよね？」

アウラは、監視の兵が近くにいないか、確かめるべく大きめの声で独り言を呟いた。

……返事は返って来ない。誰も近くにはいないようだ。

アウラは、床に転がったままの木桶を恨めしそうに見て何度も身を擦った後、意を決して木桶に手を伸ばした。

「……」

木桶をベッドと壁の隙間に立て暫く眺めていたが、生理的欲求は

限界を迎えている。

「し、仕方ないよね……」

暗闇の牢の中に布ずれの音だけが遠慮がちに音を立てた。

「あつ……！？」

小窓の鉄格子に白銀の影がアウラの視界に飛び込んだ。

格子の外にへばりつく少年の顔。

自分の力不足で助けられず見捨ててしまったと思っていた少年の
頬笑みがそこにはあった。

「い、何時からそこに？」

「もう少し前だけど……アウラが余りに気持よさそうな顔してたか
ら声を掛けられなかった」

少年が気不味そうに視線を反らした。

「もうお——！　ばかぁ——！　覗き魔！　エッチ！　変態！　ろ
くでなし——！」

アウラの罵倒が冷たい鉄の鳥籠の中に響き渡った。

「また、俺の呼び名が増えたなぁ」

「でも……生きていてくれて良かった」

アウラの胸中は安堵に満たされていく。

「覗き魔さん？　何してるの？」

「決まってるじゃないかぁ、アウラを助けに来たんだぞぉ」

「あ、のう……また覗きですか？」

アウラは少年を鋭い眼光で睨みつけた。

「何を怒ってるんだ？　覗いたんじゃないけど……見ちゃった事？

あつ！　プラムも無事だ。安心しろ」

「ばかぁ……」

アウラは、小さく呟き言葉を続けた。

「覗き魔さん……良かった生きていてくれてありがとう」

アウラの潤んだ瞳が白銀にブルーマールが映える髪の少年を映し
出した。

「でも、どうやって……ここに？」

「ひっそり、こっそり潜り込んだ。俺はどんな場所でも一人なら何とか行ける」

「なぜ……、あの時、私は覗き魔さんを助ける事が——」

「待たせたな？ アウラ。助けに来た」

アウラの言葉を少年が遮り屈託のない微笑みを向けている。

「どうして……危険を冒してまで……ばかあ！」

アウラは瞳を潤ませ少年を見詰めた。

「そんな顔をするな。約束したから何かあつたら力を貸すって、さあ封印を」

「封印を解いたら覗き魔さんの身体が……」

「心配する事はない」

「でも、一度封印を解いた時から覗き魔さんの右眼は——」

「循鱗の力を使わずアウラを連れてここを出るのは、ちょっと骨が折れる。アウラに傷を負わせない自信はない」

「でも……」

「大丈夫、以前より循鱗は馴染んでる、だから早く封印を」

「……はい」

小さく頷いて震えた腕を格子越しの少年の背中に回した。

アウラを普通の少女と思ひ敵兵は油断したのか、幸い杖は奪われなかった。

魔術書もアウラにしか読む事が出来ず、グランソルシエールの禁術書と通常の魔術書と区別がつかなかったように手元にある。

小さな手に持っている節くれた杖に括られた鐘が、からんゝと小気味良く音を奏でる。

封印は眩い七色の光は輝きを増していく。

少年の既に変ってしまっている右眼がいつそう眼光炯炯としていた。

左眼はやさしい少年の碧眼のまま、やわらかい輝きを放っている。
「さあ帰ろうか、アウラ」

少年がやわらかく微笑んだ。
少年の言葉が胸に響く。

——帰れるんだ。

悲しい時の涙でも寂しい時の涙でも嬉しい時に流す涙とも違った
涙が溢れ出し紫水晶の瞳から頬を伝って落ちていく。

安堵の涙。

アウラは少し考え俯いた。でも、ちよっぴり嬉しい。

「うん」

アウラは小さく頷いた。

砦の下から派手な音と大きな重なる声が聞こえる。

「「我らは名も無き赤の騎士団」」

「アサー」

「マイル」

「「何処の組織か分かんが、アウラ殿を浚った報いと山羊飼いの
少年に対する街の恩義。我らが纏めて返しておこう」」

二人の名乗った騎士団の名に砦の兵士たちは後退りした。

「ブラッディレッド……だと？ 騎士団全員が一騎当千。騎士団と
相まみえた戦場には、赤い血の海が大地に広がって残るだけ……」

「恐れるな！ 腰抜けどもめ！ 奴らも人間。化け物ではないわあ」
金色の鎧の男が、罵声を浴びせ下がり始めた士気を上げる。

「パベル様」

「「パベル？ 金色の鎧！ 貴様もしや、西の騎士団。闇喰らう金
オプスキュリテ・イター色の騎士団隊長、パベル・リンガー」」

「如何にも！ 名も無き赤の騎士団の騎士よ」

パベルが猛禽類のような笑みを浮かべた。

To Be Continued

ゝ 禁術書（ちから）を欲する者たち 〵 特別編 第02話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 >（――）
<

次回をお楽しみに！

く 禁術書（ちから）を欲する者たち く 特別編 第03話

鉄の鳥籠 く 禁術書^{ちから}を欲する者たち く

時折、顔を出す月が雲に隠れ不吉を告げるかのように闇夜を作り出す。

アサーとマイルに緊張が走る。

名も無き赤の騎士団の名を耳にし、気押された兵士たちが恐れるように闇喰らう金色の騎士団^{オプスキュリテ・イーター}も名高き騎士団の一つに数えられる。

——分が悪い。

現時点では、その隊長パベルだけのようであるが、隊長がいるという事は他の騎士たちもいると考える方が自然だ。

「赤の騎士団二人。俺一人で良い」

パベルの顔が狂気の表情へと変貌する。

アサーとマイルは幾分、強張る手で自分の得物を握り直した。

隊長ランディー・ハーニングの実力を知からこそ一瞬、アサーとマイルに迷いが生じた。

他にも名高き騎士団はある。

何れの騎士団も隊長格となれば、それは“化け物”じみた強さを持っている実力者。

アサーとマイルも赤の騎士団の誇りを賭け死しても最後まで勇敢に戦う。

——名も無き赤の騎士団の一員として。

「「いざ参る」」

二人は果敢に戦いを挑んだ。

「お前たち如きでは、剣の錆び落としにもならん」
パベルが腰に帯びた剣の柄に手を掛けた。

「下が騒がしくなってきた。早く封印を」

「う、うん」

アウラは頷くと手にしている節くれた杖を振った。

——からん ♪

「アンスズansuz・パースperth・ナウシズnauthiz・オシラothila・フエイfe
ヒューhu・ティワズteiwaz・ソウェイルsowelu・ウルズuruz」

（秘め事を受け取りなさい。戒めを放ち所有者の下に導き完全なる力を）

アウラは頬を赤らめ静かに紫水晶の瞳を瞼の下に納め、祈るように控え目な胸の前で両手を組んだ。

やや、顔を上向きに薄く開いた唇を突き出し、その瞬間を待った。格子の間から伸びた少年の手が、アウラの腰を引き寄せる。

アウラは鉄格子越しの少年に唇を委ねた。

以前のように強張ってはいない。

冷える鉄の鳥籠に幽閉されているせいか、瞳を閉じていても感じる少年の僅かな温もりが徐々に近づく事を赤らんで熱くなった頬に伝わる。

細い腰を引き寄せた少年から伝わる腕の温もりと共に体中が熱くなる。

それとは別に何時ぞやのような循環の七色の輝きを瞼の内に感じながら、母に抱かれるような温もりを感じ捉えられ幽閉されてからの恐怖や不安が取り除かれていく。

アウラの唇が少年の唇の温もりを感じ取る。

重ねられた唇に呼応するかのように少年の左首筋に施された戒め

が輝きを増した。

少年の唇が名残惜しそうに離れる。

アウラの唇もまた名残惜しそうに僅かに震えていた。

「アウラ？ 封印に口づけを」

格子に張り付くように左首筋の紋章を差し出した。

少年の首に細い腕を絡ませ大切な物を扱うように引き寄せ六芒の紋章に唇をあてがった。

七色の光が解き放たれる。

最後に甘噛みして紋章から唇を遠ざけた。

少年は七色の輝きに呑み込まれ姿を消した。

パベルの剣が蛇の如く剣筋を変えアサーとマイルに襲い掛かる。

「間合いが掴めない」

「毒まで仕込んでやる」

「俺の蛇神の牙からは逃げられん。何人となりとバイパーエッジもな」

毒を持つ刀身は節を持ち変幻自在に剣筋を変えるパベルの剣はさながら鞭のようでもあった。

鞭とは違い、その両の刃が身を切り刻む。

流石は名も無き赤の騎士団の精鋭ではあるが、パベルは二人の更に上をゆく。

「アサー」

マイルがアサーに声を掛けた。

「マイル」

「そろそろ、我らも本気で掛らねば、不味い事になる」

「赤の騎士団の名誉を泣かす？ 事になるかい？」
アサーが問う。

「いや、負けて生きるも死ぬも隊長に大目玉を喰らう事になる」

マイルが苦笑を浮かべ答える。

「それだけは、御免こうむりたい」

「同感だ。マイル」

「何てったて、うちの隊長が……」

「一番おつかねえ」

声が揃う。四の眼光は更に鋭くパベルを睨みつける。

「行くぞ。アサー」

「分かってる。マイル」

二人は阿吽の息で行動を開始する。

「剣がうねるなら、うねらせなければいい」

間合いを測り距離を取る。

これまでの戦闘で得たパベルの剣の最大長を思い起こす。

伸びた剣が元に戻るまでの時間をイメージし計る。

剣の最大孤を反芻する。

「行くぞ！ アサー！」

「あいよ。マイル」

「我らが奥儀その身に受けよ！」

「笑止な事を」

「今必殺の——」

雄叫びを上げ二人が剣を構えた。

「ガルウウ！ ウォン」

何処からともなく、闇夜の中から一筋の矢が現れパベルの顔面を鋭い牙が掠めた。

視角からの攻撃。

二人に注意を払っていた事が災いし気配に気づくのが遅れた。闇夜も手伝い流石のパベルもかわす事が精一杯のようだった。

パベルは自分の頬から滲み流れる血を拭って口に含んだ。

「このくそ犬がああ！」

パベルの剣がプラム目掛けて振り下ろされた。

プラムは、その剣筋から跳ねるように身をかわす。

しかし、パベルの手元でその剣筋は自在に変化させられる。

パベルが手首を軽く捻ると剣筋は獲物を追う毒蛇のようにプラムの後を追う。

プラムは、人には不可能な体裁きを見せ襲い掛かる毒牙を難なくかわす。

「やるな、あいつ。獣の動きとは何とも恐ろしいものよ。人は重心を腰に置き膝で動きを決める。獣は腰の重心ごと全身の方向を変え、える事が出来るか」

「アサー！ 我らも」

「分かったマイル」

「奥儀！ 今必殺の——」

二人の頭上で七色の輝きが放たれ、輝きを増していく。

「あれは、あの輝きは…… チツチ殿が放っているものなのか？」

——頭上で眩い七色の輝きが弾けた。

それと同時に砕かれた岩が頭上から降り注ぐ。

「退避——！」

これまで名高い二つの騎士団の隊長と騎士二人の戦いに魅入られていた、砦を守る兵たちの部隊長の一人が声を上げた。

蜘蛛の子を散らす如く、その場から散り散りになる兵士たち。

「ちっ！ 何事か」

パベルが部下を怒鳴りつけた。

頭上には七色の光の球体が輝いている。

「はっ！ 何者かが最上階の牢に侵入した模様です」

「間抜けか！ お前たちは！ 易々と侵入されたのだと」

「砦内に侵入された形跡はありません」

「では何だ？ 何者かが断崖絶壁を登ったとも言うのか！」

「はい。そうとしか考えられません」

パベルは忌々しげに唇を噛んだ。

「折角手に入れた禁術書とそれを扱える魔術師をこつも易々と取り返されたのだと？」

パベルは自分の頭上から降り注ぐ砕けた岩を剣を振りまるで呼吸

をしているかの如く砕いていく。

「うん？ 何だ？ 光が形を変えていく、だと」

七色の光はドラゴンの姿へとその形を変えていく。

「あれが古のドラゴンなのか」

封印を解かれドラゴンが、その姿を現した。

文献に伝わるような生物ではなく、鱗一枚一枚が透明な水晶のようで翼も蝙蝠の羽のようではない透明な同じ鱗が翼の形を成している。

透明に見える全身からは七色の光を放っていた。

「アウラ、行くぞ」

「はい」

アウラを背に乗せ滑空するドラゴン。

滑空し地面擦れ擦れで巨体を持ち上げ二人と一匹の騎士を両腕と巨大な顎に銜え飛び去った。

「くそ！ 忌々しい」

パベルの顔が怒りに満ちる。

しかし、飛翔するドラゴンを追撃する手立てはない。

よしんば有ったとして追撃し返り討ちに遭うのは藪蛇だ。

パベルは齒噛みして見送るしかなかった。

程無く距離を取ったドラゴンは着地しアウラたちを降ろした。

「ありがとう。覗き魔さん。元の姿に戻しますね」

アウラは封印の詠唱を口にしようとした。

「ちょっと待った」

ドラゴンの真紅の眼がアウラの視線から外れ砦の方角を睨んでいる。

次いで、その巨体を砦の方向に向けた。

「悪戯が過ぎる連中に素敵な贈り物を送ってやろつかなあ」

「贈り物なんて勿体ないです」

アウラが頬を膨らませた。

（レディを化粧室もない牢に閉じ込めるなんて許せない！ 年頃のレディなんだからね！）

「アウラに手洗い場代わりに木桶を渡すなんて輩は、俺が吹き飛ばしてやる」

「へえっ！ あの時…… 本当は暗くて見えてなかったよね？ お、音とか聞こえなかったよね？ ちょっと！ 聞いてるんですか！」

ドラゴンは、辺りで喚き散らすアウラを余所に首を伸ばし、ブレスの体制を整える。

青紫の稲妻を全身から発し喉元へと収束していく。

喉の奥に一粒の水晶の原石のような鱗が収束された青紫の稲妻の中に現れた。

臨界まで収束し伸ばした首に走らせ同時に一粒の鱗を吐き出した。吐き出された鱗は閃光となり砦に向かい放たれた。

ピキイーン。

甲高い発射音を残しオレンジの残光が跡を引き衝撃波が巻き起る。

閃光の過ぎた後には沸点を超え溶けた大地が輝いている。

砦に命中した閃光は程無くして消え去った。

砦跡は光跡と同じく溶けた岩が円状に光を放っている。

「うあ——！ 綺麗」

「贈り物は届けた。元に戻してくれ、アウラ」

アウラは、ドラゴンの傍らに近付き再封印の詠唱を始めた。

「ありがと？ 助けに来てくれて」

からん ♪

「パースperth・ウルズuruz・ベルカナberkana」

（秘め事よ。力を戻しなさい）

アウラは紋章に口づけを与えた。

「なっ！ 何故？」

ドラゴンから少年に姿を戻す。

「うん？ また何処か俺の身体が、ドラゴン化してるのかぁ？」

「ち、ちち違います！」

「それは良かった」

少年が碧眼の左眼を反らせた。

「何故？ 裸なんですか！」

真っ赤に茹で上がった顔でアウラが怒鳴る。

「ドラゴンの封印を解いたんだぞぉ？ 着ていた服は破れ塵と化し
たに決まっている。これでおあいこだ」

「何が……ですか？」

「ほら、あの時、木——」

からん ♪

「チツチのばかあああ！ プラムううう」

「待て、プラム……痛てえ！」

少年の尻に立派な尻尾が生えた。

一糸纏わぬ生尻に……。

からんちゅ ♪ 魔術師の鐘 特別編 鉄の鳥籠 禁術書^{ちから}を
欲する者たち 〵

Fin。

ゝ 禁術書（ちから）を欲する者たち ゝ 特別編 第03話（後書き）

最後までお読み下さいり誠にありがとうございました。 >（――）
<

次回、幕間。 山羊飼いの少女と羊飼いの少年の甘酸っぱいほのぼ
のとした一日。

次回をお楽しみに！

く グランソルシエールの禁術書 く 幕間

やわらかな日に降る雨

無事に出産時期を終え、初夏が近付くと羊毛の刈り取りが始まる。収穫祭の間に行われる放牧者たちが腕前を競って指定された街や村を回り通過書に判を貰って集める。

期間は五日間、回る場所は十カ所。

どれだけ早く、どれだけ多く、どれだけ失わずに回れるか競うレースがある。

「……と、とと桃源郷！ 痛っ？」

びもくしゅうれい

眉目秀麗な顔立ちに白銀にブルーマールが映える髪、碧眼の瞳の少年が尻に起こった異変で目を覚ます。

鋭い痛みが尻に走った。

程なくして節くれた杖に括りつけた小気味良いカウベルの音を響かせながら、小柄な人影が家畜舎から羊の群れを追い出している姿が眼に映る。

右手に節くれた杖を持ち、全身を覆うフード付きの茶色のローブを纏い歩く姿は、一見魔術師のように見える。

「あつ、アウラだ。放牧に出るのかあ？」

「うん、収穫祭で行われるレースに向けて訓練しているんです。チツチは、こんな所でお昼寝？」

「昼間に寝るから、昼寝なんだよなあ？ やっぱり……」
チツチは、首を傾げ考えた。

「そんなどうでもいい事しに真剣に悩まないでください！ それよりレース出ないの？」

「う——ん？ 出ないかなあ」

「つまらないなあ、チツチが出れば優勝も夢じゃないのに」

「首筋の封印が循環^{じゅんりん}が疼く何か悪い予感がするから、何か起きるかも知れない。気を付けて行つて来いよ」

「心配してくれるの？ 一緒に来てくれる？」

アウラがおどけた顔をして言った。

「さあ、どうだかなあ」

「な——んだ、つまんない。……暫く会えないね……チツチ」

小さな声でアウラが呟き俯いた。

「野宿もするのかあ？ 一人じゃ寂しいだろ。俺も行つてやろうかあ」

「もお——、素直じゃないなあ……、でも今回は遠慮します。

魔物より覗き魔さんを連れて歩く方が危険ですから」

「あつそう……、良く分かつていらつしやるなあ、魔物や獣は恐ろしい。でも一番怖いのは人だからなあ、ある意味。……何かあつたら駆けつけてやる、気が向いたら……気を付けて……絶対無事に……

……帰つて来い……よなあ、アウラ」

今にも塞がりそうな^{まぶた}瞼を無理やり開きながら、チツチは言葉を紡ぎ出した。

「大袈裟過ぎます。……、そんなに心配？」

アウラが恥じらいながら、かわいらしい顔を近付けた。

「行つて欲しいのかあ？ なら素直に言うべきだ」

「魔物は大丈夫！ 知ってるでしょ？ それに私には頼になるナイ^{ブラ}トがいるから」

「そのナイトとやらを放してくれないかなあ？ 惰眠を貪っていた俺のいやらしい……違った。楽しい夢から目覚めさせてくれ、今し方から俺の尻で尻尾になっている……こいつを」

チツチの尻に毛並みの良い大きな尻尾が嬉しそうに尾を揺らしている。

「すっかりプラムに気に入られたみたいですね？ 人見知りが激しい子なんですけど」

アウラがやわらかな笑みを浮かべた。

「いい迷惑だ……まったく。こいつも俺と遊んでほしいなら、尻に噛みつかなくてもいいのになあ」

チツチは、尻の尻尾を放そうと格闘し始める。

「チツチ……、大丈夫だよな？ チツチの循鱗が狙われたりしてないよね」

不安を含んだ弱々しい声でアウラが尋ねた。

「力を欲する者たちは沢山いるからなあ、何時狙われても不思議じゃない。でも、まあ大丈夫じゃないかなあ。ここには王国から直々に派遣された騎士隊が常駐しているし、一般学生の他に騎士を目指す兵士養成科の連中や技術錬金研究科、その他諸々と、俺たちがいる特殊職業育成科……他の科の奴らには、通称、特別能力育成科なんて言われてるけど……俺たちみたいな変な人間もいる。魔物単体に襲われても、ちょっとした軍隊が来ても、びくともしないさ……アウラ？ もしかして俺を気遣ってるのかなあ？ それよりアウラは、自分の心配をした方がいい。グランソルシエールの禁術書を持っているからなあ」

「チツチが言う、その変な人間に私は入ってるのかなあ？」冗談ですよ。私がチツチを気遣う訳ないじゃないですかあ！ チツチはどんな事が起こっても、いざとなったら如何にかしちゃうんだから……一人だったら……」

アウラの水晶石の瞳が潤み出してきている。

「アウラは、馬鹿だなあ……封印を解いて循鱗を解放すれば雑作もないんだけどなあ……、生憎自力で解けないし循鱗の事を知っているのは、あの一団とアウラしかないはずだから、まあ、大丈夫じゃないかなあ、それに万が一の時、一人では出来ない事もあるさ……アウラにしか頼めない事も、アウラにしか助けを求められない事もある」

「で、でででも！ 万が一何かあったら私が傍にいないと……へえ？」

「だから、そう言っている。まあ、でも二度封印を解いたからかな

あ、徐々に循鱗の恩恵を使うコツが分つてきたし、アウラがいなくても何とかなるさ。それにいざとなれば――」

「あっそ！ い、いざとなれば誰かに、からん」 チュ ってして貰えばいいですもんねえ？ ここには私なんかより強力な魔術師が沢山いるんだし……美人やかわいい子もいっぱい、いますしねえ」

アウラが眼を尖らせ頬を膨らませた。

その頬は、チツチの封印を最初に解いた時の事を思い出したのか赤く染まっている。

「ふむ。そりゃあ、そうなんだが……、循鱗の力の事は他の誰かに知られたくないし循鱗の恩恵を上手く使えば、封印を解かなくても戦える。特能には、ランディーの口利きと恩恵の力を使って魔術に見せたお陰で入れたんだし隠れてひっそり、こっそり、うっかり力を使えば何とかなるさ」

「あの！ 私やソルシエルさん以外でも、魔術師なら誰でもチツチの封印を解ける……の？」

「それは分らない。循鱗の封印を解いたのはアウラが初めてだ。もし試すなら女の子の方がいいかなあ、やっぱり……あれは――」

からん、と小気味良い音が頭の上に振ってきた。

「なんだか、むかついてきました！」

アウラの頬が空気をいっぱいに孕んで膨らませていた。

「おまつ……、いきなりなにしゃがる」

「ふん！ 私がいなくても何とかなるんならいいよね」

チツチは、アウラの言葉に違和感を感じ、アウラの様子が少しおかしい事に気付いた。

「お前、なに怒ってるんだ？ 着いて行ってほしいならそうしてやるのに」

「ばかあ！ チツチなんて……チツチなんて……いざとなったら誰かに、からんチュ して貰って魔物にでもドラゴンにでもなっちゃえばいいんです」

「アウラ、何か隠してるだろ？ 放牧の訓練なんて嘘だろ？」

「ランディー様が、私の力が必要だから力を貸してほしいとおっしゃって……」

「そう……誰だっけ？ あ！ あの金髪騎士かあ」

チツチは眼を細めた。

「ちょ、ちよつと……ランディー様の下で古語魔術目録、偉大な魔^{グランスルシエ}女の禁術書や他のまだ未解読のままの禁術書の解読を手伝いに……」

「どうして、本当の事を言わなかったんだ？」

「だって……、チツチが反対して怒ると思って……」

「怒るに決まっている」

「えっ！ ……うれ——」

アウラの言葉に言葉が重なる。

「ランディーがアウラの力を必要としているなら行ってもいい。禁術書の力が必要なら解けばいい。俺が怒っているのは、お前が本当の事を言わなかったからだ」

「そんな……、チツチのばかあ——！ 覗き魔、変態、痴漢、チツチなんてもう知らない。嫌い」

アウラの紫水晶の瞳から液体が溢れ出した。

小気味良い音が、からん、と響かせながらチツチの頭上に落ちてきた。

チツチの頭は、ごつんと鈍い音を響かせた。

チツチは、頭を押さえて蹲^{うつすく}る。

アウラの駆け出した大地を蹴る音が耳に届いてくる。

「嫌いか……、何か大嫌いより……本気ばくつて嫌だなあ……それに……呼ばれ方のバリエーションに……なんか痴漢が追加されたなあ、俺の記憶にないなあ……もしかして記憶置換？」

チツチは頓珍漢な事を口走っていた。

からつ、と晴れ渡る青天を見上げたチツチの眼から雨粒が落ちた。

く グランソルシエールの禁術書 く 幕間（後書き）

最後までお読み下さい誠にありがとうございました。 >（――）
<

からんちゅ♪魔術師の鐘 く グランソルシエールの禁術書 く
を御愛読下さいまして誠にありがとうございました。 >（――）
<

続編 からんちゅ♪魔術師の鐘 第一章 をお楽しみに！

新たな展開で始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6099f/>

からんちゅ♪魔術師の鐘 序章 ~ グランソルシエールの禁術書 ~

2011年8月15日03時30分発行